

自立した女と男を
人間らしい生活を
差別のない社会を
育み 創り出す

We

ウイ
冬増刊号
1989

新しい家庭科

89年We夏季フオーラムの記録

ゆたかさを紡ぐIII

—自然との共生を求めて—

I 自然との共生を求めて

講演 水俣病における差別と人権
自然と人間の共生 —水を考える—
シムポジウム
授業 環境破壊と闘うことを授業する

原田正純
広松 伝他
田中裕一

II 人と人、人と自然の共生を求めて

III 人との出会い、深まる関係

各分科会報告

はじめのこゝば

暮らしのなかの豊かさを紡ぎながら、山形・大阪とまわってきたWe夏季フォーラムが、今年には熊本の阿蘇で開かれました。

自然に恵まれた地でありながら、世界にその名を轟かせた「水俣病」を発生させた地、熊本……。人の暮らした「水俣病」を優先させても

や命よりも企業の利益を優先させても痛みを感じない土壌をもつ熊本……。しかし、そんな熊本で、人が人として暮らせる世の中をめざし、しこしこ生きつづける人がおり、動きがあります。暮らしにおける真の豊かさを問いつつながら「自然との共生」を、わが暮らし、わが生き方で実現しようとしている人であり、動きです。

89 We夏季フォーラムでは、熊本におけるそのような人や動きを通して、再再度、暮らしのなかの豊かさを紡ぐことにしました。

まず、水俣病の原因調査からずつかかわってこられた原田正純さんの講演。ろうそく一本の闇の世界でくり



広げられる、水俣病での漁師や患者の暮らし……。さらに、反公害、反差別で貫かれ、権力と対峙した緊張関係下での「水俣病、およびその後の環境教育」の実践報告。これからの環境問題ともいえる「水」についてのシンポジウム。そして、部落解放、反原発、食の安全、女と男の関係等々、「自立した女と男を、人間らしい暮らしを、差別のない社会を、育み創り出す力を培う」分科会……。

「子どもたちに、人間らしい生活とは、どんな内実を持つものなのかを知らせ、その力を創り出す力を培いながら、生活をいとおしむ感受性を豊かに育みたい。男も女も、生きる上で一番大切なことは何かを、学校教育のなかではつきりいつかませたい。……自分の生を、誰かによっておとしめられたくない、差別のない社会を築きたい」あなたに、We夏季フォーラムは何を提起できたでしょうか。

(89年夏季フォーラム熊本実行委員長 桑畑美沙子)



'89年We夏季フォーラム

於阿蘇簡易保険保養センター

(熊本県阿蘇郡一の宮町宮地5936)



●プログラム

8月4日(土)		午後12:15	昼食
午後 1:00	受付 ★やあ、ようこそ	13:30	シンポジウム ★ばうけん
2:00	開会 なかよくなろう		「自然と人間の共生ー水を考える」
2:30	<全体会>原田正純氏講演		広松 伝、後藤誠治、伊藤キクヨ
	「水俣病における差別と人権」		金子 博
5:30	夕食	17:30	夕食
7:30	<一人芝居>砂田明 ★たんけん	19:00	<授業>田中裕一
	「天の魚」		「環境破壊を授業する」
	石牟礼道子原作「苦海浄土」より		★ちょっとスリルなよる
8月5日(日)		21:00	各地のウイの会交流会 この指止まれ式交流会
午前 6:00	朝の散策「阿蘇の朝」	8月6日(月)	
7:00	朝食	午前 7:00	朝食
9:00	分科会 ★でかけてみよう	9:00	全体会「フォーラムを顧みる」
	1. 部落解放と私	11:30	閉会 ★Weのアルバム
	2. 熊本の家庭科教育		じゃあ、またね
	3. 熊本の女性史研究	14:00	実行委員と有志による反省会
	4. 野外コース「阿蘇の野草」		
	5. 土と命を守る熊本の活動		
	6. 原発やめて、いのちが大事		
	7. 夫婦別姓を考える		
	8. 女と男、女と女、男と男、ぶ つかりぶつかり何かが変わる		
			★印は子ども活動

We
ウイ



1989.冬増刊号

ゆたかさを紡ぐIII

—自然との共生を求めて—

全体会

I 自然との共生を求めて

講演 「水俣病における差別と人権」 原田正純
●まとめ 根津公子 4

シンポジウム 「自然と人間の共生」—水を考える—
広松 伝・後藤誠治・伊藤キクヨ・金子 博
●まとめ 蔡 和美・川名はつ子 29

授業 「環境破壊と闘うことを授業する」 田中裕一
●まとめ 西内みなみ 47

一人芝居 「現代夢幻能 天の魚」 砂田 明
●まとめ ごじらりょうこ 58

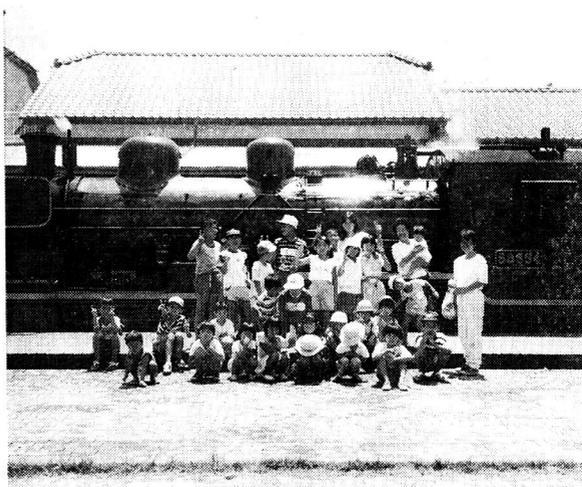
分科会

II 人と人、人と自然の共生を求めて

- | | | | |
|---|-------------------------------|-----------|----|
| 1 | 部落解放と私 | 若竹キミイ | 62 |
| 2 | 熊本の家庭科教育 | 宮崎春美・磯部幸江 | 66 |
| 3 | 熊本の女性史研究 | 青木喜代江 | 73 |
| 4 | 野外コース「阿蘇の大自然と野草をたずねる」 | 梶原公子 | 77 |
| 5 | 土と命を守る熊本の活動 | 入江一恵 | 81 |
| 6 | 原発やめて、命が大事 | 鈴木昭彦 | 86 |
| 7 | 夫婦別姓を考える | 本田和代 | 90 |
| 8 | 女と男、女と女、男と男
ぶつかりぶつかり何かが変わる | 北川好美 | 94 |

III 人との出会い、深まる関係

- 子どもたちとともに
熊本大学サークル
「青い鳥」のグループ 98
- 有意義だったフォーラム、楽しかったフォーラム 100
- フォーラム実行委員として 103
- 実行委員会日誌 110



講演

「水俣病における

差別と人権

原田 正純



I 水俣への関わり

— 水俣を通して

— 自己が見える —

私は学生の頃いい加減な学生でして、あんまり医者になりたくなかったのですけれど、親父が医者をしていましたのでそれから医者になったのです。しかも、血を見るのがいやで、血を見なくていい科は何だろうと一生懸命見つけ、それで、精神神経科を選んだのです。その研究室に私が入ったのは、60年でして、水俣病の歴史からいくと、その原因がちょうど追いつめられた時でした。そこはねずみやら猫やら、もう動物小屋みたいなものです。私は朝から晩まで動物の餌やりで終わつたのです。餌をやるのはいいんですけど、実験ですから、いつかは殺さねばいけない。それが、憂鬱でした。そんな時声がかかり、水俣に逃げるように行つたものですから、決して最初から水俣のことに関心を持ってやろうとしたわけでもないので。

ただ、水俣を訪れているうちに患者たちとの付き合いの中で、いろいろなことが見えるようになってき

たのです。水俣というのは一つの鏡だと思っただけです。その水俣という鏡を知ることによって、私たちの周りにあるいろいろなものが見えてくるのです。例えば、自分自身の研究のあり方とか、自分が一体どっちの側に立って、何をしようとしているのかとか、あるいはもっと言うならば、私たち自身の生きざまみたいなものまでが、そこに映し出されていくのです。そういう意味で、私は水俣のことをやりながら、次第に水俣から離れられなくなったのです。

II 水俣病の

ほんとうの原因は？

水俣病との関わりの中で、ここ二十年位ずっと私が考えてきたことは、水俣病のほんとうの原因は何だ？ ということです。

「原因は何か」と言うと、「有機水銀中毒」という答がありますね。これも事実ですから、医学部の学生だったら満点をやらねばなりません。しかし、確かに有機水銀中毒ですけれども、果たしてそれだけが原因なのか、ということになります。そうするとそこにはもう一つ、「チツソが有機水銀を含んだ廃棄物を無処理に、自然の中に流したからだ」という言

う方があります。それも原因の一つです。しかし、どうもそれでも水俣病のすべての原因は説明がつかないのですね。確かに、有機水銀中毒であり、チツソがたれ流したのが原因ですけれど、それは小さな原因であり、中位の原因なので、もっと大きな原因があるはずなのですね。

なぜ水俣病が起こらなければいけなかったのか。そして、なぜ被害が最少限にくい止められなくて、最大限に拡大されてしまったのか。そして今なおたくさんの人たちが、救済されずに、救済の枠の外に放置されているのか……。

現在、熊本、鹿児島両県が正式に認定した患者が約二千二百人です。そのうち、すでに九百人、半分近くの人が亡くなっています。それから、棄却された人が約一万人、未だに白黒つかず、審査会が保留としている人が約四千人おります。

そして、棄却された一万人の中の五分の一、約二千人が全国各地で救済を求めて裁判を起こしています。この裁判では



今のところ全部患者側が勝っています。私は裁判官がそれほど民衆（患者）の味方だとは思わないのですが、水俣病に関してはそれほどどうしようもない位に、問題が行政や

企業にとつて不利な状況だということ。つまり、どうにも逃げられない位に無茶苦茶な無責任なことをやってきているということ。だから行政、企業は、負けた裁判は控訴審へ引き延ばし、逃げるしかないのです。いずれ結着がつき、何回しても勝つだろうと思えますが、それまでには、たくさんの患者が亡くなってしまふだろうと思えます。

結局、結論から申しますと、水俣では、ごく当たり前のことが当たり前にやつてこられなかった、ということ。水銀という毒物をたくさんの人たちが魚を捕っている海に流すのは、注意しなければいけない。病人が出たとなれば、それは拡大しないように、早く小さいうちに押さえなければならぬ。こういう当たり前のことが当たり前になされてこなかったのです。

それはなぜだろう、ということですが、結局、相手の立場になつていなかった、人間を人間として見なかったということだと思えます。どんどん生産を上げ、利益を追求していくためには、貧しい漁師の一人や二人はどうでもよかったです。人を人と思わなかった。そういうやり方ですね。

四、五年前に振動病と言う、チェンソーを使って起こる職業病の裁判の一つの判決があったのですが、その判決の中で、裁判長があつと驚くようなことを言っています。「あんな便利なものを使えば、何人かは病気になるのはやむを得な

い。当たり前ではないか」と。

つまり、たくさんの方が便利になるのであれば、それは、何人かは犠牲になるのは当たり前だと言っているわけです。これは恐ろしいことです。しかし、それは振動病の裁判官だけの話ではなく、そういう考えでたくさんの人たちが切り捨てられていったわけですね。

その切り捨てられた人たちとは、常に弱い立場の人たちであり、常に、東京という中央・権力の座から見れば、僻地の過疎化していく田舎が、その対象になったのです。また、それは世界的に見れば少数民族であり、発展途上国であるのです。

それが、私の今日の話の結論の部分です。

Ⅲ 水俣病における責任

不知火海は自然に恵まれ、魚の豊富な海で、その周辺には60年には約二十万の人たちが生活していました。海とヘソの緒で繋がるような、海に依存した生活をしていました。

さて、水俣病の責任というのは、さっき話したのと少し言い方を変えると、次に挙げる三つがあると思うんですね。

(1) 起こした責任

「知らなかった」は人体実験の思想

第一番目は起こしてしまった責任です。水俣病という具体的な病気が起こるか起こらないか、そんなことは初めから分からなくていいのです。しかし、毒物を流すのだから何か変わったことが起こりはしないだろうか、注意する責任（義務）があったのです。チツソは第一次訴訟の時、「水俣病が起こるということは知らなかった。水俣病は熊本で初めて起こったんだから、我々は不可抗力だ」と言い張ったのです。

これは、私たちから言えば、人体実験の思想です。今からどいどん新しい化学物質が開発されてくる。その度に人間がどういふ影響を受けるか、どういふ病気になるか、誰も知らないうわけでしょう。「知らなかったから仕方なかった。この次から注意します」では、どうしようもない。毒物を流すのだから何か影響が起こらないかと、調査しながら注意をしなればいけなかったのです。

「魚抜ききの食事は考えられない」

「'56年に魚が危ないということが分かったのに、どうして魚を食べたんだ」と、よく聞かれます。不知火海沿岸の海岸というのは水田がないのです。今は山を切り拓いて甘夏を作っ

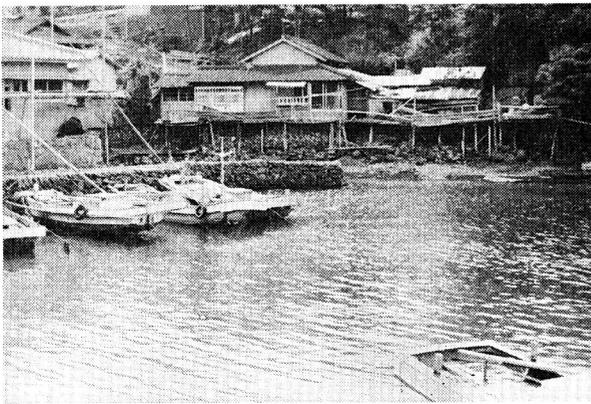


図1 患者さんの家（'62年頃）

ていますけど、昔はわずかな畑で芋をつくり、芋と魚で暮らしていたのです。だから、魚を食べないということは考えられなかったのです。私たちが調査に行った頃は、水俣市からこれらの漁村に入るのには船で通った方が近かったのです。山越えの陸路が大変な陸の孤島でしたから、そういった環境の中で魚をたくさん食べたということは、決して彼らの責任とか罪とかではないのです。魚しか食べるものがなかったのです。

図1は最初に患者さんが発見された田中さんの家ですが、非常に象徴的ですけれど、こんなふう窓から魚が釣れるように海とは切っても切れない暮らがあったのです。子どもたちは、この浜で貝を拾ったりし

て食べたのです。

これは(写真略)ある日の漁師の家の食卓ですけれど、ビールときゅうり以外はみんな海からとれたもの(魚・貝類)ですね。

日本人の一日平均魚を食べる量は、九十gと計算されています。だけどここの漁師たちは、五百gくらいかそれ以上、女性はちよつと少ないけども、それでも日本人平均の三倍位。二百〜三百g位食べることがわかっています。冬よりも夏の方がたくさん食べていますが、いずれにしても一日九十gという平均値は、不知火海の人たちにとっては非常に例外的な少量です。

ところで、魚の安全基準は何で計算するのかと言うと、残念ながら、平均値です。しかし、安全性ということから考えると、平均ではためなのです。平均的な人に起こらないだけでは、困るのです。極端にたくさん食べる人が安全でなければ、あるいは最も弱い人、たとえばおなかの子どもが安全でなければ、安全性というのは保証されないわけです。そのことは重要なことです。

〈チツソの地域支配〉

そういう自然と切っても切れない生活の所に、世界でも有数な技術を持った近代工場が来たのです。

チツソの土地は、もと塩田だったのです。明治の終わり頃に、塩業がダメになると、今と全く同じで、水俣の人たちは企業誘致を考えた。出水市と水俣市で競争し、その誘致合戦に水俣が勝ったのです。しかし、勝つ時の条件は何かと言ったら、これも今と同じで、塩田の跡地を安く提供するという事。それから電気を出水市から引張ってくるための電柱を全部市が寄付するという事でした。それで、水俣にチツソをもつてくることに成功したのです。

そして、その企業を中心にした町づくりという事を考えていくわけです。それは一時、あたかも成功したかのように見えるんです。チツソはどんどんどんどん、ガン細胞みたくに水俣の地域の中で拡がっていった。そして海の汚染が問題になって漁民が抗議をすると、——すでに大正年間に漁業補償の問題が起こっています——札幌で解決する。札幌で解決して、「今後一切不平を言いません」というのを必ず一筆とする。そして、その漁民が売り渡した海をまた埋め立てて、自分の土地をまた拡げていったのです。

そういうふうに拡げていくことが一概に悪いと私は言っているのではない。問題は、そのようにして企業を中心にした町づくりをしていく、その中で町が企業に完全に支配されていく、そのことが問題なのです。

24年、チツソが水俣に侵出して二十年になると、もう、町

長はチツソの社員がなってしまうのです。それから、町議会議員に七人もなってしまう。また、水俣病が起こった当時の市長は、皮肉にもアセトアルデヒドのプロセスの特許をとった元工場長だったので。そのようにチツソは市長を押さえ、市議会議員を押さえっていくという過程の中で、水俣病が発生したのです。

だから、水俣病がなぜあんなに長い間、被害を最少限に食い止めようともせずに放置され、しかも今日まで問題が解決していないかという、そこには、一つには、企業による地域の支配ということがあるのです。

'26年になるとチツソは朝鮮に進出していくのです。興南工場という東洋一の化学工場を造るのです。チツソの社史を見ますと「用地買収に軍隊と警察が出た。軍隊と警察は我々の味方だった」ということが書いてあります。これは、いかに彼らの事業が国家的事業であったかと、言いたかったわけですね。加えて当然、社員の中には、朝鮮の人と日本人の労働者間の賃金格差がものすごくあった。朝鮮の人は社宅なし、何もなしで賃金三分の一なのです。このようなすごい差別が、人を人と扱わない状況が、その中であつたのです。そしてチツソは更に今度は旧満州(東北)の吉林にコンビナートを造ろうと計画をしていて、ダムができたところで、敗戦になつてしまふんです。これが今また、中国の水俣病を起こし

ている工場なのです。こういうふうにチツソは植民地支配の尖兵として大陸に進出していったのです。

ところが敗戦となり、すべてを失ったチツソはここで立ち直ろうと水俣工場にすごい力を入れた。しかしチツソの体質はそう変わらないわけです。つまりここでは、東京から来た大学出の社員と、水俣地区の海岸辺りから雇った工員とは、給料も身分保障も全然違うのです。そしてそれがまた、決して工場の中だけの差別ではなくて、そのまま地域の中の序列になり、子どもの教育からすべてのことに及んだ。

そういう歴史の中で、だんだん「チツソがなくなると水俣がダメになる」という神話が出てくるわけです。確かに、チツソがどんどん大きくなって地域を支配していく過程ではそうでした。しかし経済学者が分析してみると、少なくとも戦後に関しては持ち出すものの方がずっと多い。

そういうことが分からなくて、例えば、私たちが「そんな隠れていないで、病気になるなら早く申請しなさい」と言った時に、彼らは「もうこれ以上、チツソに迷惑をかけられない。チツソがなくなれば……」と、漁師までが言う。だから冗談に、「あなた、チツソに何をしてもらつたの」って聞くのです。考えるとあんまりないわけですね。確かに、労働者が六千人もいた頃は、魚は多少はたくさん売れたでしょうね。それ位です。あとは、海を汚されて、何もないですね。

しかし、そういう漁師たちでさえ、チツソがなくなれば、という危機感を持っているわけです。それはもう、私たちからみると、本当に不思議なくらい。

そのような構造の中で、水俣病の発生が阻止できなかったのです。そして、起こってもそれを隠してしまつて、被害を最少限にいくとめようとする力にならなかつた。だから、どんどん拡がっていつてしまつたのです。

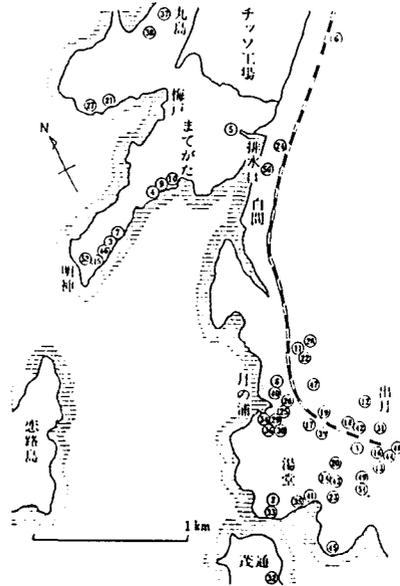
(2) 被害の拡大を許したものは何か

〈熊大による水俣病発見と原因究明〉

熊本大学が'56年五月に、「水俣地区に奇病が出ている」と報告した最初のレポートには、三人の写真が載っていますけど(写真略) いずれも子どもですね。このような重症の子どもたちがたくさん発生したために、水俣病が発見されたのです。しかし、調べてみたら、すでに四十〜五十人の患者が発生していたのです。隣近所にたくさん発生していたので、初めは伝染病が疑われたのです。だけれどもよく調べてみると発生に一定の法則がないわけですね(図2)。したがって、このような発生の仕方は、結論的に伝染病ではないということになります。そして、患者は、水俣湾に面して発生しているということと、しかも湾産の魚貝類をたくさん食べているという共通点がみつかったのです。したがって、湾内の魚が何

図2 初期の患者発生分布(喜田村、一九五六)

○内の数字は発病の順番で伝播性を示さない



かによって汚染され、その魚を食べて起こつたということ、は、すぐに分かつたのです。

では、湾内の魚を汚染したものは何かということになるのですけども、ここには東洋一とか日本一とか言われる規模の化学工場があるわけです。ほかに考えられますか。その化学工場がまず、疑われるのは、当然のことなわけですね。

喜田村(当時、熊大教授) レポートを見ると汚染源が三つ挙げてあります。工場の排水口、屠殺場そして湧き水と。しかし湧き水がなぜ汚染源になるか、まず分からないですね。

それから、小さな屠殺場の汚染と日本で最高と言われる化学工場の汚染と、これもとても比べものにならないわけですね。

となれば、もう最初から原因としてこの工場が疑われたのです。そうであるとするなら、やっぱり工場は原因が確定しなくても排水を止めるべきだったのですね。だけど止めなかった。

熊大の当時のデータを見て、「二・四夕の雌の猫を茂道の患者さんの家に預けた。そうしたら、四十四日目に発病して死んだ」とあります。すごいデータです。そういうデータがありながら、厚生省は「原因が分からないから漁獲禁止はできない」として何もしなかったわけです。このことについては、「やろうと思えばやれた。例えば、水産資源保護法とか工場排水規制法とか、毒物劇物取締法とか漁業法とか食品衛生法とか、いろいろあるので取り締まれたはずだ」と、後に工場幹部の水俣病に関する刑事事件の中で裁判官が述べています。

このように、「原因が分からない」といって対策を立てようとしないうと、原因をはっきりさせることが熊大にとって至上命令になるわけですから、一生懸命原因を追求した。そのためにはまず病気の特徴を明らかにしなければなりません。それで、病気の特徴は明らかになったわけです。

私たちは、病気の原因が分からない時はまず、病気の特徴をつかみます。そして、その病気と同じような報告がないかどうかを、世界中の症例報告をひっくり返して見ていくわけです。そしたら、あったのです。40年にイギリスの有機水銀農薬工場で、労働者が中毒になった例があったのです。その臨床症状と病理所見がこの水俣病に一致したのです。そこで初めて原因は有機水銀中毒と、はっきりしたのです。

しかし、その時チソンは何と言ったかといえ「わが社は無機水銀しか使っていない。それがなぜ有機水銀中毒になるのだ」といって反論をしてきたのです。その反論に対する答を出すのにまた、それから三年位かかったのです。結局、原因がはっきり分かるのは'62年、つまり六年かかったのです。その六年間のロスというのは大変なもので、それはとつても信じられない位です。

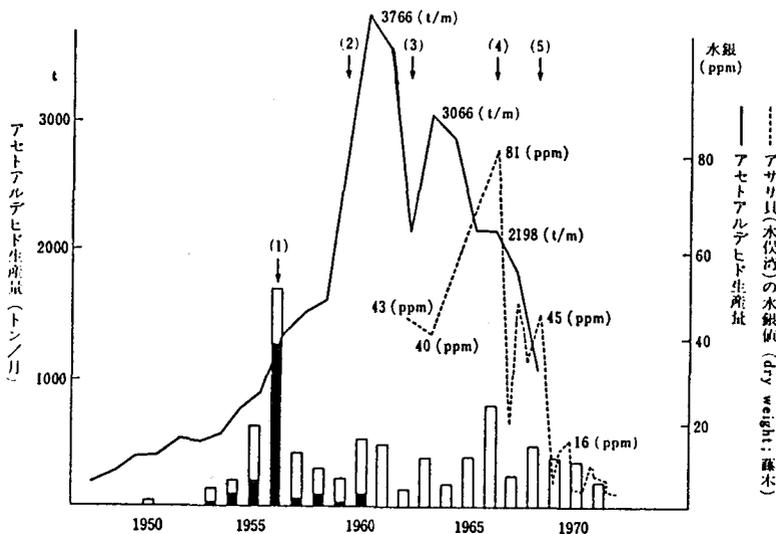
〈チソンの対応〉

これ(図3)は、被害を拡大してきたことの、縮図みたいな図です。

'56年に患者が正式に発見されて、そして大騒ぎになる。しかし漁獲禁止にしなかった。だけれど、あれだけ大騒ぎになればみんな魚を食べないですよ、怖くて。だから、患者の数は一時的に減ったのです。減ったから私たちはチソンはも

図3 アセトアルデヒド生産量と患者数および水俣湾内アサリの水銀値

(1)水俣病患者正式発見, (2)水俣病の原因が明らかになった。(3)チソの労働争議。
 (4)排水を閉鎖循環式に転換, (5)生産停止。黒棒は1971年頃までに正式に認定された急性、亜急性典型例, 白棒は第二次研究班が湯堂, 月の浦, 出月で1973年に新しく発見した患者。



う水銀を流していないと思っただけです。ところが実際はそうではなかった。魚を食べる人が減ったために患者の発生が減ったわけです。生産はむしろ上げているのです。その上げ方たるや、すごい勢いでした。何十倍と上げているのです。

原因が分かったのは'59年ですね。原因が分かったから漁獲禁止をしたかと言うと、その時もしなかった。その理由は、「もう患者が減ったから」と言うのですね。では、生産を停止したかと言うと生産も停止しなかった。排水処理をしたかと言うとそれもしなかった。表面的にはしたのですけど、全然効果のない排水処理をした。

'65年になって、第二水俣病が新潟で起こりますね。そこで初めて通産省は、チソに対して工場排水を改善するよう命令を出すのです。やればできたのです。そこではじめて閉鎖循環式という排水処理システムに切り替えたのです。これは、工場の中の水を工場の中で循環して使って工場外に出さないというシステムで、今どこでも使っています。しかし、それでもやっぱり駄目だった。閉鎖循環式にすれば、理論的には工場から水が出ないのに、なぜ湾内の魚貝類の水銀値が下がらなかったのか(図3)。それは、チソの労働者に聞けばすぐ分かります。「いやあ先生、あれはしょっちゅう詰まるんで、毎日水をジャージャーかけて洗ったとです」「先生、機械ちゅうもんは故障せんとでも思うとですか」と言う

わけです。

その後、68年にやっと生産を停止し、これで初めて水銀値がどんどん下がっていったのです。つまり、図は環境汚染を止めるためには、生産を停止するしかなかったことを示しています。

〈行政の対応〉

いろいろな話をしてくと次第に怒りが湧いてくるのですけど、'68年にですね、なぜか政府は突然「水俣病は公害である」と正式に発表したのです。

その時私はたまたま水俣へ行っていました、ある患者の家にいました。私は「何を呆けているのだ。原因がわかって九年もたった今頃大袈裟に「正式認定」なんてふざけている」と言ったわけですよ。その時の厚生大臣はこの地区出身の故園田直でしたから、「あれは選挙用の点数稼ぎにやったのだらう」とも言ったのです。そしたら、患者さんの家族に叱られたのです。「先生、そんなこと言っちゃいかん。やっぱり私たちには、政府が認定してくれなければダメなんだ」「行政がきちんとしてくれることが、私たちにとって意味あることなんです」とこう言うわけです。患者たちにとって「公害病だといくら先生たちが言っても、やっぱり肩身の狭い思いをしてきた」。地域支配されたチッソ水俣市の中では、肩身の

狭い思いをし

てきているわけです。そこはやっぱり、行政が正式に認めるかどうかで患者たちの生き様は全然違うということ、私は患者から教えられたのです。それならなせもつと早く認定しなかつたかと悔まれます。九年前には原因が分かっていたのですからね。いろいろな資料集めてみた

会社名	工場名	所在地	生産 開始—中止	アセトアルデヒド 生産量累計	未回収水 銀量累計
チッソ	水俣	水俣市	S. 7.5—43.5	約456千トン	約207トン
電気化学工業	青海	新潟県青海町	20.4—43.5	167	54
昭電	鹿瀬	〃 鹿瀬町	11.1—40.1	103	34
鉄興社	酒田	山形県酒田市	14.4—39.1	35	13
日本合成	大塚	岐阜県大塚市	3—39.9	150	8
〃	熊本	熊本県宇土市	19.1—40.4	96	5
ダイセル	新井	新潟県新井市	12.5—43.3	307	5
三菱ガス化	浜松	〃 新潟市	35.5—40.1	38	26

表1 アセトアルデヒド関係工場 全国7社8工場 ('73年6月通産省調べ)

ら、一つ思い当たることがあったのです。通産省が発表した資料によりますと、'68年五月までは日本に、同じようにアセトアルデヒドをつくって有機水銀を流している会社があったのです(表1)。だから私に言わせれば、日本中から同じような工場がなくなつて発表しても影響がなくなるのを待っていたのですね。'59年の時点で、「水俣病はアセトアルデヒド工場から出たメチル水銀による」と発表したら、全部の工場がひっかかりますよね。新潟水俣病が'65年ですが、この時は四つの工場はすでに閉鎖していたのです。日本中がこの時電気化学から石油化学に切り換える最中で、例えばチッソも千葉県に大きな石油コンビナートを造つて、そっちへ移そうとしていたのです。こっちは使えるだけ使って捨てるつもりだったのですよ。そうして、電気化学のアセトアルデヒドの工程というのは、その後日本から消えていくわけです。それを待たせて、'68年の五月、「水俣病の原因は……」と認定をやるわけです。この姿勢こそが第二の水俣病をおこし、被害を拡大した元凶です。

〈我々の力〉

'56年にあれだけの大事件になつたのだから、私たちは当然排水を止めていると思つた。しかし、そうではなかつた。裁判が起こつた時に、労働者、市民、患者も含んで私たちは水

俣病問題を勉強して、それで初めて分かつたのです。研究会に労働者を入れたことによつて、局面が一ぺんに開けた。労働者が私たちの研究会に入ってくるのは、ある意味では非常に勇気の要ることですね。自分の工場のことを言うのですから。しかしそこで一緒になれた時に、水俣病問題は新しい転換をしたと思つています。

それにしても、なぜ工場排水を止め切れなかつたか、これが悔やまれます。もし当時本当に私たちに力があつたなら——いくら猫やねずみの実験をして薬が効くの効かぬの研究をしても、勿論それも大切だけれど——一番てっとり早く、医学的に効果的な行為は、排水を止めることだったので。しかし、私たちはその時、止めきれなかつたのです。止める力がなかつた。また止める発想もなかつた。それは、ものごとが見えてなかつた。ただ患者だけを見て、その背景が見えてなかつた。そういう反省があります。そんなことがあつて、もう被害は最大限に拡大されたのです。

〈差別が水俣病の拡大を助けた〉

話はそれですけど、その頃の水俣はどういう所だったかと言いますと——。今行つてみられたら、きれいな家が建っている。道は舗装され、車ですぐ行けますよ。あの頃は、みかん畑を歩いて越えなければ行けなかつたのです。「自転車賃

して下さい」と言ったら、「どこへ行くの？」と聞くので「茂道へ」と言ったら、「自転車に乗る所ないぞ」と言われたのです。バスで途中まで行って歩いて山道を越えていくと、海に沿って、小さな漁村があったのです。そういう所に入り込んでみますとそれはすさまじい状態でした。

この写真(略)は患者さんが雨戸締めて中に隠れているところです。診療させてくれないのですよ。その理由は二つあるのです。

一つは、「何べん診ても治らんでしょうが」と。確かにそう言われると辛かったです。しかし後で聞くとですね、「診てもらいたかったけどお金がなかった」と言う人もいました。別にそんなつもりで行っていたのではないのですけど。

それからもう一つは、一番大きな理由は何と言ったって、「先生たちがウロウロすると、せっかく皆が忘れかけているのにまた新聞に出て、また魚が売れなくなる。だから帰って下さい」と言うのでした。

私が卒業してすぐの頃でした。どうして、この患者たちがこんなことしているのか、まず分からなかった。この人たちは何も悪いことしていないことだけは確かだと思っただ。先祖伝来魚を捕って食べただけです。それで発病して、それなのになぜ何か悪いことしたみたい隠れて住まねばいけないのかと。私の想像をこえていました。

そういうように地域社会の中で、差別されて「水俣病というの貧しい漁民の病気なのだ」と、漁村に封じ込められてしまったのです。小さく封じ込めることというのは、逆に拡大を許すことになっていくのですね。封じ込めれば込めるほど、何も手を打たないから、實際上、拡大していくわけです。そういうことを、水俣の二十年はやってきてしまったのです。

出水に、柴田さんという魚の仲買人がいたのです。手帳に連日、魚の売り上げを書いていましたけれど、だんだん字が書けなくなってきた。次は、言葉がしゃべりにくくなると、耳が聞こえにくくなって、足もフラフラしてきて、とうとう「これはいかんばい」と、水俣の市立病院へ連れていかれるのです。そこで診た医者がびっくりして、「これは水俣病だ。すぐ入院しなさい」と。それで奥さんは入院するために布団を取りに家に帰ったのですが、そこへ、漁業組合の幹部たちが柴田さんを無断で担いで連れて帰ってくるのです。

その時のカルテには、「病院に連れてきたけど、すぐに連れて帰ってしまった」と、一行書いてあるんです。その一行に意味があるのです。なぜ、漁業組合の人が連れて帰ってきたしまったのか。「今やっと患者の発生が終わり、水俣の話が終わって魚が売れ出したのに、また出水から患者が出たとなれば、また魚が売れなくなる。そしたら、漁民三千人が飢

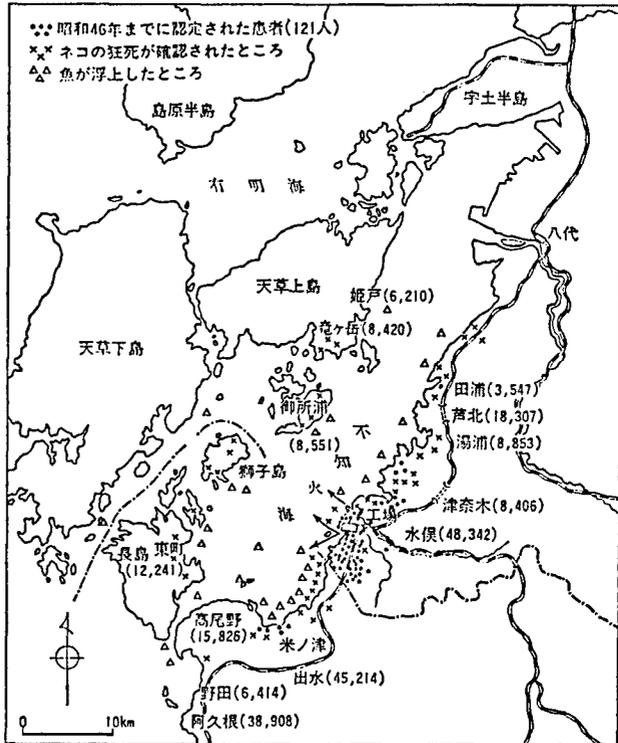
える。だから入院しないでくれ」と。結局、柴田さんはその四日後に自宅で亡くなるのです。たまたま、そのことを書いたカルテを入手したのですが、このカルテの一行にすごい水俣隠しの歴史が入っているのです。

こういう患者はたくさんいたのです。今、認定患者二千人と言いますが、柴田さんたちはついに最後まで認定患者にはならないのです。正式に患者として帳面に載ることはないのです。そういうふうにして当時の患者たちは捨てられていったのです。

(3) 救済されずに なぜ放置されたか

〈患者を切り捨てる審査会と認定制度〉

当時不知火海沿岸に二十万の人が住んでいました。そのうちの半分がたくさんの魚を食べて発病可能の人としても十万人です(図4)。そのうち十人に一人が発病したとしても一万人です。しかし今まだ、二千人しか認定されてないのです。裁判をおこしている人が二千人、水俣病でないとして捨てられた人が六千人です。だから、まあ一万人位の患者がいるのではないかと思うのです。



()内は昭和35年の人口

図4 不知火海周辺

この広汎な水銀の汚染によって、一体人体がどれ位の影響を受けたかを明らかにすることが、私たちの務めであるわけです。それをどう救済に繋げるかは、行政の務めあるいは企業の責任なのです。ところが、それを医学者に押しつけているのです。だから今の審査会は、一人ひとり優秀な先生方

です。しかし、この人たちが十何人集まって、この人を水俣病とするかしないか」という話になると、随分おかしくなってくるのです。結局、六千人の患者が水俣病でないと思われてしまっているのです。しかし、六千人のうち少なくとも、だいたい六割から七割が、有機水銀の影響があると言っている。私は思います。審査会の先生方は、真面目にやればやるほど、その機構の中で、真面目に切り捨てる役割を果たさせられているわけです。

では、そのような認定制度というのがなぜできたかということですが、歴史をさかのぼれば明らかです。59年に水俣病の原因が分かると、チツソは自分の所でもこっそり実験をやったんですよ。猫四百号実験というのですが、その猫が水俣病そのものを呈した。そんな時、当時の県の衛生部長が水俣病患者診査会(のちに水俣病患者審査会へ)というのを作るので。その時何と言っているか。「これから補償の問題が出てくる。その時にチツソは『権威ある先生たちの診査会が水俣病であると言った人でないと補償はしない』と言っている。だから権威ある診査会を作ろう」と言っています。だから、補償するかしないかを判定する機能を宿命的に負わされて生まれたのが審査会なのです。その中で今、たくさん患者たちが病気の苦痛のために苦しんでいるにもかかわらず、救済は一向に進んでいないというのが実情です。

〈脳卒中患者は水俣病にならない?〉

例えば、脳卒中があり、そして同時に水俣病がある。すると、水俣病は捨てられ、脳卒中だけにされてしまうのです。私など患者さんが遠くから歩いて来るのを見て、「ああ、あの人は水俣病じゃないよ。あれは完全に半身マヒだよ。見ただけで脳卒中とわかる」と言ったわけです。そして、ある患者の家族に、「それなら先生、脳卒中の人が水銀の入った魚ば食うたらどうなるんですか」と言われたのです。ぼくはガンと頭を叩かれたような気がしました。公害病というのは、そうなんだ、それこそが特徴なのだ。つまり、汚染地区にはもともと体の弱い人もいる。病気の人もいます。いろんな人がいるのです。そういう人たちが汚染されたらどうなるか。というのが公害病ですね。脳卒中の人が、魚を食べても水銀は毒にならないとなると、それは大発見ですよ。だから、そういう、今までの考え方を変えていかないといけない。その考え方を覚えてくれたのは専門家ではなく、患者さんたちの一言、ですよ。そういうことによつて「あつそうか、これが本当なんだ」と、気がついていったのです。原因が分からなかった時に、私たちは水俣病の原因究明を急ぎました。そのために典型的な重症例だけを集めたのです。ところが、病気というのは、典型的な重症例の底辺にはいろいろな程度の患者が多数存在しているのです。そういう

う人たちが、何万人といることになるわけです。この底辺の部分全体どこまでを水俣病とするかが、問題になっているのです。

〈裁判の中で〉

水俣病三次訴訟で初めて、チツソ以外に国と県の責任を裁判所が初めて認めたのですけど、国と県は控訴して高裁でも負けてまだ最高裁までいきました。その間に患者は死んでしまふのですよ。私は今皆さんに幾つかの話をしたのですが、それだけでも、もう行政の責任は重大だと思ふのです。しかし、まだ責任をとろうとしないから、いろいろな所で裁判が起こり、そして残念だけど、まだまだ患者の苦しみは続くと思ひます。

(注) 東京訴訟、熊本三次訴訟、京都訴訟、関西訴訟、静岡訴訟などすでに原告は二千人を越えている。

しかし、裁判をしていることによって患者たちはまた別の喜びも知っています。たくさんの人と連帯する喜びとか、ものごとをきちんと見極めて闘っていく喜びとか、そういういろいろな新しいものを見つけてがんばっています。

水俣の歴史をかい摘んで話す中で、恐らく皆さんは分かっていただけだと思うのですが、その歴史の中で、人間を人

間として見てくれたならば、自分が相手の立場だったらどうなるだろうと、ちよつと考えてくれたなら、水俣病の歴史は大きく変わっていたらと思うと思います。水俣病の闘いは人間回復の闘いであつたのです。

IV カナダ・インディアン

水銀汚染

次は、世界の中で見たらどうかといひますと、世界中でも、公害の起こる所は僻地で、しかも少数民族であるということが多いのですね。70年に起こつたカナダのオンタリオ州の水銀事件の問題を述べてみます。ユージン・スミスがニューヨークで水俣の写真をやつたのですね。そこに一人の男が尋ねてきて、「我々の所も水銀汚染で大変なんだ、いくら我々が大きな声を出しても政府が動かないので、日本から専門家が来てくれないだろうか」といつたのです。それで、宇井純さん、宮本憲一さんなどと、国際環境調査団というのを結成して調査に行つたのです。それが75年です。

〈カナダ・インディアン生活〉

そこはワビグーン川とイングリッシュ川との合流点辺り

で、インディアンの居留地が二つ、グラスシイナローズとホワイトドックというのがあります。その上流のドライデンという町にパルプ工場があり、それが汚染源でした。

居留地はリザーブと呼ばれて、政府支給のおしきせの家がありません。背番号を打たれているんです。そこに住んでいる限りにおいて、税金も要らない、医療費も教育費もただ。後で水銀汚染の被害調査をやるのですけども、被害調査と言つても彼らは、税金を納めていないものだから自分の収入を証明できなかったのです。もともと収入のないものには被害はない。食べることができないなら生活扶助しましょうというので、だから九割が生活扶助ですよ。

最初に行ったときは電気も何もない所でしたが、二回目、夏に再び訪れたら電気がきていた。「よかったね」と言つて、家の中へ入ったら冷蔵庫とテレビと洗濯機がある。「お金はどうしたの？」と聞くと、「お金は翌年の毛皮の前払いだ」と言うのです。ところが、洗濯機と言つても洗濯機に入れるような着物を持つているようにもみえない。それに、洗濯するにも水道がないから洗濯機をワッシュワッシュ湖のそばまで持つてきてね、動かしているのですよ。それから、冷蔵庫と言つたつて何を入れるのですか。冬なんか零下何十度ですよ。無茶苦茶な話です。

〈頭髮の水銀値〉

カナダの猫の毛の水銀値を調べたら、すごく高かったのです。水俣の猫よりも高いのです。猫に水俣病が起こたら人間に出るといふのは、新潟でも水俣でも経験済みです。カナダでは猫の水俣病が確認されたのです。

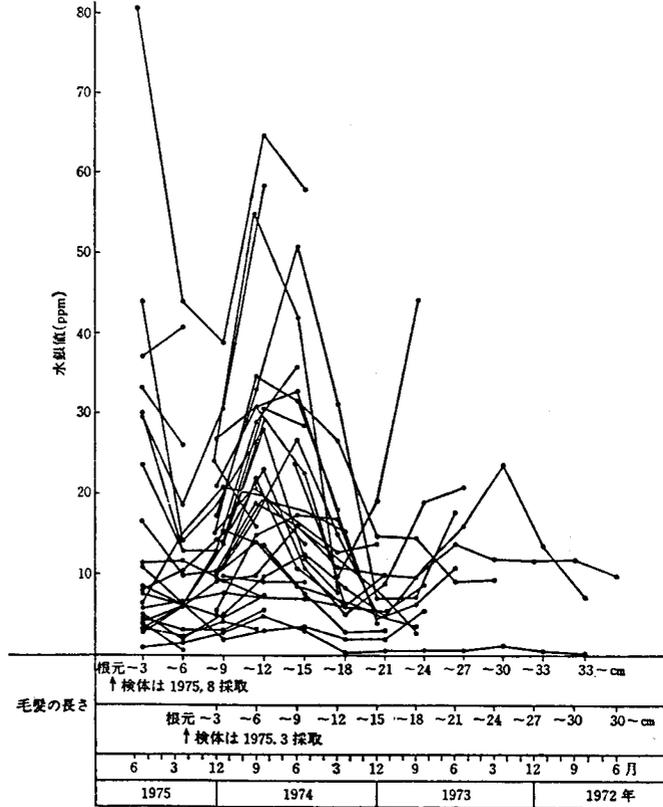
それで、髪の毛を調べました。インディアンの髪の毛、長いですから、それを根元から三cmずつ切つて、各々から水銀を分析するのです。一カ月に一cm髪の毛が伸びると計算すると、何月から何月にかけて伸びた髪の毛かが分かるでしょう。それで分析すると、夏場に伸びた毛髪は水銀値が高く、冬場のそれは低いのです。インディアンは夏に魚をたくさん食べて汚染され、冬はあまり食べていないということが分かりました。(図5)

〈カナダ政府の対応〉

私はこのことから、カナダインディアンは明らかに水銀の影響を受けていると診断したのですけども、いわゆる、昭和三十年代に水俣で見られたような、ああいうひどい急性、重症の患者が出ていないということで、結局、カナダ政府は水俣病と認めなかった。

ある時、私たちは「汚染を調べるには貝の水銀を測つたらいいのではないか」と提案したのです。そしたらカナダの研

図5 毛髪水銀の継時的変化



分析は東京都衛生研究所西垣道氏による
Harada, et al.: Bull. Inst. Constit. Med., 26 (3, 4) : 169, 1976

究者はね、「そいつは大変だ。潜水夫連れて行かないと貝は採れない」と言うのです。もう、私は頭にきてね、「嘘言うな、あなたは現地に行っていないだろう」と言ったら、何か恥ずかしそうにして、「実は、まだ行ってないんだ」と。冗談

「猫はアルコールは飲まない」ってけんかしたのですよ。普通の雰囲気ではとてもな
また、この町では私は警察に呼ばれたのです。何かわからず恐ろしかったのですけど行ってみたら、「水銀中毒という

じゃないですよ。私たちが行った時、子どもに「貝を採って来て」と頼んだら、皆喜んでいっぱい採って来ましたよ。また、「道が凍っていて行けない」とも言いました。そんなことはないですよ。日本から、右も左も分からなくて行ってきたのですからね。そんな嘘ばかり。全くやる気がないのです。

〈カナダ・インディアンに
対する差別〉

映画監督の土本典昭さんが『水俣』の映画を持って行って、ケノラという町で上映したのです。そしたら、観客の中の白人たちがね、「インディアンに水俣病はいない。インディアンは皆、アル中だ」とやじったそうですね。それで土本氏が立ち上がって、「猫はアルコールは飲ま

のは人間を狂暴にするか。水俣は犯罪者が多いか」と言うのです。「問題の汚染地区のインディアンは、ものすごく狂暴だから」と言うのです。

〈生活破壊がもたらすもの〉

そこから一つのデータをもらってきたのですけども、ここでは一年半の間に、二千人ぐらいの人口で一割位の人が変死しています。それは例えば、自動車事故だったり、焼死だったり、溺死だったり、それから、凍死だったり。本当にすさまじいのです。私たちがリザーブにいる時も、青年が撃ち合いをやって担ぎ込まれてきました。私は血を見るのがいやで神経科になったくらいで、鉄砲で撃たれた傷など見たことがないのですよ。それで困り、とにかく血だけ止めて病院へ行かせたのですが、とにかくすさまじい。(表2)

それは、水銀汚染がそうさせたのではなくて、彼らの伝統的な文化・生活様式が急激に破壊されていく、そのことが原因ですね。インディアン語を使うことも禁止され、おしきせの家を与えられ、囲いの中に入れられた。それでも何とかして自然との交わりを持って生きていこうとした人たちに、水銀汚染というダブルパンチ。彼らの生活の綱である自然との付き合ひも切られてしまったのです。

彼らは行く所もすることもなく、朝から戸口に煙草くわえ

表2 死の原因 (ケトラ地区インディアン, '70.6月~'73.12月)

	男	女	計
自動車事故	9	7	16
焼死	22	8	30
溺死	35	7	42
交通事故	7	3	10
子供の不注意による事故	2	0	2
捨て児	10	15	25
銃殺・刺殺・絞殺	26	12	38
殺	3	1	4
アルコール中毒	6	6	12
不明	6	4	10

て座っています。そして金曜日になると皆、町へ出て行く、生活扶養料をもらいに行くのです。子どもから親から皆で。その金は全部飲んでしまふ。そのうち、子どもを置き忘れてくる。子どもは凍死する……すさまじいですね。残念だけど、私は、この人たちはもう滅びていくのかなあと 생각합니다。そこで、私たちは公害の前兆は自然界の異変だと言ってきたのです。空から鳥が落ちたり、大量の魚が浮いたり。そう言ってきたのですが、私はそれ以来違うのではないかと
と思うようになった。

公害の前ぶれというのは、地域に根ざした伝統的な文化や生活様式が外からの力によって急激に破壊されていく時に起こるのではないかと、そういうふうに言うべきではないかと、私は思っその調査から帰ってきたのです。水俣でもそうだし、カナダのインディアンの底辺には、単に原因が有機水銀ということではな

に、もつともつと大きな、深い原因があることを知ったので
す。

V 次代への、私たちの責任

次の世代に対して私たちはどうやって責任をとるかという
問題を胎児性水俣病に関連して是非、考えてほしいと思いま
す。

〈胎児も人間である〉

不思議なことに、法的に胎児は人間ではないのですね。
私は知らなかったのですが、まず、この辺から考えなければ
いけないと思うのです。それは、今から先はいろいろな胎児
の障害が起こってくるからです。胎児の中の障害を人として
認めるということは、胎児を傷つけてはいけないという意味
で重大な問題になってきます。

あまり注目されなかったけど、水俣病の刑事事件というのが
あってその中で、私が大阪で見つけた一人の胎児性水俣病
の子どもがいたのです。この裁判で、チッソの元社長と工場
長が有罪になったのですが、それは、この胎児性の子ども

傷害致死罪とい
うのが認められ
たからです。こ
れは画期的なこ
となのです。つ
まり、胎児は刑
法上、人ではな
かった。ところが、その胎児に
対する傷害致死
罪が認められ
た。ということ
は、その胎児の
“人権”を認めた
ことになるので
す。

ご存じの方も
いると思いますが、今年に国連の国際児童十年とかです。
『子どもの権利条約』を作るにあたって、胎児を子どもと認
めるかどうかでもめているのです。胎児まで認めてしまった
ら産婦人科の先生は皆、下手すれば殺人罪になってしまいう。
だから、そこところが議論になっているのです。だけど私



図6 胎児性水俣病の子どもたち 母親が食べた水銀が胎盤
を通して胎児の脳を破壊した

図7 アメリカの胎児性患者 有機性水銀汚染の豚肉を食べた母親から発生



の意見は、基本的には胎児は人ですよ。胎児に障害を与えるようなことは、人に障害を与えることと同じレベルで考えられるべきだと思います。(図6)

〈化学物質の胎児への影響例〉

写真はアメリカの胎児性水俣病患者です(図7)。ファックベリーさんはメチル水銀で消毒した種麦を買ってきたのです。種麦倉庫では床にこぼれた種麦を集めて、安く売っていたのです。「食べちゃいけないよ」と言われ、食べなかったのです。では、どうしたのか。豚の餌にしたのです。食物連鎖という発想がなかったのです。だから、直接食べるよりも

つと悪かった。豚は「ブー」としか言いませんから、しびれたかどうか分からなかった。それで豚を潰して、一家で一月位かかって食べたのです。そしたら一家四人のうち三人の子どもが重症の水俣病になったのです。その時、お母さんは妊娠六カ月だったので、その子が胎児性水俣病になったのです。

次はカネミ油症です。ここは玉の浦という長崎県五島で、およそ公害とは関係ないようなきれいな所です。(写真略)そこへ誰かがカネミの油を持ち込んだのです。それでここでPCB中毒が集団発生してしまっただけです。そして、胎児性のカネミ油症がこの村だけでも十八人出たのです。何故、ここにたくさん患者が出たのだろうか。訪ねて行ってはじめてわかりました。ここはほとんどがクリスチャンなのです。例えば北九州などだったら、黒い赤ちゃん(胎児性油症)が生まれるというので皆墮してしまっただけです。ところが、この母親たちはそれを知っていたけれども、ちゃんと産んだのです。本当に良かったと思うのです。

追跡して二十年近くになりますが、幸いなことに大分発育もよくなったし、中には大学に入った人もいます。それから、こんなこと言っただけであんまり不安を与えては悪いのですけど、医学的に言うと、今後この人たちがどういうふうになっていくのかということ是非常に大事なことで、それは誰に

図8 放射線障害児？ '83年生まれ、母親の胎内で被爆、先天性白内障、小頭症、心臓奇型がみられる。



も分からないことですね。

次はマレーシアの例です。AREという日系企業があるのですが、レアメタルとあって、ハイテク産業に必要なものを採掘し、精製して日本にもってくるのですけど、その際にトリウム232という厄介な放射性廃棄物を出すのです。廃棄物だけ現地置いてきてしまったのです。したがって、その辺に放射性物質が溢れ、しかも管理が杜撰で、日本では信じられないことですが、そこに妊娠した女性が働いていたのです。その女性から生まれた赤ちゃんが小頭症と先天性白内障です。それで今、日本企業を相手に裁判を起こしています。(図8)

原爆の時小頭症の子が生まれたし、放射能で先天性白内障が生まれるということはレントゲン照射などで分かっています。

す。そういうことから、私はその子の症状の原因はほとんどそうだろうと思っ
ています。しかし、他に全く同じ例がないのですから。これなんか恐らく発表
したって、皆信
じないでしょうね。

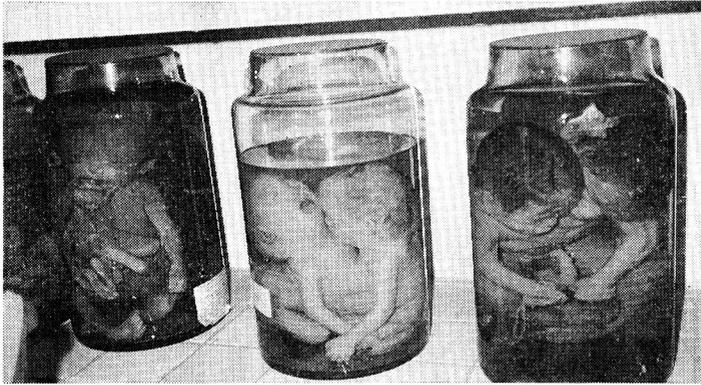
次はベトナムの枯れ葉剤の問題です。枯れ葉剤は'61~'71年の十年間に二百万haの二百万の人が汚染されたといわれています。'60年代に枯れ葉剤が大量に撒かれた時には、住民の流産・死産が増えたのです。しかし、撒かれなくなっ
てから、'71年以降は、流産・死産は少し減少しました。最もひどいときに二〇〇%台の流産がありました
が少し減り、そして現在ほぼ一〇%台となっています。

ところが、現在では先天異常とガン、これが増えています。今でも増えつつ
つけているのです。それに関しては枯れ葉剤との関係が疑われて、今世界の問題
となっています。



図9 ベトちゃん、ドクちゃん (手術前)

図10 結合体双生児 (ホーチミン市のツーズー病院)



結合体双生児というベトちゃんドクちゃんみたいな子どもは何十万人に一組位は生まれるのです。だから、ベトちゃんドクちゃんだけを見ていたら、それは枯れ葉剤のせいかどうかどうかわからないということになるのですけどね(図9)、実は、現在生き残っているのが二組なのです。ツーズー病院の標本室に行くと、ズラズラッと、背筋が寒くなる位多くの、二つくっついていている結合体双生児のホルマリン標本があるのです。これはただごとではない(図10)。とてもただごとではない。やっぱりこれはあそこに大量に撒かれた枯れ葉剤を抜きには考えられないと

思います。

アメリカの学者が「いや、農薬でも先天異常はでるから農薬のせいではないの」と言ったそうです。「冗談ではない。あなたたちが枯れ葉剤を撒く以外に、私たちは農薬は使わなかった」と言ったそうです。

今度はインドの例です。ボパールという地方都市の農薬工場が爆発し、一晩に正確には何千人死んだか分からないような大惨事がおこったのです。だいたい二千人は死んだと言われています。その時母親のおなかの中にいた子どもたちがガスによってどのような影響があったかを、あるいは爆発のあと妊娠した人がどうなったのかを調べたら、ほとんど流産してしまっていました。つまり、毒性が強い場合には、おなかの子どもも流産してしまつて生き延びないのです。



図11 工場の前に立てられた嘆きの母子像

会社の前に誰が立てたか“NO HIROSHIMA NO BHOPAL
We want to live”(ヒロシマはじめんだ、ポパールはじめん
だ、私たちは生きていたい)と書いてある母子像がありました。
(図11)

〈本当の豊かさ〉

私が後半に言いたかったことは、私たちが今の社会をこのまま押し進めていったなら、次の世代の子どもたちは大変なことになるのではないかということです。決してそれはオーバーなことではなくて、今ここに急いでいくつかの事例をお見せしました。その他にも、薬物によるサリドマイド児とか、いろいろなケースがありますね。ところが私たちは今まで、新しい化学物質をどんどん開発しようとしているのです。これは非常に怖いことだと思います。

例えば農薬というのはもともと人類を飢えから救うために開発された。薬剤というのは人類を病気の苦痛から解放するのに開発されてきたのです。それがどこかで狂った。

私は、水俣の胎児性の問題に発端があるので、ずうっとここまでやって来て今考えていることは、私たちがここで何かを変えていかねばいけないのではないかということです。

例えば、PCBがなぜあれほど爆発的に使われたか、なぜ

あれほど便利と言われたか。それは、熱にも水にも強く、電気にも火にも、とにかく安定した物質だった。だからいろいろなものに使え、たし、「こんな便利なものはない」と言われたのです。

逆に言うと、そんなに文字通り煮ても焼いても食えないようなものが自然界に出てきたり、体の中に入ってきたら、どうにもならないわけですよ。溜るしかないわけです。人類の何万年かの歴史の中ですでに遭遇した毒物については、処理する能力を人体や自然界は持っているわけです。

ところがここ二百年ですよ。人体にとってわけのわからないとんでもないものを便利さを求めて開発してきたわけです。ところがそんな全く人工的な新しいものが体に入った時、人体の遺伝子はそれをどうやって処理していいか分からないのです。だから、それはおなかの中の子どもに溜めて子どもと一緒に排出してしまっ、自分は助かろうとする。そういう自然の法則に逆らった挙動をしてしまうのです。

また水俣病では、あんなに子ども患者が出てくるのに、一方でどうして狂ったように成績を上げ、生産を上げていったのか。ビニールができた時、私たちは「こんな便利なものはない」と、皆飛びついた。そして、売れて売れてしかたがなかった。だから、水銀が流されていたって、そんなものは買わなければよかった。貧しい漁師が「魚が捕れんごとにな

った」と言っても、お金をやればよかったです。そして、
どんだん突っ走っていったのが水俣病だったわけです。

私たちは基本的には豊かさを求めています。しかし、豊か
さの中身をもう一ぺん皆で考えないと、私たちはどうにかな
るかもしれないけど、次の世代に対しては申しわけが立たな
いことがおこつてくると思います。

そこで思うことは、便利さとは何だろうということですが、
便利さとは、不自然さなのです。例えば、みかんは腐つて
分解して地に帰っていく。ところが最近のみかんは腐らない
ですね。みかんが腐らないということは便利ですよ。しか
し便利ということは不自然なのです。その側面を考えていか
ないと非常に大変なことになるのではないかということ、
水俣病の胎児性の子どもたちをはじめ多くの事例が私たちに
教えていると思います。

坂本しのぶさんたちが不自由な体をおして検診車を二台、
水俣からベトナムへ贈りました。そういう発想がなぜ出てく
るのか。それは我々に対する一つの示唆だと思うのです。そ
れで我々はやっとベトナムに行つて、今ベトナムで何が起こ
つているかを驚きの眼で見えてきているわけです。それを伝え
ることが、私たちの連帯を上げていくことだと思います。け
ど、それを通じて今一番、私たちは次の世代の子どもたちの
人権について考えねばいけない時ではないかと思えます。

質疑応答

Q 水俣湾に沈殿している水銀の処理をめぐって工事の差
し止め請求があり、結局、棄却されたことは知っているので
すが、現在それはどうなっていますか。

A もう工事、済んでしまったのです。問題はいくつかあ
ります。一つは、工事そのものの問題。つまり、長い歴史が
あるものですから、水銀が下に沈殿して、その上にヘドロが
かぶさっているでしょう。それでそれなりに安定しているの
です。それが、工事をやることによって、汚染がもう一度起
こりはしないかという不安です。それは私もその通りだと思
う。では、それでは放つておいていいかと言うと、そうでも
ないと思うのです。恐らくああいふ工事というのは、これ
が絶対安全だという方法はないだろうと思えますね。だから
そこで大事なものは、ゆっくり時間をかけてやる、監視体制を
きちんとする、それから、情報を公開するということです。
もう一つの問題は「危険な徴候が出たらすぐ止めます」とい
うのが県の言い方だった。何を「危険な徴候」と言うのか、
それが問題です。その辺の合意も得られないままにやつてし

まった。ある学者は、「昔のは水俣病で、今の患者は水俣病でない」、こんなことを言うべきなのですよ。昔みたいな、患者が出てからそれを危険な徴候とするなど論外です。だから差し止めという形に出たので、工事のやり方について皆で議論するということが目的だったのです。そうしないと、データなんかも公表しないで抱え込んでしまうから。

今、水俣は予定通り埋め立てが進んでしまっただけ、そこをどう使うかという話で一生懸命です。汚染魚が逃げないように網を張っていますが、あれは意味ないのですがね。だけど今、その存在意義はあるわけです。水俣病終焉論が、そのプログラムにのって、今突っ走っているのです。あとは、いつ網を外して「きれいになりました、はい、安全です」と言うのか……。そういうスケジュールになっているのです。

今後は、工事によって魚や地下水がどうなるのかとか、いろいろな問題が出てきます。そういう問題をいかに監視していくか、あるいは監視させてその情報をいかに一般に公開させていくのかが、問題になっているところです。

Q 国立水俣病研究センターですが、趣意書なんか見ると「患者の医療の向上を計る」などと書いてありますが、本当でしょうか。企業と行政が、一万二千人位の者のためにやるはずがない、と思うのですが……。

A 「センターを作れ」という運動は、もとは被害者の側

からおこったのです。しかし、それがいよいよ実現するところになるとおかしくなってしまいました。私も最初は、計画の委員だったのです。「患者や住民を運営に参加させろ。一緒に研究所を作っていこう」「お金は、研究所の職員の学術成果を挙げるだけではなくて、具体的に患者に還元できるようにしよう。例えば船を買って、その船は救急車の替わりもして島を回る。研究所の中に閉じ込めていないで、調査にはこっちから出ていったらいいのではないか」。こう私は主張したのですが、何も取り上げてもらえなかった。「前例がない」ということで。だから、はつきり言って、あれだけのお金を注ぎ込んだわりには患者のためにはなっていません。

あそこに患者が何人、今までに訪れていると思えますか。十年間に四人位ですよ。もうちよっと行ったかもしれないが、行っても十人にならないですよ。

(まとめ 根津公子)

——熊本大学医学部助教授で精神神経科医の原田正純さんは水俣病の研究に三十年近く取り組んでこられた。先日、水俣病に関する十冊目の著書『水俣が映す世界』（日本評論社）で、第十六回「大仏次郎賞」を受賞された——

編集部

シンポジウム

「自然と人間の共生」

— 水を考える —

シンポジスト 広松 伝・後藤 誠治
伊藤キクヨ・金子 博
司 会 立山ちづ子



(写真左より金子さん、後藤さん、伊藤さん、広松さん)

司会 「水」ということでシンポジウムを行います。広松伝さんは、柳川の堀割りをきれいな水に変えていく具体的な動きをされた方で、柳川の市役所にお勤めです。後藤誠治さんは、熊本市の水道局にお勤めで、労働組合の一員として、飲む側の水道の問題をお話してくださいます。熊本で「菊池石けんば広むる会」をやっている伊藤キクヨさんには、環境汚染に気づいて様々な活動をやってこられたお話をうかがいます。もうお一人のシンポジスト金子博さんは、三多摩問題調査研究会で東京の「野川を清流に」と活動が続けていらつしやる方です。それでは広松さんからお願いいたします。

ミニズと河童の

よみがえり

広松 伝

熊本市は水の都と呼ばれ阿蘇の水が湧出する所にできた町です。とても水に恵まれた所です。私は柳川市蒲生に生まれました。魚もたくさんの種類がいて、夕方はえなわを仕かけて、翌朝それをあげにいくのは何よりの楽しみでした。夏にはどじょうけを水田に仕かけておりましたが、夕立の後などいっぱいとれて、売りに行き小遣いかせぎをしたりしました。魚種・季節によっていろんな漁法を駆使して、一年中魚を追いかけまわしていました。そこで体験したことは、何にもかえられない貴重なものです。ところが、昭和四十年頃から堀や川が汚れ始めたものですから、漁船を買って、有明海に出るようになりましたが、今、有明海までも汚染が進んでいます。汚そうとしても汚れないと思えるほどに恵まれたこの熊本の水までもが危なくなっております。私たちの祖先が水の豊かな国土に作って伝えてくれたのを、わずか三十年の間に

私たちは汚してしまいました。豊かな水環境を取りもどし、子孫に引き渡すことは、私たちの責任です。

●水の役割

私たちの体は、大部分が水でできています。私たちが生存の基盤にしている大地も、半分から三分の二は水で構成されています。水の一番大きな機能は、生あるもの全ての構造をなすということです。そして最大の特性は、地球上を循環しているということです。この二つの機能と特性によって、全ての生態系が維持されています。水が土に選って水と土と微生物が一体となった時、老廃物を分解して、新しい生命が作り出されるのです。

●人間と水とのかわり方

人間の長い歴史の中で文明社会というのはほんの一コマにすぎません。農耕文化の始まりは、人間と水との密接なかわりでした。人々は、川祭りや水神祭にみられるように、生活の中で川や堀を大切にしてきました。廃水は「溜め」を作って自家処理し、微生物がそれをきれいにしてくれます。川さらいを総出でやり、川にゴミを捨ててはいけなやか、小便をしてはダメというしつけは、とても厳しかったです。

日本の国土は、もともと水に恵まれていたわけではありません。急峻な国土に一度にドツと降り、下流で暴れる雨水を土地につなぎとめてなだめ、かつ利用するために、祖先たち

は大変な苦勞をしてみました。そして昭和二十年代の終わりまでは、どの街にもきれいな水環境があったのです。それが昭和三十年を境にして、汚れ始めました。

●自然との付き合いを捨てたところで水問題が発生

人間の体の血管のように、大地にはたくさん水脈が走っています。血液が循環しない人は病むように、水が循環しないと大地は痛みます。

ところが、水道が普及すると、使う水と捨てる水を区別し、生活廃水をタレ流すようになりました。そして、川が汚れたのは、下水道がないためだと言うようになったのです。さらに、汚れた川は次々と蓋をしたり、埋め立てたりしていききました。その結果、大きな川や海までもが汚れるようになってしまいました。今、都会では水道の水も飲めなくなつて、浄水器をつけたりしています。

人間が、科学文明におぼれて、自然との付き合いを捨てたところで水の問題が発生したのです。自分に都合の良いものだけを求め、都合の悪いものは外に出してしまう身勝手な考えが、このような事態を作り出しました。これまで私たちが信じきっていた公共下水道も、身勝手の象徴の一つです。

下水処理は、処理区域をできるだけ小さくして、可能な限りきれいに土にかえすことが原則です。捨て方に気を使えば、水は自ずときれいになります。水の循環の輪を守れ

ば、水は不足しません。

いかに文明が進んでも水と人間のかかわりは不変であり、命の水がきれいでない、人間は病むのです。今、まだつながっている水の循環の輪を太くし、断ち切ってしまった輪をつなげていくことが大事なのです。

柳川の堀割の再生（スライド上映）

●再生への取り組み

柳川はもともと水環境の劣悪な低湿地帯で、先人たちは長い間の水との闘いの中で堀を割つて沃野にしました。街の中心を堀割や水路が縦横に走っています。そこには自ずと水とのかかわりの知恵が発達しておりました。ところが昭和四十年頃には堀が荒廃してヘドロ化してしまいました。そこで昭和四十三年から三カ年計画で、幹線堀一〇kmを六百万円をかけて浚渫しゅんせつすることになりました。しかし、この計画は、市民のものになつていなかったので成果が上がりませんでした。で、昭和五十年に環境課が設置され、幹線水路だけを残してあとの堀割は埋め立ててしまおうという計画が決定されたのです。そんなとんでもない計画を知つて、私は環境課に移る決心をしたのです。私は堀割の機能とか役割を関係者に説いたり、市長に直訴して堀割の再生に取り組み始めました。

私たちが整備に取りかかった時、①歴史的に引きつがれた

水面を失わないこと ②四百年かかって形成された生活の臭いを感じる景観をそこなわないこと ③水辺の生態系をこわさないこと、の三点を柱に進めました。また浄化再生を成し遂げるには、「住民の理解と協力・参加」が絶対に不可欠ですから、行政が住民と直接膝を交えて啓蒙に努めることが必要と考え、住民懇談会などで啓蒙に取り組みました。またポスター・作文・標語の募集と作品展、プリン石けん作りなどして、住民の意識を高める努力をしていきました。

● 甦った水路

当時、市街地の中に五六カ所ほど不法建造物がありました。が、住民現地見学会というのをやって住民を説得し、その内五十カ所が自主的に撤去されました。堀割の再生には、最初は人海戦術で浚渫に取り組んでいましたが、後にジェットホースというのを考案して、町内会の人は日曜だけ出てやればよいようになりました。最近ウオータフロントとか親水事業とか華やかになっていきますけれど、それがますます水の循環を断ち切っています。皆身勝手になって、一面だけを捉えているんですね。私たちは、

「街に清流を取りもどそう。川や堀は市民全ての共有財産です」
を合言葉にして、再生に取り組んで水路が甦り、沿岸の方たちのお庭になりました。また子どもたちの遊び場になりました

た。小さい時からこんな所であそばせておくと、水の危険に対応する能力が自ずと身についてゆきます。柳川では、誰れも泳がないから、中学校のプールが一つこわされました。川で泳ぐと、いろんな生き物がいておもしろい。そこで子どもたちに科学する目が開かれ、心が培われてゆきます。私にとっては、川は「人生道場」だったんです。危いといってフェンスをするのは過ちです。

● 人間の身勝手が環境を破壊

佐賀県の白石町では、去年までに一m四八cmも地盤が沈下しています。水中モーターポンプが普及するまでは、そんな深い水位までは汲めませんでした。水中モーターポンプでは二百メートル下からでも楽々と汲み上げることができます。まさに文明の利器です。でも、こうしてどんどん汲み上げたら大変なことになってしまいます。これはみんな、私達が身勝手になっているからです。公共下水道もそう。水中モーターポンプによる地盤沈下、合成洗剤、川のコンクリート三面張りもしかり。

ふつう川は、川の水位が高い時は、川の水が地下に浸透して地下水を涵養しています。日照りが続くと、当然川の水位が下がって地下水が滲出してくるわけです。森林土壌に蓄えられた雨水が少しずつしみ出して、川が枯れることはありません。このことを私は大地の水呼吸と呼んでいます。大地

は、川を通して水呼吸しているわけです。

今、私たちは、物事の全体を見る目、トータルに判断する力を無くしてしまつて、こういう結果を作つてしまひました。川の機能については、三日話しても話し足りませんが、一番重要な働きを一つだけ。陸上の滞つた汚れが、雨水と一緒に川に流れ、川があらゆる汚れをきれいにするという事です。川底にはたくさん微生物がいて、彼らにとつては老廃物は大切な食糧です。水が流れれば彼らに酸素が供給され活発に活動し老廃物を分解してくれます。そして、藻や貝や小さな魚が育ちます。このように川には自らをきれいにする力、自浄力があるわけです。「三尺流れて水清し」ということわざがありますが、祖先の残したことで、こんなすばらしいことはありません。

合成洗剤は、肌が荒れるから使つてはダメでしょうか。そうではなくて、地球上の何十萬種類の生き物のうち、約半分が合成洗剤でただちに死んでしまいます。昔は、台所の廃水が流れていく所に、よくミミズがいました。でも合成洗剤のせいで今はいません。微生物は生態系・循環の出発点、生命の原点なのです。合成洗剤は彼らを殺したり、弱らせたりします。つまり川や土のもっている自浄力が失われ、環境が悪化してゆくのです。だから、合成洗剤は使つてはいけないのです。

(スライド終り)

今ご覧になつていただいたように、柳川で堀割の再生がなつたわけですけれど、これで一段落したわけではありません。取り組みは始まつたばかりです。人と水との関係は不変であり、川との付き合いは永遠です。柳川は奇跡的に再生がなつたわけではなくて、どこでも取り組めばできるのです。ただ大事なのは、まだ水環境が豊かだった頃の体験を持つている世代がたくさんいるうちに取り組むことです。柳川では、思い出話から入つていきました。

●ミミズに感謝し、胸の内に河童を取りもどす

人間は自然界の一員です。その自然は、水の循環によつて初めて存在しています。水を思い、畏れ・慈しむ心を取りもどして、水との付き合いを始めていきましょう。今まで私たちは、水の循環の輪をズタズタに断ち切つてきましたが、それをつないでいかななくてはなりません。合成洗剤を使わないこともその一つ、川さらいの共同作業を復活していくこと、台所の廃水を気をつかうこと……。今日身近かにできることから取り組んでいただきたいと思ひます。

ミミズに感謝し、胸の内に河童を取りもどす。このことが大事だということを申し上げて、終わらせていただきます。どうもありがとうございます。

(まとめ 蔡 和美)

熊本の水を守る

後藤 誠治

今日いただいたテーマは、地下水汚染の状況などを、とのことでしたが、IC産業などにもなる汚染の問題は、アメリカのシリコンバレーから始まって、マスコミでセンセーショナルにとり上げられたので、地下水汚染の問題ばかりが先行し、実際に自分たちの住んでいる土地の地下構造を知らない人が多いようです。そこで、まず熊本の地下構造を例にとって、地下水の概念からお話ししたいと思います。

熊本の地下水は地下水盆地で形成されているといわれ、図1の一番下の層が地下水盆地の受皿的な役目をしている岩盤体で、二百万年前にできたものです。ASO1〜3の岩盤体は阿蘇山の火山活動で三十六万年前の、私たちの祖先である原人類誕生の頃に形成されたといえます。そして、ASO4は富士山と同じく七〜八万年前にできたもので、不浸透性の花房層が下にあるため、地下水がたまっています。ただし、しみ出てくるが、自噴はしない「不圧地下水」で、「浅井戸」

と定義される層なので、最近では地下水汚染がひどくなっています。ASO1〜3までの層は、位置エネルギーの関係上、地下深くなればなるほど大地自身の重さによる圧力が加わり、花房層よりさらに水を通しにくい層に支えられていることもあって、湧き出ます。たとえば健軍水源地では、一日に八〜九万tの地下水が湧いています。ですが、なかでも最良の井戸では四二mの深い地下から一日に二万t、ドボツドボツと音をたてて湧いています。そ

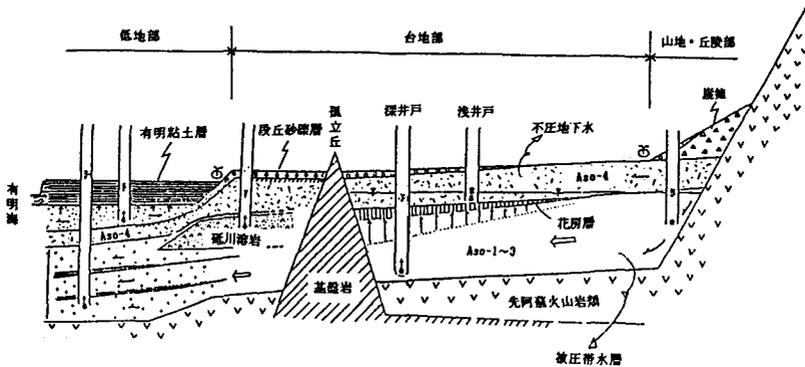


図1 熊本の地下水 (概念図)

の付近の水源地で百mほど掘っているところでは、地上三、四mの高さまで噴き上がっています。

熊本の水はこうして、阿蘇の外輪山を出た辺りの山地や丘陵部に降った雨が地下に浸透して水前寺公園などの湧水が形成されているのです。このように豊富な水に恵まれて、今迄は六千本の井戸から年間二億七千万tの地下水を汲み上げて、水道用に一億t、そのほか農水産業、工業用などに利用してきました。一億tの水といえば、一億m³の容器に満たした水に当たります。

ところが二十年前は雑木林だったところが今熊本空港に変わったように、土地の利用状況は大きく変わりました。カライモ畑はビニールハウスになるし、ゴルフ場もできて、水の涵養域は減る一方、便利さをもとめて水の使用量は増加し、熊本の地下水は年々下がっており、あとは一年に一億二億tも使えないというところまできています。

そのうえに、地下水汚染の問題も起こり、上水道の水質基準では「一〇ppm/ℓ (10ppm) 以下であること」と定められている「硝酸性窒素及び亜硝酸性窒素」が、熊本の水では二十年前はわずか0・6ppm以下だったのに今は三倍の2ppm近くまで増えています。これは、一九六〇年代から集約型の農業が行われ、農薬や化学肥料が大量に使われるようになったことを反映しているものと思われれます。つまり、虫

喰いのないキュウリを食べますか、それともきれいな水が飲みたいですか、という選択を迫られる時が来ているのではなにか、ということの参考データでもあります。

命と土と水を考えよう

伊藤 キクヨ

菊池市は、菊池川に沿って開けた土地で、土がよく、水がよく、お米が潤沢に取れる土地柄なので、食うに困らないから、皆のんびりしています。反面、新しい考え方に対しては鈍うございます。私はこの菊池に生れ、女学校を卒えて東京に出たのですが、戦中、戦後は一時帰郷し、その後は夫が船乗りだったものだから、あちこちに住みまして、十三年前にまた菊池に戻って参りました。

神奈川の大磯に住んでいたとき、相模湾で獲れる小アジのたたきが安くておいしいものですから、近所の魚屋さんが毎朝持ってきてくださるのを喜んでいただいておりますが、ある時から急に油くさくて食べられなくなりました。それで気がついたのですが、ちょうど経済の高度成長の時代に入っ

ていて、相模川の両側には工場がビッシリと立ち並んでいました。昭和四十年代、水俣病が問題になり、黒地に白く「怨」の字を染め抜いたノボリを立てて、お遍路姿の患者さんたちや、支援者の方が厚生省前に座り込んだりしていた頃で、私の親戚も支援の為に関わっておりましたので、本当に恐ろしいと思いました。有吉佐和子さんの『複合汚染』もあの頃朝日新聞に連載されました、はじめは社会小説なんて知りませんでしたから、変な小説だなと思っていたのですが、お米に虫が付かないなど、書かれている事実に次第に怖くなり、また、なるほどどうなずかされるようになりました。

葉漬けで飼育される鶏、豚、牛の肉は食べられないし、野菜も、曲がったキュウリを探して買うという都会暮らしをやめて菊池に戻りましたからは、無農薬野菜を作っている方々と出会い、たいへん恵まれております。熊本県下の各地の生産者の方々が私たちのために、またご自分たちも農薬のような怖いものは使いたくないというしつかりした意識で頑張っていて下さいますので、そういう方々と、十三年前から「生命と土を考える会」を一緒に続けています。創立の頃は、株式組織で「生命と食べ物を考える会」でしたが、四年前から八百名で協同組合「生命と土を考える会」となりました。肉は、牛さんが三カ月に一頭、豚さんが二カ月に一頭、犠牲になっ

「菊池には「医は食に、食は農に」の菊池養生園もありました。」「生命と土を考える会」の創立に御力を注いで下さいましたのも、菊池市の周辺の五つの町でつくった公立の菊池養生園です。園長としてお迎えした竹熊先生が聴診器を持つ手に、鍬を握って、下肥え（人糞）もかついで学生たちを指導なさって、無農薬の養生農園をひらかれました。私たちも、芋掘りのお手伝い等いたしました。

最初、お薬も沢山お出しにならないし注射もむやみになさらないので、先生の御クビが切られそうになると、私たちがみんなで署名を集めて御クビをつなぎとめたりして面白くやっています。お米の問題は、米騒動（一昨年）、水問題は水一揆（昨年）、今年も、生命の直訴と非常に深刻な問題を、桜満開の季節に大がかりな野外劇として、千名近い人々が竹熊先生を中心に日頃の念いを爆発させて、一日を過ごして、次のステップをふみ出す力といたしてまいりました。

なお八年前、「石けんば広むる会」をつくって合成洗剤を追放し、川をきれいにする運動に乗り出したのは、地区労の福祉協議会から給食調理員の方々の手の荒れの問題でお声を掛けていただいたのと、養生園の竹熊夫人が全国合洗追放連絡協議会の熊本支部長として、また御夫君の御心を支えられて、私たちの健康を常にお案じて下さって、「菊池は水のきれいな所なので、その水を汚さないために」と御指導くだ

さいました。

菊池市内には菊池川と狭間川の二つの川がありますが、子供たちは、見た目にはまあまあきれいでも合成洗剤の泡で汚れた川では泳げないので、汗だくになって遠くのプールに通っているのです。この川の水を戦前のようにきれいな水に戻し、子供たちを目の前にある川で泳がせてやりたい、というのが私の願いです。

なおなお恵まれたことには、菊池のお隣町山鹿市に「地の塩社」があります。田口知徳御夫妻が四十代で化学合成品の製造会社をお辞めになって、退職金をもとに粉石けんを作る工場を始められたのが軌道に乗り、ミカン山を買い取って、そこに鶏を放し飼いにしたりもしながら、粉石けんのほか、無農薬レモンを使ったリンスやシャンプーも作ってくださいています。肌によさしいクリームや化粧水も、研究室で努力なさって下さっています。非常に優れた品質の製品が次々に生まれて、私たちは、とても有難いと感謝しております。

私は戦争中の何もない時代を経っておりますので、何が来ても驚きませんが、最近では原子力発電所などという恐ろしいものができて、ほんとうに困ります。最近急に地球汚染が叫ばれてまいりましたが、私共の日常の暮らしを、みつめ直す時が、来たと思われれます。国内の事だけではなくて、地球全体に目を向けなくてはいけない時がやってまいりました。



戦後の食糧難の時代には、みんなを養うためには、どんな怖い農薬を使ってもお米を増産しなければならぬという事情もあつたでしょう。でも、今はお米があまりあまる時代になりました。ここらで立ち止まって、なぜあんなに突っ走ったのか、誰が私たちの鼻先にニンジンをつぶらさげて突っ走させたのかを、よく考えなければならぬと思います。生命を守る為には、女性の感性が大切にされなければならぬ時代と考えられます。

東京にも清流と

原っぱを

金子博

都内には百二十くらい川がありますが、そのなかでもたいへんきれいな川として残っている野川に東京都が「親水性」の護岸工事を施し、今年一九八九年の一月に完成しました。ハイヒールで川辺まで下りて散歩できるようにと、一〇〇mにわたり水際に擬木コンクリートを打ち込み、そのうえにコンクリートの歩道を作ったのですが、これを見て私たち住民は驚いて、都に護岸工事のやり直しを働きかけました。そしてこの話合いの過程で、東京都の側に「親水性」つまり水に親しむということの意味が全く取り違えられていることが分かり、住民の側でも、工事に対する怒りよりも、どうしてこのような認識のズレができてしまったのかということを考えるようになってきました。都のほうでもだいたい反省して、一部コンクリートをはがして土に戻すなどの応急工事をしたのです。これから一緒に数年がかりで生態系を生かす方法を勉強しながら、根本的に計画を練り直すことになりました。

野川は流域の五十ばかりの湧水を集めて徐々に流れを大きくしながら多摩川に合流している全長二〇kmほどの川です。全都的に湧水の水量が減っているというのですが、野川の周辺でも水量が昭和三十年代に半減し、四十年代にはさらに半減してしまいました。

ここで湧水の出る仕組みをお話ししますと、**図2**のように武蔵野台地には段丘があり、その崖線に沿って野川が流れています。断面を見ると、武蔵野礫層という砂利の層があり、その上に富士山などの火山灰が積もり武蔵野ローム層ができています。昔の多摩川の流れがこの地層を削って砂礫の層が露出していま

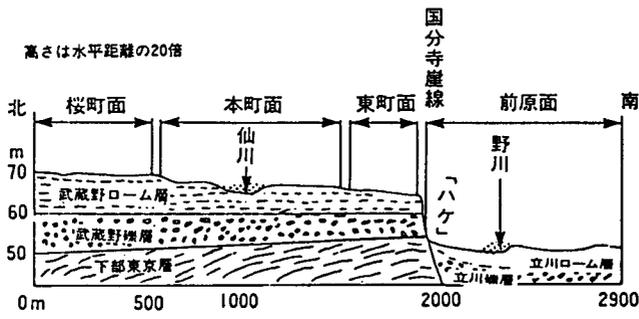


図2 小金井市付近の南北断面図
 (『都市に泉を』[NHKブックス]より)

すが、武蔵野ROOM層の上に降った雨がこの砂礫層の露出したところから湧き出るので、国分寺崖線と呼ばれるこの崖線に沿ってずっと湧出口が続いています。

ところが、下水道のあまり普及していなかった昭和四十年代は、この野川に合成洗剤の泡が浮き、そして夜になると、バスクリンの匂いがあるという有様でした。そこで野川の水と湧き水の水質の違いを見るために、あるイベントの際に、金魚を買ってきて二つの水槽の一方に湧き水、もう一方には野川の水を入れて実験すると、野川の水に入れた金魚はすぐに浮いたほどでした。

私たちの市民団体は十七年前に発足しましたが、最初に住民の意識調査を行い、そのほか湧き水の量や水質を調査したり、砂礫層のなかに地下水がどのレベルまであるかを大学の先生に教わりながら調べたりしました。また、「歩く会」を年に一〜二回開いて、住民に野川の現状を見てもらうことも行っています。

このような活動を行っているうちに、当初は市民運動を毛嫌いしていた行政や大学の研究者（市内に三つも大学があるのも）も加わった「小金井の環境をよくする連絡会」が昨年、多くの市民や団体が集まって結成されました。この会の事務局は市が担っています。

そのきっかけになったのは、湧き水が減るのは都市化が進

み雨水が地下に浸透していなくなるからだということで、一般の民家の庭に雨水浸透マスを設置してその効果を見る実験をしたり、たまたまそのころできた広松さんたちの映画「柳川堀割物語」を、市民と行政一緒の実行委員会をつくり公会堂で上映したところ、立見も出る盛況ぶり、七十万円もの浄財を得たりしたことでした。このお金を有効に生かすには、環境問題解決のため市民、行政、大学の研究者たちが緩やかに連携して協力できるような集まりが欲しい、その運営資金にしようということになったのです。

国は河川の周辺の環境整備を進めていくと、環境白書でも述べていますが、先程の「親水工事」の例でも明らかになたように、行政のすることは必ずしも信頼できませんから、常に監視していかなければなりません。

また、この野川沿いに七ヘクタールほどの空間が残っていますが、そこに野川が増水したときに備えて調節池を作る工事が始められました。昔は水田が調節池としての役割を果たしていたのですが、宅地化がどんどん進むなかで東京都が当時から水田を買い上げておいたところに、いよいよ三つ目の調節池を作る工事を始めようということなのです。

この原っぱでは地元の人たちがいろんなイベントをくりひろげてきましたが、私たちもいちばん古くから、野川の川を使ったり、原っぱを使ったりして「わんぱく夏祭り」を毎年

開いています。昔ガキ大将だった「おとなガキ」と子どもが一緒になって遊んだり、自然保護について考えようということや、どろんこ池、つり橋、水車などを作り、どろんこ合戦などして遊んだあと、野川の水で体を洗ったりしています。

ここで、原っぱのもつ現代的な意義について、一緒に活動している若竹稜子さんから補足説明をしてもらいます。

若竹 東京の開発は、便利で幸せな街を造ろうとして、コンクリートで固めながら進められました。その結果、もとの自然は破壊され、高尾山など数えるほどしか残っていませんが、今では東京できれいな森や水がどこにどれだけ残っているか、把握している人はあまりいません。熊本に来る途中で見た自然は本当に美しく、うらやましく思いました。私は今二十一歳ですが、私たちの親や祖父母の世代が自然を残したままの開発をなせしてくれなかったのか……、失われた自然を元に戻す私たちの任務は重いと思いつながら、ここにやってきました。

いま私たちが残そうとしている「くじら山下原っぱ」は、広さが後楽園球場の二倍もあり、何もない自然の空間ですから、穴を掘って遊ぶこともできるし、中を流れている川はフエンスがなくて自由に入って遊ぶことができます。こんな空間は東京近辺になかなか無いものだから、埼玉や神奈川から

も、風上げに、あるいは寝そべりにやって来るほどののに、三年前、東京都の建設局河川部は、そこを野川が増水したときの調節池にする計画を内密のまま実行に移し、すでに一部は着工されてしまったのです。

そこで、「くじら山下原っぱを考える連絡会」を作り、第一歩として東京都議会に提出する署名運動に取り組んでいきます。環境保全のためには、雨水を川に集めてしまわずに、地下に浸透させることが大事なのだということをアピールしながら、原っぱを残し、水と深く関わりあえる市民生活をつづけていきたいので、ぜひご協力をお願いします。

金子 自然環境復元の研究会の第一回目が近く神奈川で開かれますが、このような学際的な研究の動きが、今後大きなうねりになっていくことと思われ、だんだん希望が見えてきました。私たちの活動は『都市に泉を―水辺環境の復活』（本谷勲編著、NHKブックス）に載っていますので、できればお読みください。

休憩時間には兵庫からはるばるギターを抱えてやって来たチャーリーこと吉田明弘君とヤマケンこと山本謙吉君のコンビによるコンサート「石けん愛してます」が大いに会場を沸かせました。

シンポジストのお話を受けて

全体討論

◆大規模な公共下水道の問題点

村岡(福知山) 下水道の処理施設ができたからといって水がきれいにならないと広松さんがおっしゃいましたが……。

広松 たとえば北九州の紫川は、下水道ができて大変きれいになりました。ところがこれは、下水道を別に流してしまいうから一見きれいになったように見えるだけなのです。下水をもっときちんと処理して本来の流れにもどせるようにして始めて、本当にきれいになったといえるのですから……。

後藤 ヒューム管というコンクリート製の下水管では、尿尿と化学反応を起こし、硫化水素が発生して管を溶かすので、下水を地下にばらまき、地下水汚染の原因になったりもしているそうです。

伊藤 合成洗剤は活性汚泥中のバクテリアを殺し、下水処理場の機能を低下させるので、下水処理場などができると、下流の水が危なくなり、かえって心配です。

村岡 福知山では下水道の普及率が高く、河川がきれいになりました。また、処理場から出る汚泥を再利用して肥料を作

ったり、焼却灰を道路の舗装材にしたりもしています。ただし、困ったことに、雨水と汚水と一緒にして処理する方式を採っているので、雨量が多い時は処理し切れず、雨水と一緒に汚水もたれ流しというのですが。

広松 公共下水道は、まさに身勝手さの象徴です。たとえば京都では市のはずれで処理水を放出して、下流の地域に流しているのです。そこを押えていないと公共下水道がよいものであるかのように錯覚してしまいます。

金子 東京では下水道や地下道、地下鉄などに浅い地下水が浸出して、貴重な水資源を一割くらいも奪っています。これも水の循環のうえからは、困った問題です。

◆公共下水道に代わる新しい処理法を

田中(熊本) 今年の二月に開かれた広松さんたちの「筑後川の浄化を考える会」に参加して、久留米の石敷合併浄化槽を見てきました。生活廃水と水洗便所の汚水を一緒にしてこの浄化槽で処理された水は、びっくりするほどきれいで、飲用にもなるのです。『下水道革命』(石井勲・山田国広編、新評論刊)の中にも紹介されているので、皆さんもぜひ読んでみてください。

広松 石敷合併浄化槽は、以前は「溜め」を掘って自家処理していたのに現代技術を応用し、化学的な処理は全く用いな

いで、微生物の存分に働ける条件を槽の中に作って、その働
きで水をきれいにしています。私の家にも設置しています
が、透視度が二mもあって、消毒さえすれば飲めます。き
わめて安い費用で設置できますので、見学においで下さい。

●石けんをもっと広めよう

小島(鹿児島) 合成洗剤の害が言われ、粉石けんがよいと言
われても、共同購入の手続きが面倒な生協でだけ扱われてい
て、一般のスーパーに並んでいないのでは、生協加入者など
一部の人の自己満足に過ぎないのではないのでしょうか。

伊藤 デパートやスーパーに置かせるよう、働きかけてはい
るんですが、「メリットが少ない」と言って、なかなか扱って
くれません。菊池市内の店には粉石けんを置かせるようにし
ているし、売れないから置きたくないという商工会の考え方
も改めさせるよう努めてはいるのですが……。皆さん、「石
けんを置いてください」という声をお挙げください。

洗剤メーカーは合成洗剤のCMには百億円もかけていま
すが、石けんは申しわけ程度にししか扱っていません。洗剤の業
界から献金がどのくらい渡っているのか、政府も合成洗剤を
作るなどは全然言いませんね。「買わない、使わない、進物
として贈らない」程度のやさしいやり方では、地球の汚染は
救えないのです。草の根の運動をしている人たちが全部まと

まって厚生省に押しかけるぐらいでないか、と思ってお
りますが、未だそこまですべていないのが残念です。

佐川(熊本) 甲佐町で、東京や岡山から石けんを取り寄せる
などの苦勞をしながら安全なものを求める運動を二十年前、
スタートさせ、部落解放運動や婦人会の運動のなかで、豆腐
のパックに日付を入れさせたり、廃油で石けんを作ることな
どを通して、命を守り、人権を大切にすることを訴えてきま
した。そして、婦人会で町の銘木にちなんで「金もくせい」
と名づけて商品化し、商工会で扱うまでになりました。今で
は学校給食でも合成洗剤は使っていません。

若竹(東京) 石けんを普及するうえで生協の果たしてきた役
割は大きいのですが、今、生協ルートができたことで、「ご
めんください、石けんはありませんか」と近所のお店に行く
人を減らしています。一度でもいいから、生協から買わずに
近所の店に問い合わせるなどの工夫をしながら、その反響も
情報として集め、運動に広がりをもたせようではありません
か。

宮崎(大阪) 大阪の「家庭科の男女共修をすすめる会」で
は、小学校で岩瀬さんが、高校で私が石けん作りの授業を行
い、夏休みの宿題としてその使用体験をレポートさせ、あ
わせて有吉佐和子著『複合汚染』を読ませています。石けんを
使うことを通して自分たちの生活を見直すということ、大

きな力になっていっていると思います。

杉山(東京) 全自動洗濯機に石けんは不都合といわれ、全自動が普及してから石けんの使用が減ったといいますが……。

後藤 予洗いで、粉石けんを予め溶かしておかないと、どうしても石けんカスがたまります。男性も協力して洗濯機を庭に出して分解掃除するなど、それなりの手入れが必要です。

緒方(兵庫) 私はこの三月から、母はずっと以前から、全自動を使っていますが、全自動でも、先に粉石けんを溶かしてから使えば大丈夫です。洗濯機の説明書にも、そのように使いが書いてあり、使えないとは書いてありません。

田中(熊本) 全自動洗濯機になったら石けんが使えない、ではなく、石けんを使える全自動洗濯機を開発するようメーカーに要求すべきではないでしょうか。

◆自分の住む地域で、今すぐ何ができるだろうか

西本(兵庫) きのうの原田先生のお話からも、便利できれいな生活は不自然なのだとなりがきました。前の勤務校の周辺でも細い道路まですべて舗装され、便利になったと喜んでい人もいましたが、それで水の循環が断ち切られることに気づき、水を土に返すことを心掛けてきました。ゴミ処理にしても、水辺の再生にしても、行政に任せてしまっただけでは、自分たちに問題が見えなくなり、いくらお金をかけても、きれ

いになりません。行政に任せきりにしないで、住民の手で自然の環境を守っていくことが大事なのだと分かりました。

きのうから、それぞれの地域に根ざしたやり方で自然との共生の方法を探る話を聞きましたが、私たちが、帰ったら早速実行できるような身近な提案があれば、お願いします。

中村(兵庫) 僕は、箸と、スーパードゥクルのビニール袋を四種類(大・中・小と一升ビン用の細長い袋)、常に持ち歩いて再利用しています。難神戸生協では、袋を持参するとスタンプを押してくれ、二十回分たまると百円引いてくれるのでありがたいです。僕はひとり暮らしなので、こうするとゴミはわずかしか出ません。ゴミの収集日には、世の中どうしてこんなに大量のゴミが出るのか不思議に思うほどです。

燃えるゴミと燃えないゴミを分けて出すことも大事ですね。料理研究家の小林カツ代さんは広告のチラシを袋にして燃えるゴミだけを入れて新聞紙で包み、水気を切ってゴミの量を減らしているそうです。

金子 自治体の職員と仲良くなり、その人が働きやすいようにイベントを組む、などということもよいでしょう。小金井では環境問題を考え、自主的に調査を行い、住民のなかに入って腹を割って話す熱心な四人の職員と組んで、一年半ほど前から行政指導で、家を新築または改築するときは雨水浸透マスを設置しなさいとすすめ、現在三千個、家の数でいうと

千数百戸すなわち十五戸に一戸の割合で設置されるなどの成果をあげています。環境保全の立場でこのような取り組みをしている小金井は、先進的な自治体といえるでしょう。

村岡 機会があったら皆さんにお話しして注意を促したいと思っていたことがあるのですが……。小・中・高校の先生で、自分の学校に受水槽のあることを知っている人は？ 今までに受水槽や高架タンクの検査に立ち合ったことのある方は？（挙手一、二人）。福知山市で市内全校を点検して回ったところ、全部ペケでした。ミミズが入っていたり、旧型の地下水槽に鍵が掛かっていなかったり、実に管理がズサンです。そのほか、水道設備には、材料のプラスチックに使われている離型剤の溶出や、水道管の錆などの問題もありますから、この休み中に自校の設備を点検してみて下さい。

●環境教育で身近な自然を見直そう

金子 環境問題を考えていくうえでは環境教育も大切ですよ。身近な自然を見ていくということが生活科の指導要項にも入っています。その身近な自然がどんどん失われている今、それを回復、復元していくためにも、市民運動の側から家庭科の先生方に期待するものは大きいのです。

私たちが活動を始めて三年ばかりで『野川の自然』をまとめましたが、二百部買って中学校の社会科の副読本に採用し

た先生がいました。広松さんの『河童とミミズのよみがえり』は高校生の副読本としてふさわしい内容だし、一橋出版の『家庭科実践事例集』には私たちの「わんぱく夏祭り」のことなども載っているので、環境教育にぜひ利用してほしいと思います。

●住民の力を借りなければ、やっていけないんだと行政に思ってもらおうこと

若竹 住民と行政が一緒に取り組むことの大事さを強調したいと思います。行政に取り込まれる危険はありますが、そうならないようにスレスレの緊張感を味わいながら一緒に活動し、住民の力を借りなければやっていけないんだと、行政に思わせること。そのためには、一見節操のないような活動をせざるをえないこともあります。その辺もきっちりおなかの底に畳みながら乗り越えてやっていくことが必要ではないでしょうか。この夏には近所にできた美術館で、文学の話なら参加するけど、自然保護の集まりなんかに行かないよ、という人も呼び込むため、大岡昇平の小説の舞台になったあの自然を呼びもどそうと銘打って「武蔵野夫人フォーラム」を開催します。「だまし」のようだけど、そう見えようとも、伝えたいことのために節操はかまいませんといういき方です。

●市民運動と労働運動の連携をめぐる

宮崎(大阪) 市民運動と労働運動の連携が必要です。労働組合のなかでも女性差別を鼻の先で笑うような現状を問題にしていかなければと思います。私は、何かの問題を行政に提出する時、その前に労働組合に持っていけます。労働者が生活をどう考えるかということは大事なことです。また生活は女だけのものではなく、男も生活者なのだから、自分の問題として男女両方が一緒に考えていかなければあかんと思います。また、Weのフォーラムで今年こうして話し合ったことは、地域に持ち帰ってすぐに実行してみ、来年その成果を報告し合うと、継続性が出て良いと思います。

伊藤 菊池では給食調理員さんたちの手荒れと子供の健康を問題として、地区労、労婦協の方々など四十人ばかりがサーッと集まり、一緒に「石けんば広むる会」をつくったので、今、今の質問者の方、どうぞご安心を。労働組合と市民と一緒に行政に押しかけ、わずかですが助成金も出させました。「会」のことを、「あれは革新だから」といわれますが、「ふるさと」の水を守ろうとするのに、右も左もありますかと、反論を地元の新聞に書いています。

後藤 水道局は男の多い職場なので、組合員のなかにも、「職場で社会党、帰るとき民社党、家で自民党」という状態があります。逆に婦人部にも男任せの発想があって、婦人・青年

部は、とうとう解体してしまいました。ですから、個人個人がひとりの人間としてしっかりした意識を持たなければと思います。そして、男が、女がという以前に、生活を共にする相手への信頼や思いやりがないと……。今朝も我が家では、オクサンが御飯を作り、その間に私が洗濯をして、それじゃ行ってくるよと出てきたわけですが、このようにお互いに支え合わなければ、外で私がカツコイイことを言っても、うちのオクサンさんは私を支援してくれないでしょう。

金子 私も労働者ですから、労働者としての意識はあります。労組には、はっきり言って期待していません。地下水を守るための二つの課題があつて、自然の景観を残す庭園の保存の方は、かなり選挙の票になるとみて労組も議会も超党派で動いたのですが、地下水脈を分断する河川工事を止めさせようという方は票にならないので、どの党派も全く理解を示しませんでした。こんなことから、私は意識した個人が組織で動けるのかな、と疑問に思い、後藤さんの言われたように個人個人の意識が変わらなければ、と思っています。

●水の動きをきちんと押え、身近なところから——まとめにかえて

広松 後藤さん、伊藤さん、金子さんのお話や、会場からの発言をうかがっていて、大勢の方々が、全国各地で長く粘り

強く活動を続けておられるのを、大変心強く思いました。昨日と今日を比べると大して進んではいませんが、しかし、十年前と比べれば格段の進歩があります。自然保護、環境保全の機運は今全国的に高まっています。ただ、残念なことは、まだ自然の仕組み、水の働きをきちんと自分のものにしないうままに、いろいろなことが行われがちなことです。

そこで、さきほど出た環境教育が大切になります。現場こそ偉大な教師です。机のまえの勉強より、現場に出ていって小さいときからいろいろ体験させることで、トータルにものを見る目を養い、心を培うのがよいのです。

また、行政の職員は、住民の共同の事務局員として、住民と膝を交えて話し合い、町のことを誰よりもよく知った上で、住民との信頼・協力関係の中で町づくりを進めていくべきだと思います。隣近所総出でドブさらいをして、あとで一緒に昼ご飯を食べ、一杯やったりすれば、老若男女の断絶もつながって地域共同体を創り出すこともできましょう。

今、特に都会生活では、本当に心の安らぐこと、面白いことがなくなっています。何が人間の暮らしにとって大切かをもう一度考えなければなりません。そして、水の循環に乗らないもの、たとえば合成洗剤は作らせないというために、もう一步運動を盛り上げていく必要があります。国の政策は、地方が実験を繰り返さなければ動きませんから。

そして、身近なところでは、一人ひとりが、たとえば台所のゴミの水切りをよくするとか、味噌汁は捨てる。と河川の汚濁の原因になるので作りすぎない、などに取り組むのも大事なことです。こうして、ちよつと気を遣えば、家庭の雑廃水による汚濁を五十％は軽減できます。ぜひ、その辺から取り組んでいただきたいと思えます。

立山(熊本、司会者) 生徒に味噌、醤油、酒などを捨てる。これが河川の汚染につながる。と話す。と、びっくりしています。これは物を大切にということでもあるかと思えますが、この方面の実践はまだまだかと……。

私は高校の家庭科で、微生物による川の浄化を生徒に理解させるなどの環境教育に取り組んでおり、その様子をこの会場の周りに展示しておりますので、よかつたらご覧になって下さい。これからもこの問題をますます発展させて、来年につなげたいと思えます。

記録係として懸命にメモをとっていたため質問する暇がなかったが、公共下水道の問題点について、個別の事例や付随的な問題の指摘に留まったようなのが心残りだった。下水、ゴミ、核燃料……私たちの生活環境は未解決の問題だらけである。今後さらさら追究していく場が欲しい、と切に思う。

(まとめ・川名はつ子)

授 業



田 中 裕 一

—子どもたちに、本当にゆたかな社会、
自然、そして未来を手わたすために—

**環境破壊と闘うことを
授業する**

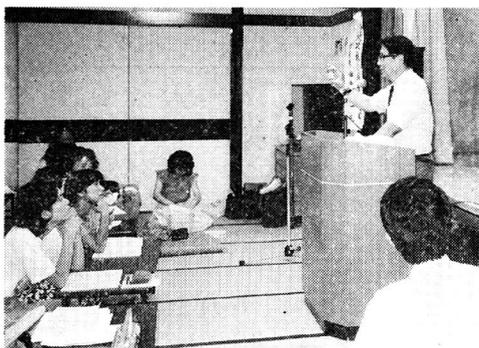
まず、水俣病の問題を授業することになった経緯から、お話ししたいと思います。私が最初に水俣病の授業をしたのは、二十一年前、一九六八年十一月二十日でした。

水俣病の授業をするようになった動機

第一の動機は二十四、五年も前ですが、私が県教組の教文部長をしていたときのことです。すでに社会問題となっていた水俣病を、教育の現場でも取り扱わなければいけないのではないかと思ひ、教育実践をぜひ扱ってほしいと様々な先生方にお願ひしたのですが、とてもできないと言われ、それでは私が現場にもどつてやろうということになったわけです。

第二の動機は、教え子だった中学三年の女の子が弁論大会で次のような訴えをしたことです。当時東大の総長が「小さな親切運動」を提唱し広がっていました。彼女が小さな親切で満足することよりも、私達の目の前に大きな不親切が横たわっているのを知ることがの方が大切ではないかと訴えました。私もその訴えが非常に胸にこたえ、やはり水俣病を授業できちんと取り扱わなければならないと痛切に感じました。

第三の動機は、私が一九三〇年生まれで、戦中と戦



後両方の教育を受けたことです。終戦の年私は中学生でしたが、目の前で先生たちがぐるぐると変わったのです。教科書の墨塗りをし

るとかページを切り取れとか臆面もなく言う先生たちに対して、非常に根深い教師不信・教育不信に苛まれました。私は今、教師として、私が教えていることの中からは、決して将来墨を塗らせたり、ページを切り

取らせたりするようなことはさせたくない。常に、私が求めている真実が子どもたちの胸に残って、子どもたちがその真実に拠って立つ、そういう視点を持つことができるようにしたいと思って教師になったことが、水俣病を授業しようとした第三の動機です。

第四番めは、すでに水俣病の問題は新聞のトップ記事で何度も何度も取り上げられていながら、当時の社会学の教科書には全然出てこなかったことです。こんな社会学があるだろうか。もし、こういう現実的な大きな問題に触れないでいる

ならば、私は社会学の教師を辞めたほうがいい。教師の存在意義を問われる、教師の良心を問われると思えば、私はこの水俣病の授業に取り組みざるをえなかったのです。

「水俣病の授業」——その取り組みの経過

事前にこれはかなり圧力があるだろうというのを覚悟のうえで、授業をどのように組もうかと考え始めました。熊本市の教育委員会が授業研究会をやると聞いて、教育委員会から召集状を發してくれずから、いろんな先生たちがたくさん集まってきました。そこで水俣病の授業をやるうと考えました。しかし、それには細心の注意を払ってやらないと「偏向教育」ということで足をすくわれる恐れが充分にありましたから、あくまで慎重に教材を組み立てていきました。

まず、水俣病の現地に行つて被害者たちから直接話を聞くことから始めました。桑原史成さんの撮影した写真、たまたみ一畳ほどもある写真、パネルを十二、三枚お借りしてきました。事前に子どもたちを六つのグループにわけて(①水俣病の症状、②被害者・漁民側の動き、③水俣病研究者たちの動き、④会社側の動き、⑤政府認定までの動き、⑥認定後の動きの六グループ)、新聞の切り抜きを收拾させるなど水俣病について様々な角度から研究するという自主学習をさせました。そして、そのことによって水俣病の授業を構成しました。

最高のものを極度に単純化していく教材化

まだ、水俣病に関する参考文献はほとんどありませんでしたが、できる限りの資料を集めたところで、私は非常に大きな悩みにぶつかりました。それは、水俣病の問題のどこから子どもたちに働きかけたらいいいのか、子どもたちの理解力にも限度があるだろうし、どのように授業を構成したら一番納得できる形になるだろうかという悩みでした。

その時、ふっと思い立ったのは斎藤喜博さんの言葉でした。斎藤さんと二人で群馬のお宅近くを散歩し、お話をうかがっていた時、小さな社を説明しながら「芸というものは、最高のものを極度に単純化していくものだ」と斎藤さんが言われ、その言葉が、非常に大きなヒントになりました。

水俣病の複雑な問題は、行政責任の問題一つとってみてもとても複雑で、子どもには手におえない難しい問題です。少なくとも最高の学問的成果、最高の理論をどこかで単純化していかなければならない。そこで考えたのが、今では悪名高き昭和四十三年の患者の見舞金契約と猫四百号実験でした。

屈辱極まる患者の見舞金契約

死者一人あたり三十万円の見舞金は、当時の熊本県知事ら熊本の有名人等の斡旋委員で水俣病患者にのまさせたもので

す。裁判を何回も傍聴してわかったのですが、これは見舞金であって賠償金や補償金ではない。つまりチツソは原因を認めていない。患者たちは十二月末の年越しの金もない、入院費も治療費もない、しかも魚がとれないから生計も失っている。そういうときに、もしこれでまなかつたら斡旋を打ち切ると言われ、追い詰められて「勝手にしろ」と泣く泣く印鑑を投げ出した、そういうかたちで、契約書が強引に成立したのです。それをまず授業で取り上げようと考えました。

猫四百号実験——チツソはすでに原因を知っていた

そしてもう一点は、実はチツソはその時すでに自分の所の廃液が水俣病の原因だと知っていたことです。これは「猫四百号実験」といいますが、チツソの付属病院長で細川一さんという良心的な方が、アセトアルデヒド工程の廃液を投与する猫を使った実験をしていたら、四百番めの猫がついに水俣病を発病しました。工場廃液が水俣病の原因であるということをはっきりと突きとめたわけです。すぐに細川院長は九州大学にその猫の脳の解剖所見を求め、その結果、脳に水銀の影響がはっきりと認められたわけです。細川院長がこのことをチツソ側に報告したのが、その見舞金契約のされる二カ月も前だったのです。チツソはその原因を知りながらあえて、将来チツソの原因と分かったときに新たな補償金を要求しな

いという三十万円の手切金として、見舞金契約を押しつけてきたのです。片方では十月七日に猫が狂いだし、片方の契約書の日付が十二月三十日になっている。子どもたちはその日付の違いから、水俣病の原因が廃液にあることを、すでにチツソが知っていたことを知るわけです。

細川院長は何回も何回も、これは重大な問題だとチツソ幹部に言うのですが、チツソは細川院長に対して以後猫実験は一切続けてはならない、出た結論を一切口外してはならないということを命じました。また、チツソは熊大の原因究明にありとあらゆる妨害を企てました。実験に用いるカタクチ鱒等を漁民に命じて全部回収してしまう。化学工業界、日本医学会長田宮猛雄氏（東大）の「田宮委員会」等いわゆる「権威」といわれているところから学者を呼んできては、片っ端から熊大の結論に対して反論していく。農薬説とか爆薬説とかあるいは腐敗物質説とかを出しながら原因究明を混乱させていきました。そういう様々な事実を子どもたちは自主学習しながら、そういう状況の中で例の卑劣極まる見舞金契約がかわされたことを知り、非常に腹をたてました。

幸福追求権と生存権という憲法学習のなかで

彼らはすでに政治と憲法の学習は終え、次の経済の学習で日本の近代の発展と資本主義経済の諸問題のうち、現実の演

習として水俣病の問題を学習しました。その際に準備した資料及び授業記録は明治図書から『水俣病の教材化と授業』現在絶版）として出版しました。そこで子ども達が出した結論の部分なのですが、授業記録から引用します。

T（教師）…ところで何が会社をそうさせたのか、だ。

（二回くり返して）はい、君。

P（生徒）…会社が水俣病の原因と判定されると、補償金に莫大な金がかかり、生産をストップしなければならぬ。そうすると利潤が少なくなるから。

P…わかるのは時間の問題だから、少しでも補償額を軽くしようとしたから。

T…会社はなぜ軽くしようとするのかな。

P…会社が損をしないよう。利潤追求のさまたげにならないよう。

T…それじゃ、患者の人たちが求めているものは何なのだ。

P…からだ健康であるということ。

P…暖かい周囲の目が欲しいということ。

P…幸福。

T…患者が求めている生活を憲法は保障してこなかったか。

P…（数人が）あ、えーと健康で文化的な最低限度の生活

を営む権利。

T…そう、憲法二十五条だね。被害者が必死に要求している補償金も、人間を大切にするための要求なのだ。患者の要求は、お金の一円二円じゃない。ここがねらいなんだね。十五年も長びいたのは、人間性を優先させなかったからだ。

国が「認定」したので、補償金は死亡者一千三百万円、患者年六十万円（大人、子どもの区別なく）という要求が出されている。問題はこれからなので、新潟の人たちは訴訟に踏み切っているが、熊本の水俣病の人たちは自主交渉、あっせん、訴訟という三段階を踏んで解決しようとしている。

どんな場合であっても、企業の利潤追求を、人間性に優先させることはできないのだ。ということをよく考えながら、水俣病問題をふくめて、これからの産業公害のゆくえを見守ってください。

この結論を聞いて、非常にあわてたのがその場にいた市教委の人たちです。マスコミも大勢詰め掛けていました。また、熊大の地理学の先生は「教室に提示された写真が悲惨過ぎる上、資本主義の暗い面を強調しすぎる」と、市教委の指導主事は「子どもの成長発達にそぐわない」と言いました。

「授業」のその後の反響

私が授業の最後に言った「いかなる企業の利潤であつても、人間性に優先させることはできない」と全く同じ内容の判決が、授業の二年後に新潟地裁でくだされました。四年後には熊本地方裁判所が、この授業に使われた見舞金契約を「公序良俗に反する」と判示しました。私は時代よりも早く結論を出しすぎたのか、ずいぶん騒がれることになりました。

当時、朝日新聞の論説で、永井道雄氏（後・文相）が、「こういう授業は大切だ」と書きました。一方で、文部省の奥田中等教育課長が「中学生にはやらなければならぬことがたくさんあるのだ。こんなことは中学生にわかるはずがない」、文部省の小林教科調査官は「熊本で行なわれた水俣の授業は、指導要領の趣旨にそわないことは言うまでもない」と言いました。だから私はたいへん正しいことをやったと思いましたが。（笑い）

実は、その年の九月に厚生省がチツソの有機水銀が水俣病の原因であるという政府認定を出していますし、熊大も学説としてそのことを定説化していました。ですから、文部省や教育委員会のほうがずっと遅れていたのです。

私の学校のPTA会長が、田中というのが教科書にないことをやったから転勤させろと県議会に陳情したり、校長も監

督不行き届きだといわれたとかいいう情報が全部伝わってきました。そういったことなどあらいだらいい全部、次の授業の討議に使いました。それを聞いた子どもたちがいかに腹を立てたか。「だいたい『暗い』とか『悲惨だ』とか言う大人は、いったい今まで何をしてきたのか」「今までほつたらかしておいて暗いとか悲惨だというほうがよっぽど暗くて悲惨だ」と、子どもたちはそういう感想を持ちました。また、新聞に載ったことによつて全国の多くの人々から激励や励ましの投書やお便りをたくさんいただき、民衆の力、連帯のありがたさというものをひしひしと感じました。民衆と共にある真実というのは、絶対に敗けることがないという確信を強く持ちました。

それから急遽報告書を作り、第十八次全国教研熊本大会で報告し、そこでも大きな問題提起となり、日教組も公害の分科会を設けることを決定しました。そして、全国にこの反響が広がっていき、運動の広がりと共に国会で問題になり、こうした重大な問題が教科書に載っていないのはおかしいではないかということで文部省が突き上げられました。公害対策基本法の一部の改正に伴い、坂田文相の一九七〇年十二月十二日の参院での「公害記述修正」答弁を受け、文部省は指導要領を「改訂告示」「指導書正誤表」の形で改訂、七一年四月からの指導要領・指導書の手をおしを余儀なくされました。

た。以後、教科書には一応「公害」が載ることになり、こうして公害の授業が一般化していったのです。

しかし、残念ながら社会状況や環境が改善されたとは言えません。今年の六月までの水俣病患者数は、一万八千八百八十二名という膨大な数字になっています。私が二十一年前に授業した時の患者数は百十一名でした。つまり行政上なら解決していないということになります。さらに水俣湾を埋め立てた行政は安全宣言をしたいと思います。しかし、水俣湾では未だに基準を超える水銀が魚に検出されているという事実があります。WHOは世界的な水銀基準の見直しを厳しくしようとしたところが、それを緩和させるための資料づくりを日本政府が画策しました。環境庁がそのために学者を使って基準づくりし、国際機関に圧力をかけようとしている、そういう状況にあるわけです。子どもを守る、未来の市民、国民を守るといふ私たちの責任は当然今なお問われているわけです。

「水俣病の授業」で学び得た原則的な方法論

私は水俣病の授業を扱ったことによつて授業を創るマスターキーを得たように思います。それを次に紹介します。

(1)教師自身が、公害の環境破壊における本質的な意義をはつきりとつかむことが必要である。

(2)現象羅列式説明ではなくて、典型的なものを扱うこと。つまりあれもこれもではなくて、何が一番人間性に訴えるものであるかを見極めること。全体がトータルにつかめる典型であること。

(3)典型のなかで、地域・日本・世界に共通する課題を追求すること。そのことが日本の問題、世界の問題になりうる本質的な問題を地域の中からつかむこと。地域が変われば日本や世界が変わり、日本や世界が変われば地域が変わるという問題意識を以て追求していく。「水俣の窓から世界が見える」そういう授業をしなければならぬのではないか。

(4)子どもたちがもつとも怒り、喜ぶ、そういった感動的素材のなかで、子どもたちを揺り動かしながら本質が追求できるものであること。

(5)現在入手できる最高の学問的成果に基づいて授業構成すること。そのためには、絶えず教師は学ばなければならない。

(6)その最高の学問・芸術・思想などの成果を、極度に単純化して与えること。これは、発達段階に対応させて、薄めることではありません。むしろ凝縮していくことです。水俣病の授業で、私が見舞金契約と猫四百号実験に絞ったのは、そこに端的にチツソの矛盾、資本の論理が現れていたからです。(7)いたずらに政治的配慮などせずに教師としての存在理由をたえず良心に問い続けること。慎重と臆病を峻別すること。

(8)感動や怒りを生のままぶつつけるのではなく冷静にそれをおさえ、精密な高い認識の再構成の結果として、生徒に高い認識を感動を以て呼び起こすこと。ただ、生のままでぶつつけてもやがてそれは冷めてしまうのです。本当に子どもたちの思想性にまで高めることが重要です。

(9)教師自身が民衆とともに学び合う謙虚さを持つこと。実際水俣病胎児性の患者さんを抱いてみました。被害者になり得ないまでも、その体験をじかに学び、その胸に体温を感じながら授業することができました。

(10)心底から感動することのできる教師であること。私たち自身感受性が鈍化してしまっていたら、子どもたちにも鈍ります。たえず、感性を磨き続けることが大切です。

水俣病の授業その後の、環境教育学的実践の試み

また、水俣病の授業から得たマスターキーを握ると様々な問題が見えてきました。次に箇条書きで紹介いたします。

一、教科書内容の批判的検討と授業の創造(教科書裁判杉本判決より学ぶ)。民衆と共に学んでいると、歴史の教科書の記述にいかにも問題があるか。例えば、未だに「承久の乱」と書いてあるが、乱というのはその当時の権力者から見て乱というわけだ。それは中国の民主化要求運動を「動乱」であるというのと同じ重要な違いがある(他に、天草島原の乱・大政

奉還・朝鮮出兵・シベリア出兵・米騒動・暴動・学園紛争……
：でよいのか。「真理教育」「学問的自由」とは何か？

二、給食のなかにリジンが入って全国的な問題になった。スモンやサリドマイド等の薬害から学び、子どもたちの健康を守るために、緊急に職員会議を開いて、リジンが入っているかぎり給食の永久ストップを決定。県もリジン中止を決定しました。その他の添加物も問題になり、保護者の親権の行使として、私たちの前任校で給食を自由化したのも、職員会議での科学論争のひとつの成果でした。

三、転動した先でポリオ（小児マヒ）の後遺症の子たちがいることに気付きました。体育の先生がその子たちの体育の評価を、「評価不能」とつけてくれ、それを機会に、その子たちの評価をどうするかという問題をしました。全保護者の署名を集めて県の教育委員会に交渉にいくと、県内に何人機能障害を持った子どもがいるかすら、ましてやその子たちの評価がどうなっているのかも全く分からない状態。文部省から評価の％がきているのですから、障害を持った子どもに1をしわ寄せしていたわけです。これは差別だということを取り組み、やっと県教委が動き、県下の各高校校長あてに機能障害があるからといって入試に差別をしてはならないという文書通達までは出させることに成功しました。

四、修学旅行を今までの安易な観光旅行から、子どもたちが

大分市や臼杵市（臼杵）風成区の住民運動に学ぶ環境教育の一環として再構築しました。テーマは「人間と自然——その過去・現在・未来」で秋吉台・秋芳洞（過去）↓大分新産都市↓新日鉄（現在）↓臼杵風成——住民との交流集会（未来）。大分新産都市の公害学習と風成の住民運動の現地に学ぶ旅行（豊かさとは何か、人間の強さとやさしさとは何か、平和とは、自然とは）。文集の作成と文化祭での演劇「風成の女（こ）したち」の取り組み。

五、国営の横島干拓で稲の青刈りをするという事件が起り、それを教材化し調査することによって農民からじかに今の農政の貧しさと農家の抱えている問題について学習しました。

六、長崎と佐世保に行つて、被爆の部落の人たち、被爆朝鮮・韓国人の人たちから聞き取りをして、被爆と差別の二重苦から基本的な人権学習を構成しました。

七、封建制の犠牲者ガラシア夫人の墓、軍艦一隻造る予算を頼（ライ）患者救済にまわせと政府に要求した日本救ライ事業の草分けリデル・ライト夫人の史蹟等を私達の地域の近くにある問題を提起する地域教材として発掘。（同じくラフカディオ・ハーン、徳永直らや、考古学関係資料にも学ぶ）

八、林業試験場に学び、森林植生、生態系、帰化植物等の調査。

九、熊本国際民芸館に学び、館長を招いて、人間の生活と自然とのバランスについての「民芸の授業」を構成。

十、民族問題——元寇をはじめとする教材の再検討と再構成。元寇（アジア諸民族の視点より）・アメリカ史（原住民、マイノリティの視点より）・世界史（第三世界の視点より）・太平洋戦争（被害国の教科書で学ぶ）・アパルトヘイトと日本など。

十一、スイス、フランスの環境保全と都市再開発調査（一九八〇年）——ノルウェー・イギリスの環境教育に学び地域カリキュラム作成。

十二、天皇制とファシズムをいかに教えるか（アジア諸国の教科書に学ぶ）。第二次世界大戦をファシズム・帝国主義・民族主義・資本主義・社会主義・民主主義といった軸から考え直してみる。昭和天皇の死去を、明治・大正天皇の死去当時の新聞複製版と比較し、その役割（戦争責任など）を帝国憲法と近代史の中での確に位置付ける（八月十五日の歴史的意味も）。

十三、人間の文化としての性教育（愛と育児について考える教育を、リビドーから「文化」へと学ぶ）。

十四、教材植物園の造成、各教科書に出てくる植物を栽植（約七十種）コウゾ、ミツマタ、クワ、アイ、ワタ、ボダイジュ、斑入植物（光合成）、コーヒー、ココヤシ、サトウキ

び、パイナップル、バナナ、パピルス（古代紙試作に成功）、各種洋蘭（卒業生コサージュ用）、肥後菊（全種）、アンネの隠れ家にあった「アンネのバラ」、匂いのある植物（国語用）、カラマツなど約七十種である。

十五、校内植物辞典の編集（自然と人間の関わりに留意しつつ、楽しくおもしろく）

十六、職員作品展（花をテーマに）——下通りの画廊で二十一人が三十七点出品

十七、校内文化センター（作品、参考品展示場）設置

以上のようないろいろのことを今現在もやり続けています。水俣病で学んだ方法論で、環境の問題、自然の問題、人間の問題をあらゆる機会に掘り起こそうとした試みが、私の三十二年間の教員生活のすべてです。

——フロアアから

佐川（熊本） うちの学校でも、担任が自分の問題意識として公害問題を始めて四、五年目になり、水俣病について中学三年間系統立ててやっていこうとしています。その際、資料の中にある「資本主義的」という言葉を消せと、校長がクレームをつけてきました。なぜかと聞きますと、この言葉を用

いる資料を使うと偏向教育だと言われて校長が議会から呼ばれるから消せということでしたが、反論して昨年はどうとう消しませんでした。でもまた、今年もそのことで無駄な時間を費やさなければなりません。今、田中先生の授業をお聞きしてこうした授業の必要性がさらによくわかりましたが、もう少し私達が校長を説得できるようなお知恵をお借りしたいのですが。

田中 管理職がそんなに嫌うなら、「資本主義」という言葉で「利潤の追求」と置き換えたらどうでしょうか。実は社会主義国でも公害は起こっています。それはチェルノブイリの例を引くまでもないことですが、社会主義、資本主義を問わず、人間性を大事にしない官僚主義や利潤追求主義は常に公害を生む可能性があります。利潤追求に走る資本主義国では特に多いのです。反面住民の権利闘争も活発です。授業をやることのほうが大切ですから、みなさんが扱いやすいように変えられたらどうですか。

西本(兵庫) 先生のマスターキーがとても参考になりました。今まで同じような思いで授業してきたつもりが、どこがあかんかったのかなということが、例えば生のものをそのままぶつけてたなか、一つ一つ点検できました。それと社会科の先生なのに、実践をうかがっていると水俣の窓から見えてきたいろんなこと、例えば私が家庭科でやりたいと思っ

ているのは十四番目のことですが、それを実践しているのにびっくりしました。やはり生活者の立場から教科や教育を問いなおし、その場で出来ることからやっていたらいいんじゃないでしょうか。

久木田(熊本) 私は今、熊本市内の同和地区の真ん中で行政権力を与えられて仕事をしています。常に弱者の立場に立つように日々仕事をしています。私がそう思うようになったのはどうしてかなと考えてみると、ふと思い出したのが中学の時に、担任じゃない先生から音楽と社会を習った記憶があるんです。その時の印象がとても強くて、社会では反戦の授業と水俣病の授業が遠慮っぽくちよつとあつたなと思います。ああ、あの先生の影響だったかなと思つたのです。が、担任じゃなかったもんで名前も何も覚えとらんかったですよ。やさしい先生で、おこらつさんだったなぐらいのもんで。十三年前に熊本に帰ってきたときにバスのなかで偶然その先生にお会いして、ああ先生ですかというてあの時の授業の話をして、なつかしいですなと言つて別れました。その時にも、名前を聞かず顔だけ覚えとつたのですよ。

このフォーラムに来る前から、うちのが感動したと田中先生の名前をよく言つたのですが、自分が中学の時に授業を受けたあの先生と、彼女の言う田中先生とは、今までずっと二本の線だったとですよ。今日顔を見て、あつ田中先生と

いうのはあの先生だったのかと、さつき気が付いて感動して涙が出てきました。

私はおとなしい生徒でしたからものすごい衝撃ではなかったばってん、あの反戦と水俣病と音楽の授業はちゃんと覚えとったとですよ。そして自分の頭の後の方にくっついて現在の自分があるんです。現在の自分は相当の行政マンばってん、頭ごなしに言うのは絶対いかんて、相手の気持ちば考え弱者のためにというのはやっぱりあの二十年前と思うんです。みなさん、こういう生徒もありますけん、その時に反応がなくても二十年後十年後に反応するものもありますから、がんばってください。

田中 今みたいな教え子ができますと、たいへんうれしくもあり恐ろしくもあるわけです。教育公務員の厳しさというの、公務員法の厳しさではないですね。自分の仕事が、未来の国民から評価されるというのが本当の厳しさだと思います。我々の仕事は、未来から問われなければならぬと思います。

確かに今、私たちの目の前には危機が迫っている、破局が口をあけて待っているようなそんなたいへんな状況を迎えています。そういう時代であればあるほど我々は、楽しく、ふてぶてしくやる必要があるのではないかと思うのです。「敗北主義」になってはいけないと思います。指導要領が改訂さ

れますが、そんなのはやらなければいいのですから。たいへんだといいながらそれを批判することばかりに時間をとられて、なにも創造していかないのでは困ります。私は、授業を創ること、そして今、目の前にいる子どもたちを鍛えることが一番大切だと思います。批判していくことのなかからいい仕事も出てくると思います。時間がもったいないので私は無視して、自分が本当に納得する仕事を勉強しながら創っていくということが大切だと思っています。一生懸命勉強して、仕事らしい仕事をしようじゃありませんか。

子どもたちの中に入っていくことでは、絶対に子どもに信頼されるということが必要です。そのためには最低限二つのことはやっていただきたい。ひとつは、絶対子どもを差別しないこと。もう一つは子どもたちにとって授業が分かりやすいものであること。この二つがあれば、子どもたちはたいはい先生を好きになります。子どもが信頼してくれると親も信頼してくれます。そうするとコミュニケーションもできます。そういうなかから教育のできる状況を少しずつ創っていくのではないかと思います。

「足を掘れ、そこに泉が湧く」という言葉がありますが、それぞれの地域でそして現場でかかえている問題と、そして目の前にいる子どもたちの現実から出発していこうではありませんか。

(まとめ 西内みなみ)

現代夢幻能

天てんの魚いお

砂田明

——勸進役者と自らを称し、水俣の人より水俣弁を熱く繰る方、砂田明さんの一人芝居は、私たち観る者に、深い問いかけを残しました。“まとめ”にかえて、「海よ母よ子どもらよ——砂田明・夢勸進の世界」(樹心社)より表現をお借りし、素晴らしい一人芝居の紹介を試みることにいたします。

時はWe 夏季フォーラム一日目の夜でした——

ごじらりょうこ

登場人物

江津野老……………老漁夫
 婆さま……………その妻
 清人……………一人息子
 李太郎……………清人の次男
 猿郷の女……………語り部
 黒衣……………後見

この劇は「一人芝居」として脚色されているので、実際に舞台上に登場し演ずるのは、江津野老の「霊」のみである。したがって黒衣をのぞく四人の人物は、観客のまなうらにのみ、現れる。

舞台は、床面ふくめ黒一色、中央奥に燭台があつて、火のつかぬろうそくのみ白い。烈しい鼓の音。黒衣登場してめぐり台に手をかける——「現代夢幻能 天の魚」とあらわれる。むせぶような胡弓が先導して鬼哭啾々の楽音おこり、客電溶暗して場内全くの暗黒となる。

猿郷の女の声——一九六四年。日本中がオリンピックで沸き立っていた昭和三十九年の初秋、わたくしは百間港に近い水俣市江添の丘の上に、江津野李太郎少年とその一家を

原作／石牟礼道子・脚色／砂田明

たずねました。

百間港は、ながく馬刀瀉と呼ばれてきた貝の宝庫で、江戸の初期から美味をもつてきこえた「水俣塩」の発祥地となった入江でございますが、それからほぼ三百年あとに、あの原爆病と共にこの世にあってはならぬ病い、同じ郷党のひとりとして、名を口にしてさえ胸いたむ水俣病の、曝心地となった場所なのでございます。

〔下手奥から江津野老の霊登場。着衣、帯、足袋、頭巾みな黒で、異様なまでに大きく口をひらいた死霊の面——〕
女の声——江津野老は、その百間港の片隅を舟溜りとする一本釣りの專業漁家で、当主の清人しゃんは一目でそれと知れる水俣病であり、少年はその時九歳の胎児性患者であり、当然ながら、懸命に一家の舵とりをしている爺さまの上にも、主婦がわりの婆さまの上にも、水俣病は、色濃く影を落としてるのでございました。

老人の声——「これはこれはあねさん。遠かところば、ようお出でなはり申した」

すでにWeフォーラム会場は、水俣の薄暗い、小さな漁師の小屋に包含されてしまい、ただ砂田さん扮する老人の声だけが、私たちをとらえて、ぐいぐいと語りの世界へ引き込んでゆきました。

老人の声——「あねさん、わしが家の孫はこのあわれな空を中に、上と下に一人ずつ、みな男の子で三人の孫ば授かつとりやす。三人を産んだ母女がさち子でやすが、なんの業かこのさち子が実家でも、九人家内のうち四人、水俣病が出やした。三人目の孫が年子で生まれて間もなう、そんなろまあだえたいの知れんじやった水俣病に、さちの妹がなる、弟がなる両親がなるで、いつとき実家に加勢しぎゆくつもりで帰つて、ふとした風邪がもとでひよくつと死んでしまいやした。へ吐息——あのぞろぞろと、あっちの家でもこっちの家でも水俣病が出て、世の中の黄色かごとなつとるころのどさくさで、ろくに医者にも診てもらえずにですな。……葉代じや注射じや往診じやちゆうて医者どんの代金の太さ太さ。そのうち漁はでけんごとなる。というて補償のなんのはありまつせん。たあだ、獲るな、食うな、売るなでしようが」

「そるばつてんあねさん、残された李やつは。こやつは我が身を我が身であつかいきれん体しとつて。一生、兄貴と弟に世話かけにやならん。兄貴ちゆうても二つ上の十一でござす。父やつも——清人ですたい。あやつもたしか水俣病でござすとも」

「今になればもう水俣病ちやいやなりまっせん。お上かみから生活保護ばいだきよつて、この上水俣病ばいえば、いかにも錢ぜんだけ欲ほつしや、いうごたる」

「わしやもう長か命じやござっせん。長か命じやなが、わが命惜しむわけじやなが、空のためにやあ生きとうござす……。否いんえ。でくればあねさん、このじじばより先に、空の方に早よお迎えのきてくれられた方が——

空よ、勘忍せろ。ね。勘忍してくれい。(わざと明るくおどけてわびる老人)

お前まへやそげん体して生まれてきたが、魂だけは、そこらわたりの子どもとくらぶれば、天と地のごつ、お前の魂の方がずんと深かわい。泣くな空。爺やんの方が泣こごたるがね！(声をころして哭く)

「わしや三番太郎に生まれて家継ぐこたでけん。まあだ明治の終わりごろたいなあ。ふとか成功はせんちやよか。こまんか舟、こまんか小屋ばいっちよわが腕で稼ぎだして、人間ひと並みに暮らそごたる——そげん思うて、いわばおちぶれてきたとでやした。(笑い)

まあそんなころの水俣の百間ちや、さびしかふつうの浦じやった。あのスイギンの出たちゆう排水口はそんなころこま

んか水門じやった」

「人にやメイワクかけんごと信心深く暮らしてきやしたばな。なして、もうじきお迎えのこらすころになつてから、こがんした災難に遭わんばならんとでござつしゆかい。

わしや、つろうござす。わしが死ねば、この家の者どま、いったいどがなりますぞか」

「あねさん、こいつば抱いてみてくだつせ。木で造つた仏さんのごたる軽うござすばい。よだれ垂れ流した仏さまじやばつて。あつはつは、おかしにかい空よい……」

「空の生まれたころの猫やつの、くりんくりんち、貰うてきて貰うてきて狂うて、舞うて……。数えこなさん！隣りの家じや犬も豚も、空と同じこつ、よだれ垂れ流して、前脚やガクツと折つて、鼻から土じだに突つこんで死にやしたばい。山や畑じや、カラスが、人の行いたても飛びきらずにバタバタ、バタバタ……もがきよりやした。あやつどもも拜ひんでやらにや、浮かばれますみや……」

「地獄極楽はこの世にあるちゆうが、まこて(真実)じや」

「あねさん。魚は天のくれらすもんでござす。天のくれらすもんをただで、わが要ると思うしごとってその日を暮らす。これより以上の榮華のどけえいけばあろうかい」

いま、脚本を読み返し、あの場の想起につとめてみて、一人でも多くの人が、砂田さんの芸術に触れる機会をもつていただきたい、と思います。自らの存在を、この社会に対するメッセージとして生きる姿に感動しました。あのような生きざまを目のあたりにできたことは、しあわせです。芝居の最後にうたわれた詩も、ズン、と、帰りのカバンに位置を占めました。

起ちなはれ〈Ⅱ〉

もし 人が 今でも万物の霊長やというのやつたら／こんな酷たらしい毒だらけの世の中 ひつくり返さなあきまへん／なにが文明や／蝶や蜻や螢や 蛭や田螺や雁や燕や、ドジョウやメダカやゲンゴローやイモリや／数も知れん生きもの殺しておいて／首は坐らん目は見えん 耳は聞こえん口きけん 味は分からん手で持てん足で歩けん／——そんな そんな嬰子を産ませておいて／大腸菌かて棲めん海にしてしてもて／なにが高度成長や なにが百年一度の万博

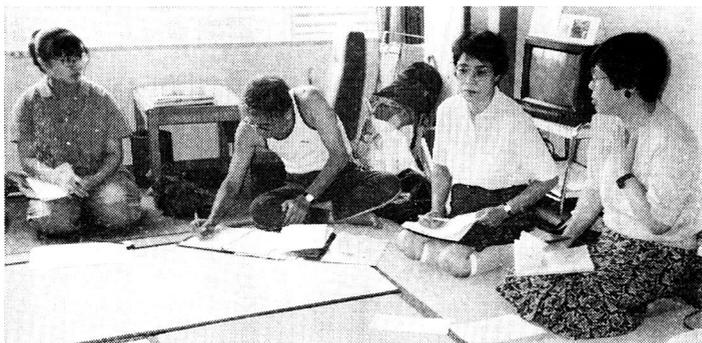
や／貧乏がなんどす え 思い出しなはれ／知らん人には今どきの若い者には教えてあげなはれ／お芋の葉ア食べたかて 生きてきたやおへんか／そのかわりに 青い空には眩いお陽さん／蟬しぐれの樹陰は風の涼しうて あの色と草いきれと綺麗な川と池と海と；／そや 昭和二十年敗戦の夏 大阪湾の芦屋の浜で／今はチョコレートみたいな海になつてる あの大阪湾で／小っちゃい鯛やら河豚やら手でとれた／そんな中で なあ にんげんは ぎょう山の生類といっしょに生きておったんやて／教えてあげなはれ——思い出さんかい／もし あんたが人やつたら／起ちなはれ 戦いなはれ／公害戦争や 水俣戦争やでえ／戦争のきらいなわし等のやる戦争や 人間最後の戦争や 正念場や／勝たな あかん 勝ちぬかな／——子どものために孫のために 親のために 先祖のために／そうしてこの自分自身のために 一度しかない人生のために／……負けたら？／負けたら一卷の終わりや生殺しの毒地獄や／数も知れんほどぎょう山 お仲間の生類殺した霊長はんはなあ そのかわりに／ビニールやら ギッチャギッチャした油やら エントツやらクルマやらテレビやら／数も知れんほどぎょう山のガラクタ残して／この地球から 綺麗な青い星から／消えてしまっただけのハナシや

(砂田明さん現住所 〒867熊本県水俣市袋三七九二乙女塚)

II 人と人、人と自然の共生を求めて

分科会

1 部落解放と私



(右から2人目, 入口千年さん, 3人目が古沢千代勝さん)

若竹キミイ

熊本の部落解放運動から考えたこと

◆差別・被差別の問題とわたし

元教師、現教師、教師を旨とする学生といった顔ぶれを主に、解放同盟の他さまざまな住民運動等にかかわる市民十九名、うち男性五名、熊本県以外四名という分科会だった。自己紹介かたがた、この分科会参加の理由を言つて一巡。分科会テーマと自分との距離について、話す人が多かった。

問題の難しさに、心から向きあいたい求めが、率直に出された。司会、進行は佐川加寿子さん。

◆若い中学教師(家庭)：夏休み前、全校一斉取り組みの同和授業をしたが、自分でもあまりわからないまま授業して、何も伝えられなかった。学区内に地区(被差別の)はなく、やや無頓着な学校かと思うが、年一度の特設授業に、生徒は「またア」という反応。このフォーラムで自分の関心は反原発にあったが、部落解放の問題に自分を近づける必要を痛感し、ここを優先した。

◆地区のない学校からある学校に赴任し、学期に一回の同和授業に緊張の取り組みという他の一人：自分のこれまでは、教師から、資料によってこの問題を知らされてはきたが、実際の生活で部落の人と接触したこともなかったので、「自分のわからなさがわからない」。ちよつとでも、同和教育

という文字のあるところへは飛び込んで学んでいる。

◆地区のある学校で数学を教えて三年目の人：新採の時から集会所に通ったりしていたし、地区の子の担任もした。接点はあるのだが、何か越え切れないものの手前にいるような感じがある。自分をどこにおいとかないといけないうか見えてこない。皆さんは？

◆教育学部の学生：いままでは、この問題について勉強する側にいたが、来春からは教えなくてはいけない側になることを思い、頭でわかってきただけの問題を深く自分のものにしたくてここに。被差別部落の食生活を卒論テーマにしている。

◆前の人と同じ研究室の学生：卒論の研究で食肉センターで長く仕事をしている人に会った。その仕事を見た時は、ウアアと思い、牛や馬がいとおしくなり、そこに働く人のことを思い、感謝し、しみじみ考えてお肉を食べるようになり、胸が痛くなった。感動の体験をいろいろな人に話すと、根深い差別につながると思われる反応に出あう。

レポート1 強い子を育てないかん

入口千年（いりぐち・ちとせ）さん。一九三四年、福岡の炭鉱まちに生まれた。熊本の男性とめぐりあい、結ばれて三十四年、三児がある。彼のホームグラウンドが被差別の地区

であったことによるさまざまな体験から「子どもたちが強く生きられるように」という気持で解放運動に参加。現在、熊本連合会解放同盟婦人部長、支部では教対部長、確認部長。

入口：わたしがものごころついた時は、父も兄もおりませんでした。父は病死、兄は戦死です。六人姉妹の六女。戦争中の厳しさ、女手という厳しさの中を、母は男以上の仕事をして育ててくれました。貧乏—といっても自分のうちは士族、相手がどんなに偉かろうとも、まちがっている時は言わにゃいかん、という育て方をされました。男のいない家族で育って、つれあいのうちに行ったら、女はごはんの仕度しながら仕事にも同じように出ていく、洗濯は休み時間にか、矛盾していると考えていました。部落差別のことはその頃、全然知りませんでした。

長女が十九歳ぐらいの頃、娘を好きという人ができて、彼が車で家まで送ってあげようとなった時に「うちが部落の人間とわかった時に、どうなると思う？　そういうことさされたくない」って、わたしに言うのです。この子たちが、そういうこといつも考えて生きらんなんて思うことが許されなくなつて立ちあがってきたわけです。

わたしもPTAに行った時に、いままで物言ってた人が、誰か部落以外の人が来られたら、急にうしろ向きになって、わたしを知らないような顔されよつた。不思議な気持になつ

たですよ。うちの子どもたちも、給食を配るなどか、汚ないとか、くさいとか、そばに寄るなどか……。それから文通をやり出したらすぐ親から、あすこの子とはつきあうな。まだ六年生ですよ。そういう差別がですね、何で同じ人間に生まれて、ちつとも変わらないのに、たつた部落に生まれていうだけで、一所懸命生きていのに、仕事も、就職もつけない、結婚もできない。口惜しいですよ。もう、差別をなくそうじゃなくて、強い子を育てて、育てないかんでいうことを合言葉にしているわけです。

佐川先生の受け持ちですが、「あなたは、部落って言われたら、どがんです？」と言いなはった時にね、「部落が何か！」って言うと言えたといいことです。少しずつ子どもたち、強くなってきました。

●差別の家庭科はいかん

お母さんたちで男女共学の闘いやつた時にも、家庭科・技術科がですね、二年の実績があるのに、三年前共学をはずされようとしたですよ。女性差別はいかんの何のて言いながら、何ば学校でしよる、子どもに何ばわからせきるとか言うてからですね、腹が立って、わたしたち勉強しました。

佐川先生も桑畑先生も呼んで、何で男女共学が必要なのかというのを知つとかないかんで、指導要領にどがんと書いてあるか、他からも先生呼んで、男女共学がどんななのか

ていうことも勉強しました。優生保護法の時も、公害食品のことも、電気のこと……。 (学校へ行って)差別の授業はいかんで、ベラベラ喋ってですね、「それでいいですか」って、「子どもたちがどれだけ差別の授業を受けてますか」って言うてですね、校長先生は「なるたけするようにしますか」って言いなはった、「いや、校長先生じゃわからん」、って技術の先生も呼びなって、やつとできるようになりました。

先生たちたくさんきておられますから、本当に部落問題を重く感じてほしいと思います。わからないから、せにゃんからじゃなくて。同和教育とは、心に訴えるしかないわけですよ。戦争がはじまる時、教科書で植えつけて行つたわけですから、部落差別も教科書で返して行かにやいかん、そのことを先生たちは知っていただかんとどうにもならんわけです。

レポート2 部落解放の問題から見えてきたもの

二人目のレポート古沢千代勝さんは退職教師である。銃弾の葉莢、碑文の拓本やたくさんの出版物、紙芝居等、いずれも身近からの資料を山ほど携えてのご参加。

部落解放の問題は人間解放の問題なのだということを言いたくて。「部落差別も戦争も、人権を無視しとつとです」と。

「吾が旅路、雨か嵐か知らねども

悔いをのこさじ解放の道」

退職前後の気持を託した歌、四作のご披露までがイントロ。
古沢：子どもたちが、こがん、紙芝居作った。「キラキラ事件／知っていますか、戦争のおそろしさを／解放の子ども会」。これはいまから四十四年前あった話です。

一九四五年、五月五日、南小国村にアメリカの飛行機が飛んできました。最後を飛んでいたB29は、スズメのような日本の戦闘機、紫電改に体当たりされ、白煙をあげながら（ツン崩れて）キラキラと落ちた：その時十一人の米兵がパラシュートで降り、三人がその場で、八人は九州の大病院で人体実験に供され、殺された。：村の人たちは、草刈り鎌、棒切れ、猟銃を持ってとり囲みました。なぜかというど、その頃アメリカと日本は、戦争をしていたからです。：刺し、責め殺している絵、解剖の絵：どうしてこんなことになったのでしょうか。それは、戦争をしていたから。ヒロシマ8／6、ナガサキ8／9、戦争は、敵も味方も全部のいのちをうばう……。

教育でおそろしいですよ。子どもたちが「古沢先生の目の前に米兵が来たら、どがんしたるかねて、先生やっぱ、やっとななるでしょ」て言うた。その通りです。そんな証拠に、わたしの十六歳の日記、12月31日です。「尊い命を御国に奉げられた、幾多皇軍諸兄に心から感謝すると共に、米英撃滅、鬼畜米英の心を堅く決し」。いちばん問題は、日本が三年し

たら負くつと、上層部はわかっつとてしよ、わかっつとて日本は神の国なて、神風ば吹いて勝つて、利用した奴！

こん紙芝居の事件の時、沖繩ん人が最後まで、夕方までアメリカ兵を石で叩いたり、しとんなったそうです。津馬丸やら生き残りした人たちやらが、お寺やらにおつて、こん人たちやもう餓死寸前ぐらい、苦しかったわけですよ。朝鮮の人たちより、被差別部落の人より、まーだ苦しかった。

わたくしは（このほど）長崎市長に手紙ば書いた。市長さんのごとく、本当の勇気をふるいおこし、二度と原爆をかぶることのない世の中をつくり出すこと！ひとりひとりの力ではダメです。ひとりひとりが、市長さんの子になることだと思えます、て。

知らしむべからず、依らしむべし：腹立つ！

目の前に現存する部落差別、二十年取り組んできて、天皇制が見えてきた。入口さんはじめ、部落のおとさん、おかしんたちと勉強させてもらわん限りにおいては、やっぱ見えんじやったですね。部落解放の問題は、ものが見える、見えてくるです。

差別のいま、根っこ、なぜそうなるか。どうするかをめぐつて、レポートの中身は温かく、濃く、十分の一も伝えきれない。質疑、意見交換の時もさらに、新たなレポートのように貴重な話が続いた。人間解放という基軸を一にした、多く

の教育運動、住民としての動きが連なり、気を立ちのぼらせている、阿蘇の山なみのようだった。

共学家庭科への歩みと、同和教育の歩みがひびきあつての結実も、そうした中の鮮やかな一つであり、目のさめる示唆をいただいた。それにしても、寝た子を叩いて起こすかのこ

分科会

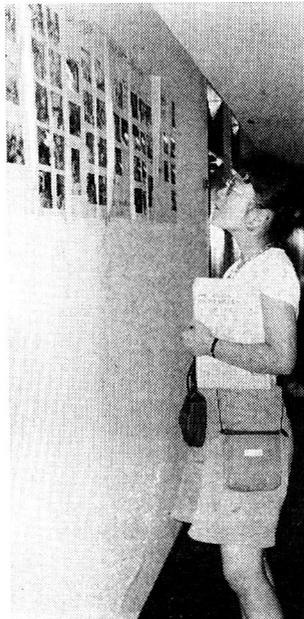
2 熊本の家庭科教育

● 宮崎 春美

● 磯部 幸江

レポート、スライド、廊下には授業風景の写真、その他教材の実物等用意されていて、そこから並並ならぬ熊本のサークルの方たちの熱気が感じられる。長野から今年も一人参加した私は、この分科会で熊本のサークルの人たちのこのエネルギーはどこからくるのかと探っていかねばと期待を胸に参加した。

ときゆさぶり辞さず、ちゃんと前を向いて歩こうと生きる、解放運動の重さは、参加者すべての胸にひびいたと思う。この重みを手放すことなく推められる教育の実際が、次々と話され、論じられたのだが、すでに字数は尽きている。大切に預かり、Weのどこかで活かす機会を期したい。



● 家庭科サークルの歴史

レポートをもとに弥富美枝さんが発表。60年代、二人からはじまったサークルは、最初の十年間は会員が二、三人で、月に一度の例会を開いていた。80年代に入り、会員が三十人ぐらいいなり、サークルだよりの発行、合宿がはじまり、現在は約八十人の会員がいる。

活動の内容と特徴は、①サークルの中で常に「この教材で

子どもにどんな力をつけるのか」ということを討議し、実践を通してさらに検討、整理していくという積み重ねをしている。②「子どもにどんな力をつけるか」とともに、「自分はどうか」つまり、自分はどんな生き方をしようとしているかを問い直しつつ行動していく。③サークルでの実践を教研や、官制研にどんどん出ていって発表したり、まわりの人や新聞社にPRすることを積極的に行っている。④楽しく、それでいて力のつく例会・合宿。そしてあけっぴろげな雰囲気。

◆サークルの例会

甲斐真弓さんが発表。

例会は月に一回程度で参加者は、八人から二十人程度。内容はレポートの検討と実習で、若い教師と先輩の教師で構成されている。

レポートの検討では、いろいろな角度から鋭く厳しい指摘がなされる。失敗例・成功例を交えての説得力ある話や、明日の授業で使えるようなプリントの持ち寄りもあり、多くの収穫を得て、目の前が明るくなってくる。

また、実習は計画を立てずに思い当たらずに実行という感じで、本場中国のぎょうざ作り、玉ねぎの皮を使った染色、わらじ作り……など楽しんで授業に役立ちそうなものばかりである。「私にとってサークルとは、楽しみの、また、

栄養補給の場であり、疲れている時でもやる気が出て力がわいてくるものです。私もいつか先輩のようになれるのを夢みて、がんばっています」としめくくった。

続いて、合宿や、ハム作りの様子こっぴもちの授業をとったスライドを写しながら活動の様子が楽しく説明された。熊本大学の桑畑先生の自宅で合宿が行われているのには驚き、感心してしまった。

分科会報告のこの原稿を書いていて、そういえば数年前に長野でも有志で作っている「おさの会」という会に誘われて参加したことがあったことを思い出した。五、六人の会で若い人ばかりだったが、けっこう楽しく力づけられたと思う。しかし三回ぐらい集まった後、それぞれ任地を移動したり、結婚したりして連絡がとれなくなり自然消滅してしまい、今はない。それを思うにつけ、熊本のこのサークルのこのチームワークと行動力のエネルギーはどこからくるのだろうかと思議だ。重要なポイントは、先輩が若い人たちをいつも前面に押しだして活躍させ、鍛えて育てようとしている姿勢があること。そしてお互い忙しい中での資料の提供や、丁寧なアドバイスをしたり、サークルだよりを発行して、出席できない会員にも情報を提供していくという取り組みにあるのではないかと思った。そして何よりもみなさん明るく元気なのが強く印象に残った。



という。お正月にお母さんが作ったものを食べてはいたが。

こっばもちを教材にすることに不安があったが、「地域の人に先生になってもらえばいいんだ!」と決心した。さっそ

こっばもちの実践については、授業風景のスライドをたくさん使って、榊原和子さんが発表。こっばもちとは、さつま芋をゆでて干して（やり方は地域によって違うが）乾燥させ、それを再度加熱し、つぶして餅といっしょについたものである。ハレの日の天草特有の食べ物である。昔は天草という芋と魚しかないという所で、ご飯の代わりにふかした芋を食べるとい生活だった。しかし榊原さんは、天草で生まれ育った人であるが、自分でこっばもちを作ったこともなければ、作り方も知らなかった

く子どものおばあちゃんを訪ね、相談ののってもらい、授業の時も来てもらった。また学級懇談会でも話し、保護者からアドバイスと協力をもらったら、案ずるより産むが易しだった。（We'90年一月号に実践の紹介）

そして、まとめの中で「子ども自身、私の心配などど吹く風で、柔らかく、しかも確かに学んでいきました。でもそれは、私が与えたのではなく、子どもたち自身の中にある学びとる力によるものだったと思います。自分の手でこっばもちを作った経験、おばあちゃんから直に話を聞いたり、さつま芋の食べ方など昔の食生活の様子を聞き取ったりする経験の中で、自然な私たちでひき出されたように感じます」としめくくった。

続いてこれまでの発表について質疑応答の時間がとられた。内容の濃い、よく準備された発表でなかなか質問も出されなかった。

こっばもちの「こっば」の由来については、はっきりしないが、子どもの実態としては、子どもの九割近くの子がこっばもちを知っていて食べたことがあるとのこと。

こっばもちの実物はなかったが、菜種のように油をとるからし菜の種や綿花、まゆ玉、密着立体を作ったものなど、実物がまわされ、そっちの方にも真剣になってしまった。

熊本での男女共修が進められていった経過については、「こんな家庭科を男子にも学ばせたい」とまず家庭科の教師が母親に訴えていったこと、それから、部落の差別をなくしようと運動している人たちと協力して一緒に運動していったこと、学校では、技術科の先生と話しあうだけでなく、職員会でとりあげてもらい、実現していったなど、具体的に話された。だんだんに予定していた分科会の内容に関係する話になっていったので、分散会に移った。

(宮崎春美)

〈こっばもちの実践についての分散会〉

全体会で詳しく発表されたので、分科会では一人ひとり自分の実践やかかえている問題について話しあっていた。

「高校で毎年同じ内容を繰り返し教えている。新しいことや地域の教材を取り入れてやっていきたい」

「大学で教えている。熊本の実践は『産業教育(?)』の中でも取りあげられている。こちらでの実態は遅れていてお話しにならないが、がんばってやっていきたい」

「小学校一年の担任。子どもがおかれている状況はとてもしばしい。今何をやらねばならないのか、何ができるかを考えていきたい」

「地域教材というのは今長野でも割とやっている。でも他教科の先生からなにを今さら古くさいことをとか、時代に逆行しているのでは、と言われることがある。またこれから男女共学でやっていくと授業が成立しなくなるのではと心配する先生もいる」

「家庭科は原点を教える教科だ。頭の古い人は相手にしないで若い人と一緒にやったらいい。授業以前のこととしてまず生徒を知ろうとしたり、動くことが大切。夏休みに毎日家庭訪問している人を知っている。教師の姿で子どもがついてくると思う」

「合成洗剤のを取りあげたり、いwashを一びき使って、手開きしたりすると子どもはのってくる。そして強く印象を残していることがある」

「私立の高校で教えている。調理室やカリキュラム、他の家庭科の先生とのからみで、新しい題材を取り入れることは不可能に近い」

「私なら他の先生に黙ってやってしまうと思う」

「なかなかそうもいかないが、できる範囲で一つでもやってみることだ」など。

分科会は時間が短くて、なかなか話が深まらず残念。私の場合話を深めるより、日頃思っていることを何とか言っ

しまおうとする気持ち強く、とんでもないことを言ってしまったような気もする。でもみなさん真剣に聞いて、またよきアドバイスをもたらしたことはとてもうれしかった。本当にありがとうございました。それから熊本のサークルの方々、ごくろうさまでした。たくさんのおみやげをかかえて帰って、また私まんぼうろうと思っています。(宮崎春美)

「熊本の家庭科サークル」 についての分散会

一九八九年三月、新しい学習指導要領が告示され、中学・高校の男女必修の家庭科の内容が決まった。しかし、その内容は、女子差別撤廃条約の精神にのっとった男女平等教育にはなっていない。全面实施に向けて(小学校'92年、中学校'93年、高校学年進行で'94年から)指導書も作成され、各地で教育委員会主催の学習指導要領の伝達講習会が開かれたり、各学校では教育課程の編成にとりかかっている。

現場の先生方は、やっと男女一緒に授業ができるという喜びと共に、家庭科はどのように変えられてしまうのかという不安、コンピュータのような最新の技術を駆使しないと生き残れないのだろうかという危惧を持つ。今こそ、家庭科教

師がすぐれた実践家としても活動家としても期待される時である。

'88年能勢フォーラムでは、授業づくりへの新たな視点や、自分の職場で共修を創り上げていくための手立てを探り、今年の熊本へとつなげた。熊本は、共修に向けてのサークルでの取り組みの歴史も長く、教職員組合の活動もさかんな地である。フォーラムを盛り上げている人々から学ぶことは多く、出会いが楽しみであった。

二つのレポートを聞いた後、熊本の家庭科サークルについてさらに深めようと、二十二名が集まった。それぞれの自己紹介で、個々の活動の様子や悩みが多く出された。まず、なぜこの分散会に参加したかという取り組みの姿勢をあげてみる。

「組合で共学をすすめるための検討委員や推進委員をやっているが、今一つ広げられない。燃えないという悩みを持つ。熊本の活動に学びたい」

「自分の職場や地域でサークルを作り学んでいきたい。何からどのようにやっていけばよいのだろうか」

「Weで学んだことを実践していく力をつけたい。水俣(地域)に学びたい。差別を許さぬ姿勢を持ち続けたい。自分を鍛えたい。力を高めたい」——彼女たちのひたむきさと向上心がそれぞれの言葉で伝わって、みんな誠実にまんぼうっておられ

るのだと心を打たれる——

地域で活動されている市民の方から、「Weを読んで家庭科は、人間形成に役立てられる大事な教科と思っているが、先生方はどう思っているのか知りたい。一生懸命やっておられる先生方と共に、親も変わってもらいたい。地域でそういう活動を続けていこうと思っている」

熊本サークルの方々からは、サークルについて次のような話があった。

「サークルは、行動する人たちの集まりである。メンバーは遠方の人もいるが、毎月例会を開き、春には合宿をして実践講座を開いたり、工場見学に行ったり、参加すれば得る物は多い。先輩の人たちのめんどうみのよさと、行動力と、サークルだよりをまめに出すような事務的なことをしつかりやれる人がいることが強みである」

定期的に発行されているという通信を見せていただいたが、内容も豊富で読めばどんな活動をしているかもよくわかり、すばらしいと感心した。忙しい仕事の中でこういう縁の下の力持ちの存在は大きい。

大阪の宮崎美代子さんが「中国戦線での強姦が及ぼした思想的影響」というテーマの授業後に、生徒たちが書いた感想集を持参され、女子差別を許さぬ強い態度で女性解放の教育

をしなければと話された。生徒たちの反応はすばらしい。先生方にも差別をみぬく目を持ってもらいたいと、彼女の取り組みの実績からの声である。

この会では話に出なかったが、熊本にも差別と闘う運動の歴史がある。「分科会の1」でも報告されたと思うが、部落解放と人間解放を重ねて、家庭科は女と男に差をつけないで教えてほしいと父母と共に闘っている先生方もおられる。大阪市が十九億円をかけてモジリアニの「横たわる裸婦」を買い取ることに異議を申し入れたという宮崎さんからの報告もあった。

日常の差別に敏感で、おかしいと声をあげることができるようになるためにも、家庭科の授業で取り上げる題材は多様であると思う。そこから何を学び、考えるか教師の姿勢が問われている。

新学習指導要領については、家庭科の免許を持った先生が少なくなつて、選択になつた時の時間数の確保がむずかしい、世の中の動きと共に内容が変えられていくことの問題などが出た。時間切れで充分な話し合いができなかったのが残念であった。

「学習指導要領の改訂によって、家庭科は一教科の枠を越えて市民問題のレベルとなった。今、教師に求められること

は、新学習指導要領に対して自分は何ができるか、サークルとして何ができるか、次の世代につなげるために今をどう生きるかを考え、行動することである。やりたいことはたくさんあるが、授業で何をどう取り上げるか、選び抜く力を持ち、生徒にかみあう形の教材にしていくことである。We編集長の半田たつ子さんの言葉は、納得でき、教師として原点でもあると思う。私も、今やっていることを自信を持って進めていきたい。

発見がたくさんあり、密度の濃い三日間を過ごしたフォーラムが終わり、虫の音の響く九月になった。私は中学校の教員なので長い夏休みあけの生徒たちとの再会に、また身がひきしまる想いをしている。フォーラム二日目の田中裕一さんの講演の中にあつた「わかりやすい授業をせよ。子どもを差別するな」という授業の根本が、毎日の仕事の中に繰り返す思い浮かぶ。それぞれにフォーラムで得たこと学んだことが、現在の生活のはしはしに流れ、生きているのではないだろうか。特に家庭科の先生方、今日の授業に新しい試みをおこなっているのではないだろうか。熊本の実践そのままというわけにはいかないけれど、授業の組み立てや生徒を見る心の中に生かしていきたいと思う。

多くの学んだことを次回へつなげるために、話し合いの中

で感じたことをいくつかあげてみたい。

同じテーマのもとに集まった分散会であっても、やはりそれぞれにかかえている事情が違うし、県の実状も様々で、いろいろな次元の話が出る。自分が一番聞きたいと思う話が無かったとか、せっかく言ったのにみんなの話題にならなかったというもどかしさがあると思う。

今回も内容が豊富で人数も多く、時間が足りなかった。司会の片山さんは、サークルのメンバーは、実行委員として多数いるから機会を見つけ呼びとめて話をしてほしいと最後に言っておられた。そうすることによって参加者にもっと多くの出会いの場が設けられると思う。レポートの他に、スライドや教材の標本、実物がたくさんあってよかったこともあげておきたい。

「先生方の中には、情熱をもって家庭科を教えている方と、授業よりも運動として文部省に働きかけたり、署名を集めたりとかに一生涯のタイプとがある。もちろんそれらが両方とも備わっている方もおられるけど、一人の先生がどちらかに傾いていることが多い。一人の教師として、自分が向かいあっている生徒たちのために何を教えたらいいか、情熱的に取り組むと同時に、たいへんだけれどそれを一人の努力だけに終わらせないでみんなと連帯して何かをやる。今の情勢がどちらを向いているかを視野の中に入れて、やりたいことをや

ってほしい」という半田さんの指摘、本当にそうだと思う。職場で真面目に孤軍奮闘しておられる先生方がたくさんいるのだから。半田さんはさらに続ける。

「その二つがかみ合う人が非常に少ない。さらに家庭科の先生だから家事育児をないがしろにできないと、二重負担にあえぐのが、家庭科教師の悲劇になりがちだ。でも——、フォーラムには、あえぎをいやし、元気なエネルギーを蓄えるために集う。困難な状況の中でも会に参加できなかった仲間と共に一歩でも前進して来年に積み上げよう」と。

会には、教師でない方の参加もあった。Weに石けんコンサート通信を連載している吉田明弘さんは、通信教育で家庭科の免許をとろうとがんばっている。地域で活動しておられるという年配の女性お二人。そういう方々ともっと交流して家庭科の新しい風を入れられればいいなと想いはふくらむ。熊本サークルの方々との交流も深めたかったという心残りは来年につなげて。来年も出会いを広げていきましょう。

(磯部幸江)

分科会

3 熊本の女性史研究

青木喜代江

第三分科会「熊本の女性史研究」には、熊本の家族史研究会の石原通子さんをお迎えして、十六名の参加がありました。同会の会員の方がたも多数参加されて、熊本色ゆたかな分科会になりました。

木村駒子と高群逸枝

石原通子さんからは、二十世紀はじめの熊本における木村駒子と高群逸枝の生きかたを、第一次世界大戦にむかう社会状況とからめて、用意してくださった資料にそってお話をいただきました。

木村駒子については、石原さんが七月に刊行された『熊

本評論」の女」（女性史双書Ⅳ 家族史研究会刊）にまとめられた研究と、出版のご苦労などのお話がありました。

また、高群逸枝の「日本婚姻史」に言及され、家族史研究会では「女性史研究」誌で、これまで高群批判をおこなってきたということでした。

たとえば、「新しい高群逸枝論のために——付・高群研究労作年表」「母権と母系——高群逸枝氏の『母系』によせて」（犬童美子、第一、二集）、「奈良時代の夫婦同居制をめぐる——洞富雄・高群逸枝の論争」「今昔物語」における婚姻関係——高群逸枝の婿入婚をめぐる」（緒方和子、第一、二集）、「寄合婚」（中山そみ、第二集）、「族内婚と族外婚——高群逸枝氏のばあい」（石原通子、第四集）などがあります。また高群逸枝著『平安鎌倉室町家族の研究』（国書刊行会、一九八五年）が刊行されたが、この本を校訂された栗原弘氏によって、高群の「意志的誤謬」が指摘され、高群の『招婿婚の研究』が実証とみせかけたフィクションであったことがあきらかになった、という紹介がありました。

●熊本家族史研究会

家族史研究会は、70年に発足して、今年で二十九年目にはいります。高教組の家庭科部会の教科研で、縫う、作るというだけでなく、教科の内容や、男女共学の問題など考えてい

くなかで、家族のことをきちんとおさえることが、家庭科の存在意義につながるのではないか、そして、もっと勉強して、自分たちがよく知らない家族を理論的にきちんととらえるようになりたいと思ったのが出発、最初は三〜四人の小さな会からスタートしたそうです。

さいわい、熊本女子大学の社会学教授で原始社会に詳しい布村一夫氏に指導を仰ぎ、家族の原始のところの勉強会が始まりました。

会員もしだいに増え、75年の国際婦人年の年から「女性史研究」誌を刊行してこられました。今年の第二十四集（十二月刊）は「ポストおてもやん・熊本市一〇〇年の女たち」と題して刊行され、明治二十二年の市会議員の選挙権も被選挙権もえられなかった女たちから、第二次大戦後に選挙権がえられる女たちの、一〇〇年のあいだの生活を聞きがきしたということでした（定価 一〇〇〇円）。

●このあとの懇談で

〇さん——「戦後、家庭科は憲法のとりの『民主主義』の『家庭』を教える義務を負わされ『家庭の民主化』に努力させられたのが、53年ごろから。十二単位あったのが四単位となり、62〜63年から二単位でもよくなり、家庭科の教師として悩んでいるときに、家庭科の先生がたが集まってなんとか

しなくてはと、家族史研究会ができて、よい指導者の先生にも
お願いできて、とても幸せだったと思っています。

家庭科が、時の政策に翻弄され、上手に利用されてきたの
を実際に体験したんです。こんなに弄ばれて、家庭科は、本
当に、いるのか、いらなかったのかまで、みなで話し合いました
けど、「家族」の教科書もあったことや、きちんとおしえなけ



(左から2人目が石原通子さん)

ればならないと話し合いました。

そのうち、高度成長にもなつて、カギっ子や、家族の問
題がいろいろ言われるようになり、「家族」の問題はやはり、
家庭科のなかで大事だと、みんなががんばってやってきまし
た」

Mさん——「現場では「家庭科なんかいららん」という男の先
生とけんかをしてきました。家庭科がいらぬものなら、私
たちも家庭科の教師でいることもないので、教えなくてもい
いですよ、と男の先生と言い争いました。

そんななかで、私たちが、家庭科で何を教えるか、生活技
術も大切だと思いますが、家庭科の存在価値をしっかりとつ
ために、私自身ももっと勉強したいと思って、参加しました」
Sさん——「私は、定時制高校の教師をしています。週一
日だけ、昼間、准看護学院で授業をしています。

学院では近隣の高卒の男女のほかに、離婚した女性が専門
的なことを身につけようと、今年は八人学んでいます。家族
史研究会で勉強したことを話すと、それぞれがさまざまな経
験を経ているので、スーッと話にはいつてきて、受けとめて
くれるんです。とても熱心で、私の方が逆に、勉強させられ
ています。

定時制の方の生徒の家庭の状況はさまざまなんです。母
親が男と家出し、家庭がボロボロになり、自殺未遂……と

か、男女差別のある家庭でいからふつうの今の家庭の生活をしたいと言う生徒が多いんです。

そういう子たちは、婦人問題より、料理とか、裁縫をきちんと習いたいというんです。この子たちに、女と男が平等に生きていくということを、どのように伝えていけばいいのだろうか、思っています」

Hさん——「男女共学のこと、家庭科の教師同士でも共学をしたがらない人たちがいます。男女共学は、家庭科の教師にはつらいんだと思うんですね。私は、女の中に、そのまま男も入れて、二倍の人数で授業しているんですが、今はやらなくてもすむわけで、その方が楽ですからね。

家庭科の教師のなかに、そういう二つの対立するものが、ずっとあって、女の子は、女の子らしくしたほうがよいと、男の先生といっしょになって、良妻賢母の教育に協力するんです。そういう先生の方が、かわいい女として見られるわけです。そうでなければ、けんかをして満身、傷だらけ。今の女の問題が家庭科の中に濃縮してあると思うんです」

Nさん——「私が一番関心事だったのは、家族と経済社会のつながりを、どう考えていくかということでした。

家庭科を女だけに学ばせたり、家庭科をどうするかは、全部文部省の教育政策であるわけで、経済社会と、個人、家族は、どうつながっているのか。

女性史の中の各個人が、どういう歩みかたをしたかを見るなかで、世のなかの大きな流れ、政治・経済がどう動いているかを、見る力量をつけないと、家族は、わからないと思います」

Aさん——「ますます複雑になっていく経済社会のなかにあつて、家庭経済にとどまらず世界経済までもと、家庭科のとりあつかう範囲というのは、どんどん広がってきて、広い知識が要求され、家庭科の先生はつらいですね。一方では、裁縫や料理の生活技術もやりたいといっています。

共学の問題をすすめるためにも、教科内容を充実していかないと力になりませんし、つらいです」

Sさん——「私は職業高校の教師だったんですが、共学をしたいという一心で、試案をだしたんですね。職員会議で他の学校もしているということでOKが出たんですけど、教頭がその試案をみて最後にすてゼリフで、『こぎやん幅広かこつば、一人でできる力があるのか』と言われました。良心的に考えれば全部できるわけではないのですがそれを目標に、できるだけ近づけたいと思うんですが、そう言われて、これは猛勉強しないといけないと思い、またつらい教科だと思いましたが」

Kさん——「今度の指導要領の改訂で、家庭科では『深入りすることがないように』と書かれています。今まで手さぐり

でやってきた実践が、こういう文章だったら、したらいけないことになります。私は開きなおっていますからいいんですけど、あとにつづいてくる若い人たちがこの文章に制約されたら、どんな家庭科になるんだろうとムラムラします」

家庭科の教師のかたが多く、話題も家族のことに集中しました。
この家族史研究会のメンバーからも何人かが発起人になっておられる「熊本女性学研究会」が、十一月から発足しています。

のオーソリティとも言わなければならない。その辺をお聞きしたところ、もともと植物への興味は幼い頃からあって、それが動物に移り、人間、哲学にと発展していき、社会科の教師になられた、とのことでした。

現在は人間の生き方、社会的側面がテーマで、自然破壊が進み、自然と人間が離れていく現状を何とかしたいと語られました。

私たちは田中先生の作成された資料に沿って、阿蘇の野草をたずね歩いたのですが、先生は正確に頭脳にインプットされた地理、地形、植物分布、植物の形態などを様々なエピソードも混じえて話してくださいました。

保養センターをスタートした私たちは、キャベツ畑やトウモロコシ畑、緑の野山をながめながら、第一観察地のスズラン自生地に着きました。スズランは阿蘇にあることが大変珍しく、西日本では阿蘇にしか自生しないそうです。

4 野外コース

— 阿蘇の大自然と

野草をたずねる —

梶原 公子

真夏の青空と阿蘇の山々が広がります。朝九時、予定人員二十人を大幅に上回る、子どもを含めた総勢三十四人が、車七台に分乗して出発しました。

野草観察のガイドは、「環境破壊を授業する」を担当された田中裕一先生。田中先生は中学の社会科教師ですが、野草

一面夏草が生い繁っている、としか見えなかった所に、たくさんの個性ある野草が生きていました。草いきれの中を、田中先生の説明に耳を傾けながら、ひとつずつ野草の名前と姿かたちを確認し、資料に印をつける作業に、夢中になってしまいました。

背丈の低い草の中に、ひときわがっしりと高く伸びて、黄色い花をつけているハンカイソウ。その名は中国漢初の猛将樊噲の名を取ったものだと言います。樊噲と言えば有名な「鴻門の会」を思い出します。楚漢抗争のクライマックス、項羽と劉邦の会見の場、劉邦の危機を救ったあの樊噲です。頭髪はことごとく天に向かい、まなじりは裂けんばかりという豪傑。そう思っって手で触れると、太くたくましい茎にはざらざらした毛がいつぱい生えています。

続けて第二、第三観察地に向かいます。舗装道から林道に入り、少し山を登ると幾種もの野草が見られます。

紫色のワレモコウ。カワラナデシコはいつも見る花より、濃いピンク色で、野生美です。シオンは薄紫の花がかたまつて咲き、紫苑と書く方がより優雅です。

幻のヒゴタイもみつけました。アザミに似たトゲのある葉、ネギボウズを紫色に染めたような花。寒暖の差が大きな阿蘇では、花の色が濃い瑠璃色になるそうです。

鮮やかな朱色の花のノヒメユリは、可憐そのものです。



これらシオン、ヒゴタイ、ノヒメユリなどは、大陸と九州との関係を示す大陸系植物です。

オミナエシは黄色い小さな花がたくさんついた、秋の七草で知られる花です。ところがその名はおみなめし（女飯）がなまったもので、昔男尊女卑が厳しかった時、女は皆アワを常食としていたので、女の食べる飯＝オミナエシとなったと言うのです。これに対してオトコエシという花は、なるほど白くて、男の常食が米であったところに由来するのです。

かつての女性蔑視の思想が、植物の名としてさり気なく残されているのに驚いてしまいました。後で辞書を引いてみると「おみなえし・女郎花」となっていて、再びショックを覚ええました。

これらの野草を観た近辺に波野駅があります。波野駅は九



(右はしが田中裕一さん)

州最高所の駅で、海拔七五四m。しかしひなびた無人駅で閑散としており、ホームも一日上下五本の列車を送迎するだけのようでした。

ここから私たちは箱石峠に向かいます。沿道は牧草が青々として、天然クーラーの風が心地よく通ります。その広い山野のほんの所々に牛が放牧されていて、茶色の愛嬌のある顔をのぞかせます。野草愛好家の一団に、驚きと関心を持っている顔つきです。

「最近スーパーに行ったら、一ビン八百円もする牛乳があつてびっくりしたの。なぜこんなに高いのかお店の人に聞いたら、ストレスのない牛から搾った牛乳だからなんですって。この牛だったら、きっとストレスがないでしょうね」。車

窓から牛を眺めてSさんが言いました。
「それにしても八百円とは高い。買ったの?」

「買わなかったわ。だってストレスがないって、一体どうやって判定するのかあやしいでしょ」

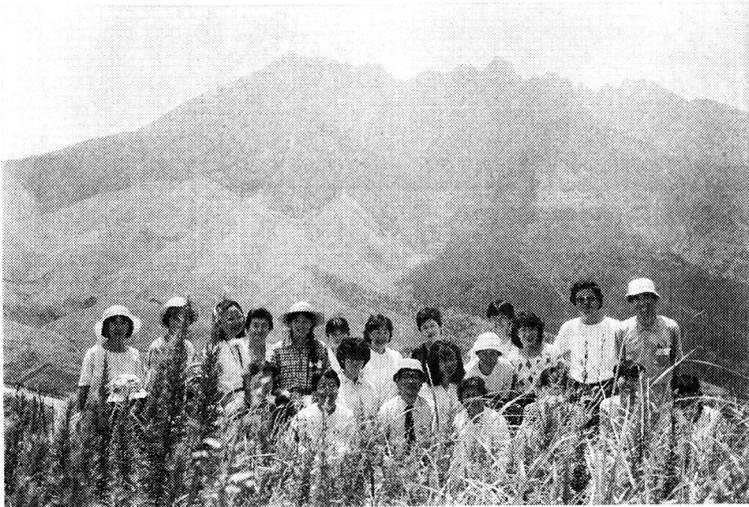
「そうね。一種の靈感商法になりかねない。でも健康食品や自然食品のブームに乗って、ノンストレス食品と銘打ったら売れるかも知れないね。ストレスのない豚の肉ですとか、ストレスのない鶏の卵ですとか……」

「だけど、もともと食べ物自然で安全なもののはずでしょ

う。それが汚染され、危険なものが多く作られるようになった今、健康食品とか自然食品とか言って高く売るといふのは、消費者の弱味につけ込むやり方で、おかしいと思うわ」この意見に車内一同はホント、ホントと異口同音に一致しました。

到着した箱石峠は、阿蘇の五岳―高岳、根子岳、中岳、烏帽子岳、杵島岳―が一望でき、裾野は一面に草千里が広がる絶景の場所です。ここはご存じミヤマキリシマの名所で、五月中旬には全山が赤く染まるほど咲くそうです。遠くには白い仏舍利塔が望まれ、私たちはこの心洗われる草地に腰を下ろして昼食をとりました。

最後の観察地は、阿蘇野草園です。阿蘇は全国有数の植物の宝庫で、火山活動による噴出物、冷涼な気候、



牧畜などの草地によって、千五百種以上の植物が棲息しています。それらの多くをこの植物園で観ることができました。

コウライトモエソウは、黄色い花弁が外側に回ろうとする形をした花で、大陸からの遺存植物です。高麗巴草と漢字で書くとかんじがつかめます。

ハナシノブは藤色のかわいい花が、幾つもかたままって咲いています。ヤマホトトギスは、時鳥のように紫色のはん点がついた不思議な形の花で、足もとにひっそりと咲いています。例の幻のヒゴタイもありました。林道で観たものより大きく、色は淡い紫色でした。

眺めて歩くと、全体として紫系の花が多いようです。しかもひと口に紫とは言えない、微妙な色彩の違いがあつて、それぞれ巧妙な造りを持つているのです。造物主がひとつひ

とつこの植物に生命を吹き込んだとしか考えられないのです。

誰とはなしに、

「こんなにたくさんさんの野草があるのを知ると、うっかり足元の草を踏みつけられないね」

という言葉が漏れ、全く同感です。野草の名前に印をつけたら、この分野に疎い私でさえ40を越え、愛好家の方は60を越えました。

帰り道、昨日の原田正純先生の言葉が頭をかすめました。

5 土と命を守る

熊本の活動

入江 一恵

もう、八年前にもなろうか。福知山淑徳学園を訪れた時の学校園、「21世紀の森」で見た黒々と掘りおこされた土への

「自然のサイクルの中で、植物も人間も動物も、次の世代がきちんと組み込まれている。人間の身勝手、このサイクルを破壊してはならない」

多くの野草をはじめ、動物、鳥や魚、水や土中の微生物、そして人間などすべての生物が網の目のようにうまくからみ合って、地球の生態系を創っている、という実感を覚えながら保養センターに到着しました。

感動、そして、信州安曇野のりんご園の死んでいる土と生きている土をまざまざと見せつけられた時の驚愕——以来、私の土への思い入れは続いている。そして今、熊本で自給農業を営む緒方意一郎さんの徹底した生きざまにふれ、新たな感動を覚え自らの日常への問いかけが始まっている。

●先ず自己紹介から

予定よりも参加者が増え、二十六名、入口に重なり合うようにして先ず自己紹介、豚の腸をもらってソーセージを作るなかで緒方さんと知り合った末永さん、そして、末永さんの中学校の後任として赴任した坂本さんのコンビの司会で始まった。

東京・小金井で「湧水を守ろう」という運動をしてこられた金子さん、かつて農業高校で畜産を教えていたが、現在、

熊本市で肉の検査をやっている久木田さん、六年間、子供がアトピーで入院をくり返すなかで食べ物と必死に取り組み体質改善している井上さん、食生活のくずれは生活のくずれと八代の小学校で家庭科を組みたてている方、熊本の水がおいしいのにびっくりしたと改めて水問題に開眼した方など、参加者の誰もが食べ物と環境への思いを語った。

〈問題提起〉

。なぜ農業に踏み切ったかーカネミ油症患者との出会いー

農家の生まれでもなく、農業経験もなかった緒方さんがなぜ自給農業をめざしたか。ここに現在の緒方さんを支える原点があるように思う。

大学で工業化学を専攻した私は、大阪の総合商社に就職、セキスイ化学の製品である土質安定剤の販売に北九州地域を走り回っていた。当時は石油ショック以前、仕事をすればするほどもうかかった。下水道工事、新幹線工事、電話工事、有明ドックと大工事をスムーズに運ぶには土を固める必要があった。その度にかかりの量の土質安定剤が投入された。特に有明ドックの工事は湧水に流されるため、気が遠くなるほどの薬品が注入された。

当時、薬品を販売している私がつれあいに「有明の貝とのりは食べるな」ときつく言ったほどだった。この薬品は製造

段階では手をふれてはいけない、完全装備で作られたもので、工事現場の近くの川の魚は腹をかえして死んでいった。私が会社をやめたあとこの薬品は毒性が強いということで製造が中止された。私はその頃、こんなことをしていて将来どうなるんだらうと頭にチラつくこともあったが、学生時代からの信念で金もうけに突走っていた。

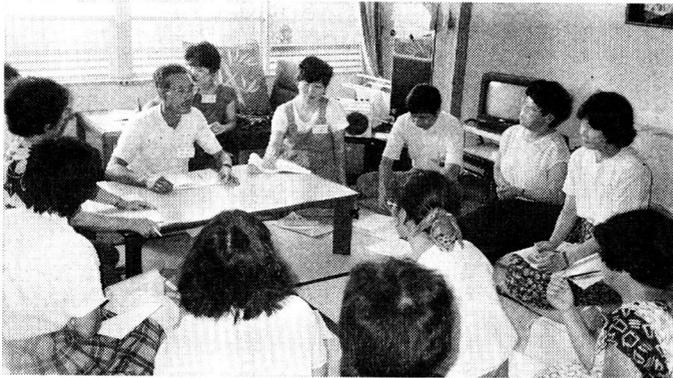
その頃、カネミ油症の問題がおこった。北九州を回っていた私は、あることから油症患者と知り合った。素通りはできない。一方では会社の営業マンの顔をもち、他方では座り込みの患者さんをたずねる二足のワラジをはくようになった。

。有機農業、土づくりとひと口にいうが――

「化学的なものはいっさい使いたくないということではじめた私も、現代社会の仕組みの中では生産と結びつかず、いたしかたなくビニールマルチと輸入飼料を使う結果になった。便利なビニールを日常的に使う我々がチツソの会社を支えたのです。今日、私の言いたいことはこれなんです」と語る緒方さんの表情は苦渋に満ちている。

自分で食べたいものを作って食べる。仕事はしたい時にする。化学的なものはいっさい使いたくない。今までの生活とは百八十度の転換、会社をやめて自給農業をめざした。先ず

愛農会に入り、廃屋を見つけてそこで寝とまりしながら三年間、農業を学んだ。ちよūdその時、つれあいは長子をみごもっていた。山あいの傾斜地を開墾してはじめた農業——十年間は失敗の連続、収穫皆無で徒労感が募った。こういうことが水の泡なんだな、パーなんだなあと、思い知った。



(左から三人目が緒方意一郎さん)

土作りとひと口でいうが、ものすごい量の堆肥がいる。刈ってきた草や手に入るわらでは間に合わない。ごく最近、ブロイラーの業者からのこ屑をトラックで運んでくれるルートができてやっと息がつけるようになった。それに山あいの傾斜地は雨が降ると表土が流れる。大切な表土を流

したくない。化学的なのはいっさい使いたくない。葛藤の末、ビニールマルチの使用に踏み切った。これで被うことにより温度はあがるし、表土が流れなくなり、とてもよくなった。粘土質の赤土で味のいい完全無農薬米もとれている。現実には、結局化学的なのにお世話になっている。

農業は、地力を作ることが一番、有機農家は地力作りに堆肥舎作りに力を注いでいる。しかし、その原料の90パーセントは輸入品にたよる現状、私の所も飼料は大豆、小麦、魚粉、ペレット状青ものを輸入している(草まで輸入していることになる)。輸入品は港でストックする。貯蔵すれば虫がつくのは当たり前、当然燻蒸される。これで果たして有機農業が安全だといえるだろうか。

また、牛を飼っていたが、牛も家族の一員として柵の中で放牧した。しかし、みそこうじを食べて体内で発酵し、ガスがたまり事故死した。今は牛をやめて豚を飼っているが、牧草を食べさせていると軽くて山羊のように柵を飛び越える。普通は4〜5kgのえさで1kgの肉がとれるが、私の所では運動するので7〜8kgえさをやらないといけない。身がしまっていてどちらかという加工に向いている。

今、有機農家といえども輸入の濃厚飼料を使わないと豚も豚にならないのである。できればやめたいと思うものの使わざるを得ない所に苦しみがある。消費者もそのことを認識し

て食べてほしい。農業において回転が早いということは、工場に近いということ、石油を使った農業ほどもうかるといことも心にとどめておいてほしい。

。地球を汚さずに生きるということは一

昔の人は、何百年も地球を汚さず生きてきた。江戸時代が三百年も続いたのは、下水処理をうまくやり、リサイクルな街づくりをやっていたからだと思う。このことを我々は学んでいきたい。例えば、人間のし尿はチツ素分が多く高熱が出るので私の所では堆肥にまぜている。

しかし、トイレにちり紙を捨てていた頃は腐りにくかった。これは、バージンパルプでも苛性ソーダを使っており、古紙にいたってはどんな薬品が入っているかわからない。用紙のチリ紙を別の缶に入れるようになって、し尿の腐り方は全然違ってきた。草やワラだったら一年もすると形がなくなり土になる。でも便利なビニールはいつまでたってもそのままである。石油におんぶして自然を汚してほんとに文化的な生活をしているといえるだろうか。環境は地球規模で考えないとダメになる。土と命を守るといことは地球を守るといことではないか。

。ビデオ視聴

熊本家庭科サークルの人たちが、緒方さん宅でのハム・ペーコン作りを見学した時のビデオを視聴。

〈質疑〉

。学校や家庭で簡単にハム作りはできないか

緒方・久木田——煙でいぶせる容器さえあればよい。例えば古い洋服ダンス、いらなくなった茶箱など。18ℓの缶を2個、たてにくつつけて穴をあけコンロにのせてやっている人もいる。肉のかたまりを布で巻き煙で仕上げる方法と、糸で巻き湯で煮る方法があるが煙は桜の木でないと食べられない。

。牛に草を食べさせてはいけぬのか

緒方——肉にする牛は、より効率よく肉にするためにカロリーの高いえさで早くふとるようにしている。普通は草だけで肉にするようなことはしていない。

久木田——牛には育成期と肥育期があり、本来なら一貫して育てる所を現在は育成農家と肥育農家に分かれている。育成期は、青草を食べさせ、走らせて足腰を強くする時期であるにもかかわらず、配合飼料でふとらせて高く売るといいうしくみになっている。青草を食った牛の肉はカロチンで黄色味を帯びた脂肪だが美味、濃厚飼料で育てた牛の肉の味は淡白である。

。豚のしっぽを切りとって密飼いしているのはほんとうか。

久木田——豚は、人間以上にデリケートで清潔好きである。

密飼いをするとストレスがたまり弱い豚のしつぽをかむ。するとバイキンが脊髄をとおって入り病気になるので、予め先に切って苦い抗生物質を塗っている。

。緒方さんの所の豚の飼料と他の飼料とは違うのか。よく病気にさせないために、飼料に抗生物質を混ぜると聞くが、規制はないのか。

久木田——仔豚の時期は病気になるやすい。だから育成期には使っている。法律では肥育期の出荷何カ月前は抗生物質を使ってはいけないことになっている。しかし、これが守られているかどうかは企業倫理である。行政としては月に何回か食品衛生監視員が調べている。このことに不安な人たちが集まって養豚業の人たちに抗生物質を使わないでほしいと要望し、提携しているのが生協の豚肉である。

緒方——しかし、仔豚の離乳の時は生協でも必ず抗生物質を使っている。それは使わないとやっていけないからで、私の家では今でも使っていないが、そのために下痢をするわ、ガリ豚になるわでサンザン失敗した。どこでもやっていないから教えてもらうにも教えてもらえなかった。今では母乳の免疫をもらって何とか守っている。

緒方さんへの質問は次から次へと続いた。参加者の一人である久木田さんも畜産にくわしいとあっていろいろ答えてく

ださった。食べものと農、そして土、このつながりがわかっていても私たちの日常には見えないものが多すぎる。今、自分の目の前の食べ物はどうやって作られたか全然わからないといっても過言ではない。不安感、不信感が渦巻くなかで少し見えかけたというのが本音だろうか。

これまで私にも何人かの農を憂い実践する人たちとの出会いがあった。しかし、緒方さんの一途な生き方、石油化学に對するきびしさはどこからくるのであろうか。「便利さに不感症になっている我々が、チツソを支えたのです」の緒方さんの言葉は、胸を刺した。文明の発達と生態系の破壊の同時進行を食い止めるのは、やはり人間の智慧でなくてはならない。公害をまきちらしている自分自身の日常生活を変えていくことからはじめよう。そんな各地の実践交流をとの司会者の発言があったが、時間切れとなった。

緒方さんから、最後に提案があった。一人でも多くの人が田んぼを購入し、田んぼを作ってほしい。役場は今、政府の土地流動化政策で土地を動かしている。これを利用して、日本のすばらしい米文化、水田技術を一人でも多くの人によって守ってほしい、と。

散会后に注文した緒方さんの所の米とハムは、何れ我が家にも届けられるだろう。汗と脂の結晶の味がかみしめられる日が待たれる。

6 原発やめて 命が大事

◆鈴木昭彦



(前列左側が小原良子さん)

この第六分科会「原発やめて」には二十名弱の参加者があり、男性が比較的多かった。元気な子ども参加(？)もありました。

問題提起は大分・別府から出席をお願いした小原良子さ

ん、進行は地元熊本で活躍の中島真一郎さん。小原さんは別の「グループ・原発なしで暮らしたい」の中心人物なれど、飾り気のない、ざっくばらんな方。彼女はあれも伝えたい、これも伝えたいと熱のこもった口調。中島さんは「原発なしで暮らしたい・九州共同行動」の事務局長を務め、その語り口は軽やかでとどまるところを知らないかのよう。

一九八六年に起きたソ連・チェルノブイリ原発事故。まだまだ私たちの記憶に新しい。被害がヨーロッパだけでなく、アジア、そして全世界にも及んでいることは、改めて言うまでもない。これが一過性ではなく、いつ果てるか分からないう、いわば終わりのない被害だけに人々の恐怖を大きくしている。原発の事故がわれわれの暮らしを根絶やしにしかねない、そんなことすら思わせるものになっている。そして私たちの暮らしがどのように脆い土台にのっているか、砂上の楼閣であることを気づかせるものだった。

このような危機感が日本の反・脱原発の動きに拍車をかけることになった。広瀬隆さんの著作や講演活動、あるいは甘蕉珠恵子さんの本「まだ間に合うのなら」もきっかけとなって多くの市民が正に当事者として立ち上がった。小原さんもその中のひとりであった。

彼女は子どもの教育については学校に対して率直に発言していたが、環境問題に関心を寄せるようになったのはゴルフ場建設問題がきっかけだった。チエルノブイリ事故については当初、その重大性を意識していなかった。事故があった年に小原さんはギリシャを旅し、そこで求めたお土産のナッツ、それが汚染されていたのを知ったのが、翌年出席した大分での広瀬隆さんの講演会。知らなかったとはいえ、本当に「どうしよう」というのがそのときの正直な彼女の気持ち。

小原さんの話はこんなことから始まった。原子力発電所の仕組みには触れずに、彼女は原発問題に関わる中で見えて来たものが何だったのか、私たちは何をどうしていったらいいのか、彼女の話の焦点はそちらにあった。

彼女のことば通りには紹介できないけれども、大事と思われることをいくつか、私なりに挙げてみる。

その1

端的に言えば、原発が私たちの消費中心の生活のありようを率直に物語っている。「使い捨て させる文化に 慣らされる」という川柳のようなものだ。彼女の子どもさんにならば、原発は私たちに「お似合い」なのだ。常日頃、小原さんは、自分の頭で考え、自らの責任で行動すること、自分の人生は自分で生きていくことの大切さを説いてきた。そうや

って育った彼女の子どもさんから見たら、原発は正に大人の責任、「冗談じゃないよ。何とかしてよ」ということになる。

その2

原発問題に取り組んでいく中で彼女が気づかされたのは、既成の労働運動、市民運動の持つ考え方および行動の仕方のも硬直性である。代表を立て、中心となる人を置いて、ある計画を立て、周囲の人々を巻き込んで行く、組合なら執行部が一般組合員を動員していくスタイルである。あるいはまるがかえの運動と言ってもよいかも知れない。ここでは個々人の考え、責任が最大限に重視されることはないだろうし、本末転倒して組織の論理のみがまかり通ってしまうこともある。さまざまな形で自分たちの反対の意志を表そうとする彼女たちに、自主規制を求めて運動自体の活力もそいでしまうことになる。運動の右ならえだ。

その3

広瀬隆さんの講演会を別府で行うことから始まった小原さんたちの原発問題への取り組みは、従来の運動のすすめ方は別の考え方で始まった。

すなわち、行動に参加するひとりひとりの意志および責任



がまず問われる。行動全体を統率する個人あるいは、団体は存在しない。いや不

必要なのだ。誰も自分を、あるいは自分たちを代表する人はいない。抗議先の企業が、代表者となら会いましょう、というのと対照的だ。どの参加者も当事者として対等な関係にある。エライ人は存在しない。これはある意味で直接民主主義の考えだろう。右なえを拒否する。

他者の生存(権)を脅かさない。侵害しない、を最低限あるいは最高のモラルとする。だから自他の生存(権)の脅威となるものに対してはどこまでも声を出し、行動する。

このような考え方を取らないひとは別のやり方、スタイル

で行動していけばいいのである。自分の考え、スタイルをそれぞれが貫いていけばいいのである。他人に依拠しない、他人を理由にしないやり方である。

彼女たちの考え、行動の仕方がいかに発揮されたのは四国電力による伊方原発での出力調整試験への反対運動であり、高松の四国電力本社や東京の通産省への抗議行動である。彼女たちのグループは、八八年の伊方原発の出力調整試験に反対署名を集めるが、署名は短時期に一〇〇万を越える。組織を持たず、自分の身近から広げた動きの成果だ。組織あるいは人脈を有するはずの中島さんは労働組合などの組織を通して三〇〇名分しか集まらなかったという。個人で二五

〇〇名の署名を集めた方もおられるというのに。

彼女たちは、抗議運動に向いた四国電力の社員に対して、原発の、出力調整試験の危険性を訴える。何時間も何時間も続ける。歌や踊りでも彼女たちの反対の意志を表す。社員は出力調整のあることも、その危険性も会社から聞かされていないことも明らかにしてくる。社員の家族たちが危険性に驚く。また取り囲む警官や刑事にも同様のことを試みる(私なんか考えたこともないことだ)。社員や警官たちの対応が変わってくる。役割として彼らはいるけれども、同じ人間

の土俵に立って彼女たちは話をする。原発の前には企業戦士

も警官もない、ということかも知れない。

統率したがる男たち（中島さんの言）は行動計画を立て、大衆を動員しようとするし、運動を量で捉えがち。運動が一糸乱れることなく終始することに気を取られ、相手方に合わせて動く。なれ合いの危険性も出てくる。大分で、高松で、あるいは東京で、彼女たちは何度かそれを経験させられる。

例えば抗議行動中に逮捕などの危険性があるとしても、論理はこちら側にあるのだから、それを言い続けなければ、と彼女は反論する。相手方に合わせて動く必要はないのだ。どこまでも自己の責任と意志にかかることなのだ。

反対運動の中にあっても彼女たちは自由自在だ。伊方では泊り込みでの反対行動だった。参加者は話し合うだけでなく、歌い、踊る。自然発生的にだ。誰もがデモの中で解放感と同時に、いままで知らなかった人々とのつよい結びつきを意識したという。

彼女が語ることは単純である。原発は危険であり、出力調整も含めて直ちに運転を止めなければならない。安全性は証明されていないし、放射性廃棄物にも対応策がない以上、直ちに止めなければならない。そしてチェルノブイリ事故の重大さを知ったからには、事実を知ったからには、私たちは自分の判断と意志においてその事実を他に伝えるためにも行動

しなければならぬ。まず自分の身近なところから始めなければならぬ。

彼女の考えに対して、学校の中で取り上げるのは何かやりにくいところがある。例えば合成洗剤の危険性を取り上げるのとは違うようだ。そんな声がある参加者から出た。

事柄の重大さを考えれば沈黙は許されない。「やはり言い続けていく、何らかの行動を継続させて行くことが周りの対応を変えていくのでは」、というのが中島さん。「確信犯になればいいんですよ、話すことできつかけができるし、さらに相手に踏み込んで行くこともできるでしょうから」。こともなげに言う中島さんに参加者は共感すれど、しばし沈黙。

また、当初は真剣に原発問題に取り組んでいたが、それは代替エネルギーをどうするのだ、と言われて現在、多少引き気味になっている、と別の参加者。

それに対して小原さんは「なぜ私たちがそれを考える必要があるの」、と言う。「むしろ企業側へきちんとその要求を出していくことなのだ。企業の問題なのだ」、と中島さん。

まとまらない報告でしたが、原発問題だけでなく、生きていく上での原則めいたものを確認させられた分科会でした。

7 夫婦別姓を考える

◆ 本田 和代

はじめに「結婚改姓を考える会」の三名の方が、会のできた背景などを語り問題提起をされた後、討論に移った。

◆ 問題提起

〈緒方由紀子さん〉 今までの日本は夫婦同姓が当然だったが、女性の社会進出により結婚年齢が高くなり、姓に対する愛着、改姓の不便さが叫ばれるようになった。法律では婚姻届を出せば必ずどちらかが改姓しなければならず、現在98パーセントが夫の姓を名のっている。女性の姓にすると養子だと見られたり、男性が気の毒だというとらえ方をされたりする。こういう社会背景の中で、「結婚改姓を考える会」が発

足し、月一回例会が開かれている。

「別姓結婚」は、次の二通りの方法で実行されている。

◎通称使用の場合……婚姻届を出し戸籍上は配偶者の姓に変わるが、社会生活上は旧姓を使う。強い意志が必要。

◎事実婚の場合……婚姻届は出さずに事実上の結婚をする。法律的には内縁関係と呼ばれ、同棲ともいわれる。社会の偏見さえ気にしなればすっきりして良い。

私は事実婚をした。名前が変わるのが嫌だし、手続も面倒、プライバシーを必要のない人に知らせることになり、夫の所属物のようになる。仕事・営業上も不利であり、個人と個人で行われるはずの結婚が、夫の家に入った気になってしまふ。このあたりが、私が結婚改姓にこだわる原点だと思ふ。片方しか働いていない場合、配偶者控除がない、扶養手当がつかない、相続税でなく贈与税が課されるなどの不利な点がある。夫婦同姓を強要するのは日本だけであり、日本でも明治民法以前は別姓が基本であった。最近では夫婦別姓選択制を求める声が大きく、札幌、東京、愛知などで会が結成されている。

〈松井史子さん〉 「夫婦同姓別姓の選択を可能にする民法の改正に関する請願」をやっているので協力を。社共は党として賛成している。マスコミでも取り上げ方が具体的になった。私の場合は旧姓を通称使用している。簡単に姓を変えたく



ないという意識があったから。この問題の原因は、私が「女だから」という理由に尽きることに気づく。結婚のあいさつ状はなし、夫の住んでいた家に移り住んだので表札は夫の姓だが、友人関係、通帳類、キャッシュカード、有効期限内のパスポート、国家試験などはすべて旧姓のまま通った。手紙は最初「く方」を入れていたが、そのうち旧姓のみで届くようになった。会社では

上司に「後継ぎ問題があった旧姓にもどすかもしれないので、できる範囲で旧姓使用したい」と申し出た。とにかく通称で通すことが先決だったので、この言い方は効果的であった。コンピュータ処理で止むを得ないものもあるが、呼称、動静表黒板、名刺などは旧姓使用している。印鑑は名前のみのものを使用している（印鑑登録できる）。会社には改姓届を出さない方がスムーズにいくと後から思っ

た。

〈広瀬正彦さん〉男が自分の口からしゃべらなければならぬ時代だと思う。私の場合は婚姻届は出さず、高校で知り合ったので高校を本籍としている。家計はすべて折半。家事も公務員の私が70〜80パーセントをやっている。私は同世代の人間の中では優れていると思っていたが、彼女に会い、「あなたには自分というものが無い」という一言に自分の実体的ないことを思い知らされた。その時から自分を見つける旅が始まった。個人が個人らしく生きてゆくにはどうしたらいいか、別姓はそのワンステップだと思う。特に男性の中身を広げなくてはいけない。あなたは何がしたいのかと突きつめたら、何も言えない人が多いのではないか。そういう対話を続ける中で男の運動をしていかなければならぬだろう。

◆自己紹介を兼ねた自由討論

A 家庭科教師。共修を進める運動をしている。結婚して十六年になるが、名前が変わるのが嫌で旧姓のまま通知を出した。旧姓を通せるなどは考えが及ばず、夫の姓できている。戸籍制度はなくすべきだと考えている。

B 私立中高の家庭科教師。周囲は「妻、女房、奥さん」などの呼称が示すとおり人間関係がほとんどだ。学校には外国籍の子が多い。



ひとつであるべきという考え方が強い。デンティティーの確立には大事だと思う。二十歳になって分籍し、自分の戸籍を作った。

C 私は広瀬さんの逆にオレはオレと思ってきた。だからこういった物事に對して関心をもちやすい。しんどいが自分の視点でものを考えてきた。

D 新聞社に勤めている。女だから文化家庭部にやられたという面もあるが、違った形で模索してみたい。結婚はまだしてないが、自分の姓を続けたいという気持がある。

E 家庭裁判所の調査官をやっている。離婚した母と暮らしていたが、父方の姓を名のついていたために、周囲や親戚と闘ってきた。友人・知人には家族の表札は

結婚時、再び戸籍問題に突き当たった。結婚届は出さくなくったが、同居するには転勤の必要があり、婚姻届を出さねばならなかった。人事を最高裁にぎっており、事実上メチャメチャな転勤がある。通称使用は全く認められていない。

F 中学の家庭科教師を退職した。現実的に姓は変えない方が都合がいい。私は相手の家に入る形の結婚だったので、実の親にはしてあげたくもできず、心の中に矛盾があった。長い伝統の中で、男女が平等になったといっても、現実は今くそうでない。何組か仲人をしたが、離婚の際に姓が変わるのは不自由だなあと思っている。

G 中学家庭科教師。七、八年前に男女共修がスタートし自立できる生活をさせたいと願っている。三十年前から結婚しても姓が変わっていない友人を持ち、感心している。

H 高校家庭科教師。職場の平均年齢が高く、保守の地域にいるので、ここで刺激を受けたいと思った。戸籍とは何だろうという疑問をもっている。

I 高校に勤務。結婚して姓が変わり自分でない気がした。喜びよりモヤモヤが残った。かといって戸籍に入れずに妊娠した場合、五、六カ月に入り墮胎できないと、女性の戸籍に傷がついてしまう。新聞の家庭文化欄は男性に読んでもらうよう工夫してほしい。

D 土曜は男が読む家庭欄とされているが、ネタが少ない。おもしろい生き方をしている男性がいない。

J 家庭科教師。戸籍は女性を追いつめるように作られていると思う。社会は女性を自分で生きられないようにしておいて、男性がそれをかばう。これを男らしさという。

K 韓国籍の友人がいて、国籍の問題から戸籍を考えるようになった。戸籍はいらないのではないかと思う。

L 改姓について考えたことがなかったので勉強したい。

M 主婦。結婚して二十年になるが、改姓がなかったなら、お互いもっと尊敬し合って暮らせたのではなかったかと思う。

養う・養われるの意識から抜け出せず、ここ二、三年は同居離婚も考えていた。お墓は自分は海でも山でもいいのだが、どこかに納まらなくてはいけないらしい。自分の代はだめでも子どもの代にはと思うので、前向きな親でありたい。

N 「改姓を考える会」の会員。半年ごとに職業を変わっている。あまり働きたくないのでそういう職場を選ぶと、女性が多く、その中で常に男であることを要求されてしまう。全男性を背負わされて負担が大きくなってしまふ。

血縁は切れているのに「氏」という抽象的なもので、祖先はこうであったなどと言われる。姓はどうでもいいように大切なものだ。

K 高校家庭科教師。簡単に夫の姓を選んでしまったが、そ

の後の生活に及ぼす影響の大きさに驚いている。嫁にやっ
た、もらったという親の意識、子どもまでが姓の同じ祖父母
を本当の祖父母だととらえている。別姓結婚は意識改革の上
で、重要なことだ。

フリートキング

○墓の問題は切実だ。○比叡山はだれでも入れるのか？ ○
自己申告で入れる。○入りたい墓に入れるのか。○その墓の
継承者が拒否すれば入れない。○みんな墓を作るという手
もある。○墓は家制度そのものだ。○マスコミのとり上げ
で、別姓ができそうな雰囲気はある。選択制ができれば男性
に与えるカルチャーショックは大きい。○戸籍は？ ○六歳
になるのに戸籍のない子もいる。戸籍がなくて住民票だけの
人もいる。人があって戸籍があるべきだ。○男子より女子の
方が結婚に対する考え方が深い。何となく不利だと感じてい
るらしい。○男の子を変えないといけない。特にエリート層。
○戸籍が傷つく、等無意識に戸籍を神聖化している。一般大衆
レベルで意識を変えるにはどうすればよいか。○人間の意識
というのがある時点でサーツと変わるんじゃないかと思う。
意識を引っ張っていく面での法改正と自分では位置づけてい
る。○法改正はひとつのステップ。○九州で「改姓を考える
会」を作りますか。ネットワーク作りをしたい。

8 女と男、女と女、男と男 ぶつかりぶつかり何かが変わる

北川 好美



(左はしが中嶋里美さん)

司会の中嶋里美さん。三つのパートに区切り、話し合う。
一、家族の中の女と男。提案者は中嶋里美さんと平井雷太さん

二、アグネス論争から、育児の中の女と男、女と女。提案者は大塚きよえさん

三、女と政治（都議選と、参院選が終わって）。提案者は中嶋里美さん

一、家族の中の女と男

女と男。家族関係の中でぶつかり合って何かが変わっていく。その変化の様子を、平井さん、中嶋さんが話し、その感想や意見を出し合うかたちですすめられました。

中嶋さん―一度結婚し離婚した。その時、制度的な結婚というものは、お互いの自由を奪うものでしかないと思い、現在は、高校教師である夫（この分科会にも参加）と共同生活している。家事は分担し、彼は料理が苦手であるが、二人で台所に立っている。

平井さん―結婚し、離婚した同じ相手と再婚。そしてまた離婚。今独り暮らしをし、自炊して自由を実感している。

二度目の結婚も、結局は、相手に期待していないつもりであったが、期待していたのではないかと思う。こうしてほしいこうすればよくなるというのは、本人にとって、よけいな

お世話ではないか。他人に（期待）されたくもないし、したくもない。好きな女性を一人に決められない。出会いは点、瞬間でよいのではないか。パートナーが決まっていれば、閉鎖的になってしまう。関係は広がっていくべきだと思う。

K―離婚はすごいエネルギーがいる。自己主張の強い夫なので今までよく議論し合った。期待されることは、抑圧でしかないと思う。現在、夫は仕事の都合で家に居る時間が短くなったので楽になった。子どもに対しても、自分の背の高さを超えたら手離してもよいと思うようになった。

平井―子どもに未練はない。長男はアメリカへ行っている。次男は妻の方へ行き、こちらと自由に行き来している。子どもにすべきことはしたと思えた時に、二度目の離婚があった。離婚はやってみたいとわからない。あるいは自分を見るために離婚したのかもしれない。

N―離婚しようと思って十数年来た。しかし相手に期待しないではいられない。期待しているから離婚しないのだ。お互いをさらけだし批判し合い、変わっていきたいと思っている。期待せずにはいられない。この期待って一体何だろうと思う。

―夫婦は一心同体だと思っていた時があった。夫婦は別々の人間だとわかってきた。二人合わせて生きるより、それぞれが、ゆたかに生きたいと思っている。

中嶋―夫婦間、子どもとの関係、職場での人間関係もすべてに距離を置くということは必要かもしれない。

M―何かを変えるのではなく、何かが変わる。分科会のテーマのそこが気に入った。期待し合わないなら夫婦ではない。ぶつかり合うことの大切さ。最後の最後の期待、その一線、相入れられなければ一緒にいられない。そして十年を単位に見ていくと、ずいぶん変わっているのに気付くものだ。

二、アグネス論争から見えてきたもの

提案者の大塚さんと中嶋さんは、「出席簿は男女ミックス」が新聞に載ったのが縁で知り合ったのだそうだ。今回が初顔合わせと聞いて、中嶋さんのネットワーク作りのすごさを実感してしまった。

大塚さんは、まずアグネス論争の経過を語る。

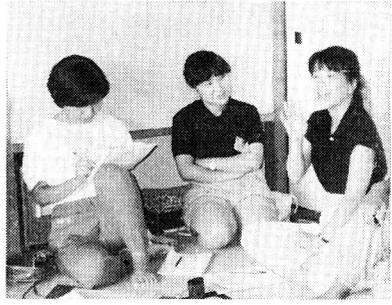
。淡谷のり子―子連れ出勤は世帯じみて貧乏くさい

。林真理子―プロ意識に欠けている

。中野翠―ガキはうるさい。職場は大人の領域なのだ

この後、林真理子・中野翠の子連れ出勤への批判は、個人攻撃に変わっていく。そこにアグネスチャン擁護派として上野千鶴子が登場する過程を紹介。その他に、竹内好美と若桑みどりを主な論争の人物として報告してくれた。

。上野千鶴子―アグネスチャンの子連れ出勤を、ルール違反



ネスの子連れ出勤は、気付かせ、問題提起をしている。

。竹内好美―子どもが小さい時、女が育児を分担すべきだとアグネスが言っているのには同調できない。育児は男女が平等に分担すべきである。ラッシュ時に子連れで出勤するより、家の近くの託児所を選ぶ方が自然である。女性の職場に託児所を作れば、男は育児を分担しなくなる。

。若桑みどり―政治は、働く男女が安心して育児できるような環境を整えるべきである。国会へアグネスを呼んだのは、彼女のやり方が、権力にとって無害、有益であるからだ。女性の働く権利と子どもの幸福を共に実現するには、男性中心の権力構造と企業利益優先の体制の変革と、我々の意識の変革

だというが、それはルールが守られて利益のある者、即ち男社を支えている男たちの言葉ではない。働く母親の背後には子どもがいる。男たちが子連れ出勤しないですんでいるのは、だれのおかげなのだ。働く父親母親も、あたかも子どもがいなにかのように職業人の顔でやりすごす。その背後で、子育てがタダではすまないことを、アグ

が必要なのだ。

大塚―私はアグネス擁護派である。この論争で気付いたのは、林真理子や中野翠に原稿依頼しているのは男であり、「男」の利益の代弁者として利用されているというのである。読売新聞の人生相談では、離婚したい女を説得させるのに女を使っている。支配者は、その権力を行使する時、被抑圧者を使うものなのだ。

アグネスの大学での講義「コミュニケーション論」の中で異文化のぶつかり方のパターンは次の四つに分類できるとしている。①ジェノサイド（一方が他方を抑圧）②アシミュレーション（一方が他方を同化）③アパルトヘイト（一方が他方を隔離）④インテグレーション（お互いを大切にしながら生かし合う）

この分類を男性文化と女性文化に置きかえてみると面白いと思う。④を理想的な関係だと思う。

N―夫の長時間労働について、いつも夫と話し合ってきた。ついに彼はエリートコースから外されてしまった。男の価値観は出世することであり、それが家族の幸福につながると思っている。そんな夫たちに対して、まわりの女たちは闘わずにあきらめてしまっている。

N―私の知り合いの女性は、夫に転職を要求して出産した。エリートが、今の社会問題を作り出している。水俣問題

もしかり。私たち女にエリートはいらない。選ばない。

Y―育児しながら働く女性は、会社をみんな辞めていってしまっている。女がもつと居直るくらいにならないと条件はよくならない。あまりに女一人がしんどいことをみんなかぶってしまっている。そんな時、子どもがかわいそうだという言葉で、働きたい女を家にとじこめてしまっている。

K―いつも子どもを、自分の都合で連れ歩いてきたが、それは子どもにとってよくなかったのではないかと思っっている。もつと地域の人とのコミュニケーションを持ってきたらよかった。

H―子どものおかげで関係がひろがる。労働力にもなる。小さい時から風呂そうじや、朝食作りなどまかせてきた。子どもにしてみれば、親なんかいらぬのではないかと思う。

M―手術をして死を思った時、やりたいことをやって死にたいと思った。子どもは同化しようとしてもダメだと思う。

大塚―男と女、親と子は「嵐の中のハリネズミ」の関係がよいのかもしれない。嵐から逃れ、穴の中で二匹のハリネズミが暖まり合おうと、ひつつくとお互いのハリで刺してしまふ。慌てて離れ、それがまたひつつき合って離れるっていう……。

三、女と政治

中嶋―国際婦人年の十年目にケニアに行った時、つくづく、女がもつと政治を担い、開発援助、外交に出て行かねば思った。団塊の世代と呼ばれる女性の6%が「政治家になってもよいと思っている」という調査結果もある。是非多くの女性に立候補してもらいたいと思う。政治の力は大きい。

I―紀平さんの選挙運動をした。他人に頼らず小さいながら会を作りがなばった。

Y―組合サイドの支援活動をした。組織化されると、指示を待つてしまう。割り当てられた動員数で、手当てが出て初めて動くという状態で、それ以上何もできない。卒業生といふ関係を作っておくべきである。電話した時、手応えがある。

N―生協活動も、政治抜きでは語れない。もつと政治を学習していきたいと思っっている。

中嶋―費用もカンパ、手弁当でやれば安くすむ。週刊ポスト等、今回の選挙では許せない報道をしてきている。抗議文を送ったり、不買運動に持つていけるくらいにすべきだ。今まで男性議員中心の都議会に女性議員が増え、トイレ、保育室などができ、どんどん変えられていくはずだ。

本当に面白い充実した話し合いが中嶋さんの司会ですすめられました。もつと載せたい話がたくさん出たように思いますが。まづいまとめ方で申しわけなく思っています。

三人との出会い、深まる関係

子どもたちとともに

■熊本大学サークル「青い鳥」

古川 忠司

◆阿蘇に到着してオリエンテーリングの準備をしている時に、どんな子どもが来るんだろうと期待してました。

ただ一つ不安に思ったことは、子どもたちがうまくとけ込んでくれるかどうかということでした。サークル活動で行く所は学校なので、子どもたちは互いに友達同士だから、僕がその輪の中へ入れてもらうつもりで接しています。

でも今回の阿蘇の場合は、全国から子どもたちが集まって来るわけですから、僕が入る輪が出来上がってないんです。そういう条件で、どうやってとけ込んでいったらいいんだろうという不安でいっぱいでした。

でも、準備が終わって「子どもの国」に入

ったら、そんな不安はすぐに消えました。もう輪ができそうなくらい子どもたちは一緒にあって騒いでいました。

自分もまだまだ子どもだから、偉そうなこととは言えませんが、子どもの力ってすごいなあと思いました。

そんな子どもたちと一緒にあそBOYやトロッコ列車に乗れるって聞いた時は、自分の立場も考えなくて、本当にうれしかったです。でも当日は、責任を感じてしまって、あそBOYに乗り込むまでは、ずっと緊張のしっぱなしでした。阿蘇駅にあるアスレチックでみんなと遊んだり、あそBOYを背景にして写真を撮ったりしてとっても楽しかったです。

大山 貴子

あそBOYで楽しい思いができたり、花火大会で、安心して花火ができたりの、すべて、保護者の方たちの応援や、手助けがあったからです。

子どもの世話役という立場なのに、子どもたちと一緒に楽しむことができたのは、本当に大人のみなさんのおかげだと思っております。また機会があったら絶対にみんなに会いたいです。そして今度は、ちゃんとした人形劇を子どもたちに見せたいです。

♥私が青い鳥に入ったのは、小学生の時、親子劇場に入っていて大学生に遊んでもらったからです。あの時は、「大学生なのはどうして馬鹿なことをするんだろう」と思っていたんですが、今になってようやく分かったような気がします。馬鹿になって、自分も子どもになって遊ぶ。こうなれた時、子どもがこたえてくれるのだと思います。しかし、これは難しいことです。七月末に小学校をまわって来て、やっと子どもに慣れました。でも、子どもとの接し方については、いつも悩んでいます。

Weフォーラムでは、ほめるにしろ、叱るに

しろ、もっとうまく子どもたちと接することができなかつたのだらうかと後悔しています。本当は、みんな同じように遊ばないといけないのに、特定の子どもたちになってしまいました。ある子と話している時、他の子に話しかけられると、簡単な答しか返せなくて悪かつたと思います。準備不足の点が多かつたですが、それなりに一生懸命やつたつもりです。子どもと遊ぶ時は名前を覚えるようにしているのですが、今回は半分しか覚えられませんでした。もっと、みんなと遊びたかつたです。そして、みんなの写真を撮れば良かつたです。時が過ぎるうちに、みんなの顔を忘れていくのが悲しいです。でも、いい思い出です。最後の人形劇はアドリブでしたが、私たちがサークルで今、取り組んでいる劇も見たいです。また新しい子どもたちと会えるのを楽しみにして、「子どもに夢を」を目標にサークル活動をしていきたいです。

みんなが大きくなつた時、私たちのやつているようなことをやって欲しいです。

上村 和弘

◆子どもたちと三日間。これは、私にとつて初めての体験でした。青い鳥では、夏期巡回で

一週間の日程ですが、実際に子どもにも接することができるのは、一日×3、残り準備・移動日で、Weの時のように三日間連続は、初めてでした。正直言って、阿蘇の方に着くまでは、不安でした。しかし、子どもたちの瞳を見てみると、むずむずしてきて不安なんか、いっぺんでふっ飛んでしまった。子どもが、好きなんだと改めて感じました。それと同時に、自分も子どもなんだと……。

さて、人形劇はいかがだったでしょうか？まあ、即興ですからとも言えるのですが、脚本が、できるまで三時間ぐらい、二時までかかつたのですが。みんなで議論して、いい思い出です。ここで、あえて言いますが青い鳥の人形劇は、もつといいものです。

最後に、Weのお世話をなさつた方々本当におつかれ様でした。加えて、私たちに協力してくださつた方々に感謝し、再会に胸をふくらませてペンを置きます。

山本 真理

◆「阿蘇で子どものお世話係？ うん、いいよ」と二つ返事で引き受けたものの、最初は不安でいっぱいでした。子どもたち同士は初対面の子がほとんど。そして、私たちもこの

フォーラムに初参加。正に、ゼロからのスタートでした。

初日は、緊張のせいか、何かぎくしゃくしていました。でも、オリエンテーション大会が終わる頃には、随分和やかになってきました。そして二日目。午前中は、あそBOYとトロッコ列車。午後は、山登りというか、外をちよつと遠くまで散歩しました。これは、二つとも、一歩間違えば大事故になる可能性もあるので、非常に神経質になりました。でも、子どもたちは素直に言うことをきいてくれたので、特に事故もなく、楽しく過ごせました。そして、三日目。この日は劇の準備をしていたので、あまり子どもたちとは接することができませんでした。それに、早く帰ってしまう子もいて、少し残念でした。

熊本に帰って改めて考えてみると、この阿蘇での三日間は、とても楽しかつたです。いろいろ大変なこともありましたが、子どもたちの笑顔がすべてを吹き飛ばしてくれました。子どもたちが『阿蘇に来てよかつた』と少しでも感じてくれればいいなと思います。最後に、子どもたちのお世話を手伝つてくださった方々本当にありがとうございました。

有意義だったフォーラム

楽しかったフォーラム

—参加者アンケートより—

貴重な声をすべて載せるスペースがありません。無記名の方を省き声の一部を紹介します。(編集部)

1. フォーラム全体について

- 「楽しい集い」というより「学びの集い」であったように思います。どれもこれも学ぶことばかりで、またまた貯えることができました。参加者がみな個性的で、やわらかな感性の人ばかりで楽しかった。(川崎)
- 一点重点で、水の問題を掘り下げられたのはありがたかった。水は、今後の最も重要な課題の一つです。(村岡)
- はじめから目頭が熱くなることばかりでした。原田氏の講演で、企業や行政側の、人を尊重せぬ利潤追求のやり方に、人間がこれほどまで冷酷になれるのかと、この人間がつくる社会に未来があるのかと暗い気持ちになりました。一人芝居で水俣病患者に象徴される弱者の悲しみに胸えぐられました。

(川良)

● 昨年の大きなテーマである環境問題の水

テーマの講演・シンポジウム、今まで漠然と考えていたことを、整理確認して、具体的に自分の生活で何ができるのか、たくさんのヒントをもらいました。原田先生の話の中の便利さイコール不自然さという言葉が、耳から消えません。(重富)

● 熊本の皆様、ほんとうにご苦労さまでした。皆様の心配りの素晴らしさがフォーラムを盛り上げたのだと思います。楽しく、十分に精神の栄養を得ることでできたフォーラムでした。充実の二泊三日でした。有意義の二泊三日でした。参加できてほんとうによかったです。(高橋)

● 教職でもない私が、すっかり病みつきになりました。この姉妹愛にみちた雰囲気忘れられません。今年はずっと参加したこ

ともあって、テーマにひかれて、はるばるやってきた甲斐がありました。心の中にかかえきれないほどのおみやげをいただきたい帰ります。(山口)

● 去年初めて参加して、何も分らないで、それでもとても感激して帰りました。今年には熊本(地元)で実行委員をしながら、自分たちで作っているという感じがとてもあって、今「やってよかった!!」という気持ちでいっぱいです。三日間盛りだくさんのメニューの中、収穫がたくさんありました。子供たちに何らかの形で返していきたいと思います。(甲斐)

● 大変な充実感がありました。会場も適切なもので感謝します。私にとって水俣病は少し忘れたものになっていましたが、講演や一人芝居を見て、大変な問題を提起していることを改めて知りました。水俣から日本が見えるというのは、まさにその通りです。一つの問題を掘り下げ、それに深くかわり、世に提起しつづけることの大切さをかみしめました。(中嶋)

2. プログラムの中であなたの心に響いたのは

● 原田正純氏のお話。差別と人権などを持ち

出せば、忽ち異端視される医学界にいますので、原田氏のお人柄を前の方に陣取って、しっかり確かめたいと思いました。今も患者さんや地域住民に対して責任を負い続けていらっしゃる本当に篤実なお人柄を確め得た、と満足しました。

田中裕一氏のお話、自分の好きなことを、楽しみながらしていれば、こんなに多くのことができてしまうのか、と驚嘆しました。それにつけても、あれもいや、これもいやばっかりで、好きなことを思いつかないなんて困りものです。

●田中裕一氏の話。思っても実行できない。実行する勇気を自ら作るものは何か？ときつちりと考えることにした。(星野)

●水のサイクルを作ることと、水俣病での自然をよごすことは、天に向かってつばをはくのと同じで、自分に返ってくること：人間は身勝手に自分の今がよければと願っていることに、大きな落とし穴があるということ：もつと人間と自然を大きな視野でとらえなくてはならないことを学びました。教育も人間が生きていくトータルな力をつけてやらなくてはと思いました。(入家)

●原田正純氏が自分の問題として話をされた

ことに感激した。砂田明さんにも感激。

●私が広がりました。平井雷太氏が言われたように、人間は何かによって変わるのではなくて、広がって行くのだ。(波口)

●シンポジウムの広松氏の話。もつと広松氏の背景を知りたい。あれだけの仕事を、地方の小さな町でするのは大変なことだと思う。田中裕一氏の教師としての姿。(横山)

●被差別部落と家庭科教育の課題の一つである性差別解放が、分科会1で見事にしっかりと結びついている実践を知り、それを支えている人々と出会い、よかった。(若竹)

●原田氏の講演。あれだけの被害の拡大を許したものは何か！なぜ患者は隠れなければならなかったか！公害の前ぶれは、その地の伝統的生活文化が、外からの力で急激に破壊されることから、「一番の医療行為は工場排水をとめることであつた」という原田氏の言葉が重く沈みました。広松氏のお話も興味深かった。すごいと思つた。ぜひ「柳川堀割物語」を見たい。帰つてすぐ「ミニズと河童のよみがえり」を読みました。(村上)

●なんといっても原田氏のお話と砂田氏の

人芝居です。原田氏については全く知識がなく、二、三日前朝日新聞に著書の紹介があり、切り抜きをしていました。講演二時間半を非常に短く感じました。(野村)

●水俣病は単なる「一地域の公害としてではなく、現在人類が持ち得た高度な文明を問う直すものとして」新たな視点を開かれた思いでした。

カナダ・インディアナ、インドボパール
の化学工場の事故等々、地球上でまだまだ水俣病は起こっていること、その被害者は弱い貧しい人々であることなど、怒りと共に環境汚染に対する不安が高まります。

●原田、広松、田中三氏の講演から、自分の生活の再点検を、そして生徒達へ強く語るべきことを知らされました。(花田)

●「天の魚」は久しぶりに心から力いっぱい拍手をしました。視覚からの訴えは、さすがに強いと思ひ、生徒や自分の子どもにも見せたかった。(上山)

●どれもこれも感激の連続でした。少しは知っていたつもり、怒りも持っていたつもりが、水俣病についても、原発についても何も知らなかった。自分の無知さを思い知ら

されました。田中先生の取組みも勇気がいるすごいこと、本当にこんな先生が一人でも増えてほしい。

(紫垣貴)

●力を握っている人たちに、私たち民衆は簡単にコントロールされ、抑えられていく存在であることに気づいてからは、他の気づかない人たちに知らせ、手をつないでいくことが務めだと思ってきました。でも、自分たちの中から政治家を出す発想はありませんでした。中嶋里美さんの「みなさん、政治家になりましょう」の提案には衝撃を受けました。

(紫垣直)

●第八分科会で、中嶋さんが「一本の電話で人生が変わることもある、隣の人に一言声をかける勇気で人生が変わることもある」で、フォーラムに参加する意味、自分を広げていく意味がよくわかった。その日の夕食で隣の人と思いがけないすばらしい交流ができた。

(丸野)

3. フォーラムの運営、よかったこと・改善すべきこと

●運営が実にスムーズに、また内容も充実したものであったことは、準備段階から当日に至るまでの熊本実行委の力量によるところが多いと思います。欲を言えば実行委の

方たちと話のできるチャンスがほしかった。山形の時のようなオプショナルツアーがあれば、と思った。

(西内)

●熊本実行委の人たちは忙しそうで、二日夜、Weの会の集りに出られるのかと思っていたのに。それぞれの人が何を思い、どう生きているのか知りたかったのに、その機会がなかったのが、心から残念。

(波多野)

●「団体さん」という行動をとらず、あんまり継続的でなく、いきあたりばったりで、やれたから、よかった!! です。今までこんな経験がなかったので、もっとお知らせ、諸注意、きまりをなくしていけるんだ、と思いました。

(坂本)

●「自然との共生」は、私が今、家庭科と共に最も関心があること。これを水俣を中心に、ひとすじに突込んだ。講演、一人芝居、シンポジウム、田中氏の授業など、徹底した追求で学習できたことは、とてもよかったです。しかし学習が全体として受身で、聞くことに終始した。分科会などで外へ出て実際に体験し、熊本の食文化を掘り起こし伝える模擬授業などにも、触れてみたかった。

(入江)

4. 来年のフォーラムへの「意見・要望

●参加者がふえるように「いい発言」がたくさん引き出されるといいな。Weのよさは人間関係だといつも思う。年一度しか会えないのに、本音で語り合える。くらしを大切にしたい共通点が、こんなに素敵な関係を生んでいる。

(大場)

●首都圏という案に賛成。そして学校のことをテーマに取上げてほしい。今の学校の歪みと家庭科の必要性は表裏のような関係にあるので、そういったサイドからも家庭科の問題を検討したいと思う。

(梶原)

●これまでもWe誌上で、コンピュータについて考えてきましたが、この夏、便利さの中で、私たち人間の身勝手を浮きぼりにしたので、これからコンピュータとの付き合い、現在の問題点など討論したい。(今村)
●交流会は一日目に(も)何とかして入れていただきたい。せっかく全国の方がいらしているのに、語り合うチャンスがありませんでした。初参加なものですから。(森田)
●子供の中でも、でかい人もいるので、そのへんも考えてほしい。小さい子とずっと一緒だとつまらないので、予定なんか組まないでいいから、小さい子と別にして。(張)

フォーラム実行委員として

甲斐 真弓

◆何よりもまず、自分たちでつくったフォーラムなんだというので、どのメニューにも「身を乗り出して」参加できた。昨年、初参加の態勢では受け身で、「へえ、そうかあ」と皆の温かさに包まれて帰って来たのに、今年は一つ一つ作り上げていく楽しさを味わうことができたこと、「ここではこんなことを学びたい」という意識を持っていられたのが終わってからの満足感に結びついたのだと思う。

私自身、家庭科の分科会の担当をすることになって、先輩の先生の話を聞きに行ったり、サークルだよりを読みまくったりして、「学期末の忙しい時に」とその時は思ったが、実際新しい発見があったりして、結構面白かった。ただ、分科会の時間が全然足りなくて、せっかくなから課題を持って参加された方には、大変すまなかったと思う。もっとじっくり話を深めたかったのに！と残念!!

今の感動と思いを来年につなげて、「ぜひ来年も行こう!!」と心に決めた私だった。

片山喜美子

◆忘れもしない、あれは第一回の実行委員会の日でした。時間をとうに過ぎていのに集まったのは、たったの四人。フォーラムはできるのかいなというのがその時の感想です。

私の担当は、一人芝居と、分科会の司会。初対面の砂田さんと交渉し、車の手配をしなくてははいけません。交渉はすんなりOKをもらえたのですが、車と運転手がみつかりません。あの手、この手で、両方がみつかったのは、何と、フォーラムの三日前でした。全く冷や汗ものでしたが、多くの人々に支えられて実施できたという実感を持ちました。

結局、実行委員は二十名近くにふえたのですが、皆の重いおしりをたたき、緻密な計画を立て、連絡された桑畑先生の労が大きな位

置を占めたと思います。

ともあれ、『案ずるより産むが易し』ほんと昔の人は、いいことを言ったものです。私たちにだって、ちゃんんとやれたんだという自信が、今後の活動の糧になるのは確かです。

川上 恭

◆フォーラム初日の朝、はじめて受付名簿を見せられた私は、約二百名という意外に多い人数に驚いた。フォーラム参加も初めてであり、家の都合で実行委員会にも一度も顔を出していないので、何を基準にといい事はないのだが、驚いたとしか言いようがなかった。

「来年は熊本が会場です。簡保保養センターを貸切ります……」と一年前、桑畑先生が言われた時、貸切りなどして大丈夫かなど、内心思ったことが、杞憂であったのは何よりで、その陰には、各実行委員の並々ならぬ努力があったことを夜の交流会で聞き知った。

驚きはもう一つ、会員の中に、夫婦・家族が目立ったことである。生きることを、生活することを大切に考えている男性・女性、Weが大勢いることを実感出来てうれしかった。

いずれにしても、前述のような驚きのうちに受け付けの仕事は三日間絶え間なく、単純な

仕事でありながら、充実感を味わうことができた。帰途のコーヒーマシンの味が格別だったことは言うまでもない。

桑畑美沙子

◆九月になったとたん、しとしとと降り続く雨のせい、火の国、熊本もめっきり涼しくなってきました。フォーラムを終えて、一月近く過ぎた今、ほっとすると同時にあれやこれやと考えます。

多くの方々から、楽しかった、充実してたという多くのお便りをいただきました。しかし、それらに混じって、「ゆっくりと私語を交わすというか、くつろぎの時間が欲しかった」とか、「あまりにも整然としていた」とか、「遊びの部分というか無駄と思える空間も必要なのでは」という声もありました。

大ざっぱで、ゆたーっとしているつもりでも、まだまだ、バタバタ、せせこせこと余裕のない暮らしをしているんだな。豊かさを紡ぐといっても、ゆとりを求める余裕すら持てないところ暮らししているのかもね。それが反映したのかも……。などと話しています。

しかし、熊本でフォーラムをやったよかと痛感しています。サークルの中に「自分

たちでやれた」という自信と、次の行動への気迫が生まれてきているからです。また、県内の約百名強を含む多くの参加者が、今までの古い家庭科のイメージを払拭し、新しい家庭科のイメージをつかんだらと思うからです。

また、徹夜でも語りあかせるようにと、去年の大阪の参加状況から二百名が宿泊可能な施設をほぼ全館貸し切りとしたのに、なんだか今年は、缶ビール片手に床に寝ころびつつ、年に一度の語らいの時を持った人を見受けませんでした。みんなお行儀がよかったです。でも、徹夜でもWeのあり様を語る常連の何人かがいなかったし、おまけに、夜ふかしが苦手でも年に一度の語らいの時を一晚は持つ私も次の日が気掛かりで十二時には寝てしまったからかもしれません。実行委員長としては、ほんとに楽しさせてもらいました。前例にこだわらず、自分たちにもやることをみんなでもやり、思いを行動で表現する、しなやかでしたたかな人々が集まった実行委員会だったからでしょう。感謝しています。そして、実行委員の相互の間で、より深い信頼関係や新たな出会いが生まれましか。きつと、私たちのこれからの人生を豊かに

してくるでしょう。

さらに、フォーラムのほぼ最初から私と一緒に参加している洋一郎が、今年は地域のフットの試合に出るために「一日目の夕方に、一人で阿蘇まで来る」と言い出したことや、私がバタバタしてもまとわりつくことなく子ども同士の遊びに加わっていたことなど、それなりに自立の様相が見られ、親としてうれしかぎりです。

榊原 和子

◆「フォーラム実行委員会としての感想を！」と求められても、正直言って、何も語れないというのが実情です。何の仕事もしていない実行委員会としての感想ですが（もちろん、こんな私のような実行委員があり得るということ、その分、精力的に責務を果たした実行委員の方がいらっしやるということなのでしょう）、開催地の実行委員があまり動かないと、運営上、べつだん支障をきたさないという、Weフォーラムの側面みたいなものを感じました。つまり、参加者の大多数がお客様気分みたいな消極的な立場でなく、むしろ逆の積極的な何かを求め、あるいは何かを広めようという強い意識を持って集まった人たちな

のだということです。

終わってみれば、私自身が一番、お客様気分でいたみたいで……。パワフルで、エネルギーが、ほんのちよつとですが、軽くなつたような気がしています。

坂口 清美

◆熊本市内まで二時間半という距離と余裕のなさから、実行委員会に参加せず、自分ができることがあれば手伝おうという軽い気持ちでいました。前日から当日にかけての準備を手伝っただけで、実行委員に名を連ねさせてもらい、感想を求められ、正直なところとまどっています。今になってみると、無理をしても、最初から参加していればよかつたなあという気持ちです。

初めてのWeフォーラムに参加しての感想はみなさん生き生きとしてすごいなあというひと言です。いろいろな活動について知り、いろいろな活動をしている人々、考えにふれることができ、私にとって大きな収穫でした。

坂本 智子

◆中学校の家庭科教師として二年目を迎えた

私は、男女共学で柔軟かつしたたかな家庭科

像を示すサークルやWeに、新鮮な感動を覚えていました。何とか少しでも仕事をしようとして実行委員会に参加していたのですが、途中で三人目の子どもを妊娠、切迫流産で入院などハプニング続きで、仕事半ばで、未永さんに預けることになり、当日子ども二人を連れて参加するのがやっとでした。ありがたいことに、Weに集う仲間たちは、そんな私たち母子を暖く見守ってくれ、久しぶりに勉強ができました。未永さんと担当した「土と命を守る……」の分科会は、予想を大きく上回る参加人数の中、自分の矛盾を晒け出して話される緒方さんの話は、消費者の「おいしく安全な野菜を安定供給で」という願いが、公害を生む身勝手なものであることを知らせるものでした。気楽な運営の一方で重い実践課題を与えられました。

佐川加寿子

◆世の中を変えていく運動は、あまり気負わずに、楽しくやっていった方が、長続きしていいんじゃないか。挫折しなくて、したたかにいくんじゃないかと、Weの集会をやってみて、そう思った。

他の地方の人々の運動はさすがではないのじゃないか。熊本の特に私のかかわってきたものは、いつも肩間にしわをよせて、し

かつめらしく気負っていたようだ。分科会の報告にしても、私自身のはあまりにも面白さにかける。たいいてい熊本のやつはいつだつてそうだ。やっついていて明るさがない。

なにかをやっつけて落ち込むことが多いよな気がする。そして性懲りもなくまたはい上がってやっていた。責任感を感じて。

Weの集会で得たものは、もつと、自分のペースにあったところで楽しくやっつて、一生続けていこうということだった。

未永知恵美

◆「何で駄目とね？ 何でわからんとね？」はがゆい思いに唇をかんだ一学期末。学級のほんのささやかな取り組みが、職員会議で否定された。井戸端的には励ましもあったけれど。スニーカーすら認めない職員にとつては私は変わり者らしい。先生つてのは結局、管理する人の集まりらしいと痛感し、負けてなるものかと別作戦に切り換えた。このような状況下での、しかもフォーラム実行委員でありながらほとんど仕事をしなかつたという肩

身の狭さも抱きながらの参加だった。

実に多くの人々が、様々な立場で環境問題を考え、女性解放を目指し、人権を守る事をライフワークとしている。そんな人々との出会いに励まされた。当然のことを当然のこととして語り合えた。仲間が全国で頑張っていることに、ほっと心が安らいだと同時に、再度自分の視野の狭さに落ち込んでしまった。己のつまらなさに気付かされたフォーラム。頑張らねば。

S・G

◆阿蘇の三日間は慌ただしかったが、心身共に収穫は大きかった。全国のいろんな人々と知り合いになり、また興味深い話をたくさん聞けたことは、三日間ですごいぜいたくをした気分だった。

実行委員のメンバーとして名前はあったが仕事もまともにできず、いろんな面でまわりの方々に迷惑をかけてしまった。子どもも活動の担当だったが、事前の準備が思うようにはかどらず、直前になってどたばた慌てた。子どもの実態も知らずに阿蘇に乗りこんで不安ではあったが、スタッフの学生たちががんばってくれたので、事故もなく、子どもたちと

楽しい三日間が過ぎた。

いろんな人の心に触れ、また新たに生活をみつめる目ももてた。同時に、自分がまだまだ勉強不足で、知らないことが多いような気がした。唯一つ残念なことは、写真撮影に没頭して、講演の内容が半分も頭に残ってないことだ。

竹田 幸子

◆初めてフォーラムの実行委員として参加しました。計画する中で、発題者や実行委員の方、ほんとに楽しく、即行動に移す姿に舌をまき、「やっぱりやらなくちゃ」と思いつつも欠席が多く、名ばかりの実行委員で、当日は書籍販売の係をしました。

書籍は実によく売れて、相対不足し迷惑をおかけしました。お詫びします。

「水侯病と水」は熊本にびつたりのテーマで、原田さんの講演、砂田さんの一人芝居、田中さんの授業、シンポジウムを通して、同和教育、教師としての原点を考えさせるものばかりで、エネルギーを蓄えることができました。

分科会は「女と男、女と女、男と男……」に参加夫婦は一心同体でなく、一定の距離をお

き、認め合う関係など、楽しく学びました。

教師以外の人、家庭科以外の若い教師に、もっと呼びかければよかったというのが心残りです。

多田隈和子

◆一冊の本から多くの仲間を、全国から集める。そんな魅力あるこの集い。誰に指図されることなく学びあえるすばらしさを、尊く思いました。また、来られる方の生き生きとした姿に、思わず自分の姿勢を直しました。

皆、それぞれの仕事の中で、段どりよく準備・運営、まとめをされる仲間の方々の姿は他のどの会でも見なかったことでした。

ただ、足手まといになることが多かった私でしたが、皆さんの意気さかんな積極性に、気分はひたれても、実動の伴わぬことで、ご迷惑をおかけしました。

Weフォーラムの参加は初めてです。全国から来られるにふさわしい場所であり、なおよかったことは、全体計画・運営とも、皆さんから喜びの声のみ聞こえ、充実していたと思います。

「水侯病」を原点にすえたこの会の密度の高い内容は、もったいなく、もっと多くの人に

と思われました。公教育の段々薄らぐ中で、もつとしっかりふんばって勉強していかねばならぬことを思いました。水俣について勉強していく機会を与えられたことに感謝しています。

分科会は「熊本の家庭教育」に参加し、熊本の若い先生の地についた実践と発表に、すごさを感じました。三日間、息つく間もない日程でしたが、楽しく、多くの人たちとの出会いを学びあえる充実感でいっぱいでした。何を聞いても、自分の学びの浅さのみが見えてくる思いでした。

澄んだ空気と阿蘇の山々がより大きく見える中で「どの内容も、最高によかったよ」という声に、ホッとしました。これからが大変だと思いつつ、生徒の中にどう生かしていくかの努力がいるし、貯えたことのどのくらいが、自分のものになっているのかと。

一人一人、力いっぱい何ごとも吸収されていくこの会のあり方に、自分をやり直す機会だったと感謝しています。お疲れさまでした。

立山ちづ子

◆県外、そして県内から、たくさんの方があって、ほっとしています。

盛りだくさんで、参加経験の多い人たちが「出会う」ことが少なかったとの反省が出ていました。私も参加者と充分話しこむ時間ももつと持ちたかったとの思いが残りました。県内の初参加者から、都会の人たちまでさっぱりして生きているのねえ、私なんかしげらみの中でうろろろしているのに。励まされたあ」とNさん。「この夏一番充実した会でした」と後日葉書を下さったT氏。家庭部会の会合で「おもしろかったよお」と友人に話しているHさん。夫との関係のあり方を真剣に論じていたWさん。と、県内の友人たちは刺激をいっぱい受けていました。

分科会「女性史研究」の世話係としては、サークル外の参加者が少なくて残念。高群逸枝の平安鎌倉時代の研究で、夫が妻を訪ねる結婚形態の事例はごく少数であったにもかかわらず、多かつたとし意図的に整理していることが明らかにされました。

「実証」の姿勢を改めて大切にしたいと思っただけでした。

中島真一郎

◆夏の夏季フォーラムの実行委員会の一員としての参加は、私にとって偶然的の成りゆきの結

果であり、学校の教員以外の唯一のメンバーとして係わることになった。三日間の内容は、熊本・九州で実施されるにふさわしく、水俣病・水問題を中心に充実した企画が実現できた（現在の最高の内容が実現してたというのはいちひみすぎかもしれないが）、自負しています。そして、むろん二百名をこえる熱心な参加者の熱気と情熱があればこそ、このような自負がなりたつのです。反面、企画が詰め込みすぎとなり、学習（知ること）中心となり（教師の人々にとっては違和感なくとも）、もう少しゆとりと脱線があってもよかったです。命が大事」の司会を担当し、そちらに出たのですが、個人的には、「夫婦別姓」の分科会や、予備校講師をしている関係上、「予備校からみた公教育」についても意見をのべたいので、次の機会には、別の形で参加したいと思っています。

榎本希久子

◆「この本下さい」

講演後は、必ず不足してしまう講演会の著書。すぐ前にある土産物販売店には背を向け、何回も顔を出され、何冊も購入していか

れる参加者の方。

売店の売子さんも「私たちも購入してよいのですか」とたくさんの本を物色しておられました。

暑い夏休みに、意欲燃やして、阿蘇に集められた参加者たちの元気なこと。

本代の整理等で、講演や分科会には充分参加できませんでしたが、フォーラム成立のために微力ながらお手伝いできました。

水問題、畜産物・農産物をまともにするために頑張っている人たちに接し、私たちの郷土でも一人でも多くの人と手をつないで生命を守っていかねばいけないことを考えました。

二十年前に小一で受け持った教え子夫婦が、面会にきてくれたことも幸せなひとときでした。

日高生登美

◆六月十六日出産予定。八月のフォーラムは無理だから…と思っていたら、「実行委員会には参加できるでしょ。早めに産んだらフォーラムにも参加できるわよ」と桑畑先生。一月の寒い土曜日、教育会館での会に参加して風邪をひいてしまったりしながら、春の実行委員

会まで参加。みんなそれぞれ思いつく最高の案を出し合っていく。これが全て実現したらとてもせいたくな会になるなと思いつながら、おながが大きくなって実行委員会から遠ざかること二か月、明日が予定日という日の朝、

「手伝ってくれないか」との桑畑先生からの電話。飲み会に送ってという夫の頼みも、長く運転したくないからと断っていたのに、桑畑先生には「はい」としか言えなかった。チラシを折って封筒に入れてるうちにくたびれて、宛名は家で書くことにして帰宅する。入院する前に（封書を）出してね」と言われながら、仕事が進まなくて、と恐縮する私に、「いいわよ、また来週には板梨さんが産休に入るから、頼むことになってるのよ」……。次の日宛名を書き、投函して、その次の日入院、出産したのでした。

深水 雅子

◆教師四年目、目先のことに追いまくられて学校の中に埋没しそうな時、Weのフォーラムにはじめて参加しました。

一日目、原田先生の講演の進行係で随分と緊張しましたが、もりだくさんの三日間を過ごすうちに、強烈な感動をおぼえるシーンに

幾度となく遭遇し、日程を終える頃には頭がリフレッシュしてすがすがしい気分、エネルギー補給されて満ち足りた心地よい気分になりました。

一方、子ども活動の企画にも参加しましたが、フォーラムに参加した子どもたちとどのように交わるか考えた末、結果的には大人たちのフォーラムと切り離れた形の企画になってしまいました。貴重な講演も聞きたい、子ども活動にも参加したいとなると、子ども活動を全体のプログラムにドッキングさせて、大人も子どもも一緒に楽しむ他はないなと思います。次回以降の企画を楽しみにしています。

参加者全員で作り上げたフォーラム、私もその一員に加われてよかったです。充実した時をありがとうございました。

二見 妙子

◆Weに参加したのは初めてだったので、実行委員といっても、よくわからず、ぼんやりとやっつけてしまいました。あんまり大変な仕事もしなかったのですが、その分他の人に、しわよせがいったと思います。とくに、子ども活動の人や受付係、本を売る係の人は大変だったと

思います。今度からは、こういうところは交
替でやれるようにするといいですね。私は田
中先生との連絡係だったので、何度も田中先
生と話しをする機会がとれて、とても勉強に
なりました。もの事を小さくとらえて、ぐちっ
ぽくなつてしまふ私は、田中先生の話の聞い
ていつも元気づけられます。とくに今回の講
演はよかったですね。会場が集中しているの
がわかつて、うれしくなりました。御本人も
「とてもいい会でした」と奥様におっしゃつた
そうで、それをきいてまたまたうれしくなり
ました。来年もいこうかなあと思つています。

古沢千代勝

◆実行委員の一人として、二日目の八月五日
の「朝の散策」と午後の子ども活動の「山登
り」の案内を引き受けた。

朝の散策は、十名位の参加があつたが、五
人程元気のいい方がおられて、「小走りで仙酔
峡へ」という。私の提案に賛成されたので、
残りの方には歩いてもらつて走り去つた。配
慮が足りなかつた。「散策」なので、歩きな
がら阿蘇の雲海をながめたり、足元の植物を
賞でながら、神話や伝説の話でもすれば良か
つたと悔やまれる。

山登りは、子ども十五名位に引率の大人四
名であつた。はじめ仙酔峡にのぼるつもりで
あつたが、日差しが強烈で落伍者も出て、国
立青年の家の裏の丘の一本松までで、ここぞ
虫と遊んだ。

日射病などもあるので、途中は車を利用し
て、目的地で歩きながら自然の観察をする方
法がよかつたと思う。目的地も小嵐山とか大
観望も検討すべきであつた。

やはり、計画の段階より参加しておかない
と、こうした悔が残ると反省させられた。あ
まり役に立てずにすまなかつたと思う。

弥富 美枝

◆We フォーラムの実行委員にはなつたもの
の、結局たいした仕事もしないままに終わつ
てしまつたような気がします。でも、実行委
員をやつていたから、フォーラムがより一層
意義深いものになつたような気もします。い
つもお客さんのように研究会等に行つて話
を聞くだけなのですが、今回は、事前の話し
合ひで講師を決めたり、運営を考えたりして、
自分たちで作らあげたフォーラムに主体的に
参加できたように思います。そういつた点で、
たいしたことではできなかったのですが、実行

委員をやつてよかつたと思つています。来年
は実行委員ではありませんが、主体的に参加
できたらと思います。

山野 幸司

◆We は、出会いの場であり、オアシスです。
みなさんが、それぞれに自己を持つておられ
ますので、みな美しく輝いて見えました。特
に、自分の発想や価値が問われるようで、緊
張感もあり、楽しい会でした。We は、真にWe
であり、だれか一人の力によつてではなく、
参加したわれわれによつて、創り出されると
いう点においても、魅力的ではないでしょう
か。We で追求している課題が、即ち人類の今
かかえる問題でもあり、こうした会のエネル
ギーを日本各地に創り上げることができた時
に、日本は変わるのではないのでしょうか。自
分の立つ位置から、問題をじっくりと掘り下
げると、それは地下水脈へと届き、それが、
みんなの流れとなり、連帯・発展していくの
ではないでしょうか。We パンザイ。

星の降る阿蘇の深山に向くわれを
でもしか教師と呼ぶ声のする

◆Weフォーラムの開催地が阿蘇と決まり、桑畑さんの「熊本で百名集めよう」の一声で、私は、集会があると聞くと、ピンクのチラシを持ってPRに出かけました。この仕事を通して、教組の仲間の温さを、改めて感じました。ある仲間は、軽トラックで看板を運んでくれました。また、ある仲間は自宅がすぐ近くののに、子ども連れて宿泊してくれました。当日の仕事は、一番頭脳を使わずにできそうだと、ずるい考えで受付をとりました。いざ受付を始めたところ、予期せぬ仕事がいっぱい出てきました。いや、私が出しやばって仕事を見つけてやったのかもしれない。でも、あの仕事をやったおかげで稲邑さんを知ることができました。物忘れがひどく、それぞれに私に、ちよっぴり似てらしたので、一層親近感を感じたのかもしれない。参加費はたっぷり払って、二泊三日受付のみ精進し、分科会には不参加だったのに、満足感でいっぱいだったのは、なぜだったのでしょうか。それは、きつと熊本の仲間の「来てよかった」「すばらしかった」「熊本の家庭科サークルはすごい」「Weってすごい」などなどの感想を聞くことができたからでしょう。

● 実行委員会日誌

'89夏季フォーラムを熊本でやることが、'88能勢フォーラムで正式に決定。しかし、実は、それに先立ち、熊本県家庭科サークル内で、「'89フォーラムを熊本でやる場合、サークルが中心になってやってもいい」という了解を得てありました。そこで、熊本に帰り着くやいなや、直ちに行動開始です。

まず、会場の手配です。二百名程度収容できて安い宿泊施設という条件で、阿蘇方面を探しました。幾つかの候補を見つけ、電話で問合せたところ、阿蘇かんぼセンターが浮上。そこで、八月十一日に立山さんと下見にでき、施設を見学し、食事内容や料金を詰めて、全館を予定日の三日間、全日予約しました。この下見の結果は、立山さんが詳細にまとめてくれたので、第一回実行委員会の折に実行委員に資料として配布しました。

次に、実行委員会作りです。Weの発刊時からの購読者、さまざまな市民運動にかかわっている人など、約二百名に実行委員としての参加を呼びかけました。しかし、結果的に実

行委員は、大多数のサークルのメンバーに、その人たちとの個人的な人脈で加わった数人となりました。

実行委員会は、十一月、一月、四月、五月、六月、七月の七回開きました。毎回、自己紹介を兼ねた出席者の確認、その会までの経過報告の後、審議に入り、次回の予定を決めて、散会です。この内容は、次回実行委員会への案内も兼ねた実行委員会便りとして各人に郵送。各回毎の具体的な活動は次のとおりです。

一回目……日時と会場は決定していること、かなりの人に実行委員の呼びかけをしたが、あまり期待できないことが報告された後、日程と大まかな内容案を審議、各セクション毎の担当者、実行委員長と事務局長を決定。

二回目……前回の案について各担当者からその後の取り組みについて報告、首都圏実行委員会やウイ書房の意向について若竹さんが説明した後、日程と講師や問題提起者、それらの方々へ頼みに行く人、テーマ(案)を審

議しました。

なお、この実行委員会には、半田さんの参加が予定されていましたが、健康上の都合でそれが無理となったため、急拠、首都圏実行委員会を代表して若竹さんが参加。そして、この前日に、若竹さんを阿蘇のかんぼセンターに案内し、会場の下見をしてもらいました。

三回目……消費税込の料金などについてのかんぼセンターへの問合せ、首都圏実行委からの連絡、関西から分科会設定についての申込、各セクション毎に問題提起者らに依頼した結果についての報告後、各セクションの名称、講師謝礼金、必要な機器などを検討。

四回目……ちらし用原稿の送付、問題提起者らへのWeからの依頼文送付、全体のテーマの決定、日程や内容についてのウイ書房の意向、首都圏実行委の動きの報告後、各セクション毎の係、図書販売、受付などの役割分担、機器などの準備について、立て看板などの手配先、その係も討議し決定。また、この段階での決定をもとに作ったフォーラムへの案内ビラ二千枚の配布先や方法を討議し、情宣の基本方針、各自が誘う目標人員が決定。子ども活動については、一回目から継続審議し取り組むものの、この間見直しゼロの状態

が続行です。

五回目……正式ビラの配布方法、各自の誘う目標人員を決定し、その状況を隔週で集約することが決定。なお、Weから届いた正式ビラは千枚だったので、増し刷りし、配布した数は計四千枚でした。また、開会行事の流れ、役割分担など細部について決定。分科会「熊本の家庭科教育」の内容について審議。

子ども活動の実働を担当してくれるお兄ちゃん、お姉ちゃんが決定。首都圏実行委と連絡をとり、子ども活動の内容も大筋で決定。後日、子ども活動の担当者らを阿蘇のかんぼセンターに案内し、会場下見し、子ども活動のイメージ作りを頼む。

六回目……その後の子ども活動の動き、報道関係への手配、七月二日現在の申込状況、熊本での集約状況などの報告後、フォーラムの流れにそって準備状況を確認。分科会「熊本の家庭科教育」の内容について審議。

このような実行委員会を経て、フォーラムの前日に、数人の実行委員が集り、持参する道具や機器類を揃えたり、道案内の看板を作って準備。また、子ども活動の担当者らも集り、細部について検討し、準備。当日は会場に各自午前十一時に集合し、会場設営。

フォーラムが終わりました。多くの方々からねぎらいの言葉やお便りをいただきました。実行委員会としては、この後、それぞれがかかわった方々にお礼状を送付し、フォーラムの感想を書き、実行委員の役が終了です。

九月二日に実行委員会の打ち上げをやりました。「やって楽しかった」「残り少ない教師生活をやってゆくエネルギーが湧いてきた」「今度は、実践集を作ろうか」などなど、話が盛り上がりました。

今、いろいろなことが走馬灯のように浮かびます。四、五人しか集まらなかった最初のころ……。それが、当日には、実行委員が二十名近くにもなっていました。問題提起者として依頼した人まで実行委員になり、わたし達の「うーばんぎやー(いい加減)」な部分をカバーして下さいました。また、サークルでは、このフォーラムをやったことで、共学の家庭科に推進していくエネルギーが、一層蓄積されつつあるように感じます。共学家庭科への理解者も増えました。新たな第一歩が始まりそうです。

(桑畑美沙子)

●フォーラムの記録 (各721円)

- 87/冬増 ゆたかさを紡ぐー山形のくらしから
・家庭科にとって地域の生活文化とは
佐藤慶子
・くらしの場から世界を変える 星 寛治
88/冬増 ゆたかさを紡ぐー一人が人と向きあうと
ころで
宮迫千鶴
・「家族」であることと「個」であること
・シンポジウム 「今、教育は」
- くらし、環境
88/2.3 住むということ (¥500)
85/11 みのりの秋に (¥530)
85/12 人間と土を生かす (¥530)

- 86/1 くらしの文化を探る (¥530)
86/2.3 水はいのちの泉 (¥530)
87/8.9 「原発」知らなくていいのか (¥530)
87/12 国際居住年って何だった (¥530)
88/10 食と環境といのち (¥550)
89/1 くらしの論理を創る (¥550)
- ◆人間関係
84/6 地域に生きる (¥530)
84/10 支え合いつつひとり立つ (¥530)
84/12 つき合いを考える (¥530)
- ◆単行本
「子ども発、大人へ」学習の主人公&小沢牧子
(1339円 円260)

★バックナンバーのご案内★
ご注文は、最寄りの書店(地方小扱い)または、料金をおそめの上、直接ウイ書房へ。

WE EDITOR'S NOTE

◆三日間の密度の濃い、充実したプログラムを、全体会を中心に、再構成しました。フォーラムの大きな柱である子どもプログラムの部分と、山のような写真の中から、ほんの一部しか紹介できなかった悔しさが残ります。

原田正純氏講演、シンポジウムでは、スライドを縦横に使用してのお話しを、記録の方が苦勞して、まとめて下さいました。原田氏からは、この号のために写真・図版をお貸しいただきました。厚くお礼申し上げます。(青木)

◆受付で、食事・宿泊人数の確認と、右往左往しているうちに、アツという間に過ぎた三日間でしたが、素敵な出会いは山ほど…。熊本の家庭科サークルの

温かい雰囲気(年長の先生方が黒子役になり、若い先生方の生き生きした活動を支えていらしたことが印象的でした)、また、昨年の能勢のフォーラムの仕掛人だった関西の方々が、バスをチャーターして参加、蔭に日に支え盛りたててくださったことなど、活字にはなりにくい動きがまた、うれしかったのです。(稲邑)

◆南国の太陽、緑の稲田を渡る風と匂い、広い空、阿蘇の山々、今思い出しながら懐しさがこみあげてきます。人工的な音がない世界って本当に心が安らぐんです。阿蘇にフォーラムを呼んで下さった熊本の実行委員会の方々、本当にありがとうございました。場所を変えて行われました。フォーラムは毎年新しい表情を見せ

てくれる。今年は、若いパパさんたちの、ごく自然に子どもと接する姿を見て、男の子育てと断わるのが仰々しくらいでした。(中野)

★今年のフォーラムが、実に内容豊かなものであったことを、この号を編みながら再確認しました。水俣に焦点を絞って、様々な角度から迫ったこと、講師陣が素晴らしかったこと、熊本の実行委員の方たちの見事なチームワークなど、理由をいくつも挙げる事ができます。参加者名簿に熊本、熊本：ずらりと並んだ方たち、圧倒されました。

はるばる九州まで、高い旅費を払って集まった方たちもきつと満足されたことでしょう。あの日の感動を再びここに…。(半田)

新しい家庭科 発行所/(有)ウイ書房

Vol.8 No.10 1989年12月20日発行 〒182 東京都調布市西つつじヶ丘2-25-14

定価721円(本体700円+税21円)送料共 ☎03(326)1380 郵便振替 東京6-59867

年間購読料・定価7107円(本体6900円+税207円) 第一勧業銀行 調布仙川支店 普預1075292

編集兼発行人/半田たつ子 印刷所/(有)岩佐印刷所 〒112文京区春日1-6-7

新刊ご案内

人と人とのかかわりを紡ぐ

「先生、おはなしー」とせがむ生徒たちがいて
自らの旅や、出会いの決定的瞬間を語りかけたい教師がいて
教室に、いのちが通い

好奇心が息づき

目が輝き、心が開く

そんな希有な教室があった。

語る者、聞く者を結んだ 珠玉の小編20

それは、また、読む人の心もとらえて離さないだろう

● 児玉澄子著

■ B 6判 / 224頁

教室のミニ舞台から

こぼれ話20

児玉澄子

教室のミニ舞台から —こぼれ話20—

■定価 1350円(税込) 千260円

〈著者の言葉〉

「先生のお話を聞くと元気が出るんです」というコメントに、逆に、元気づけられて、授業の合間に語ったおはなし20編一退職記念にまとめてみれば、30年間の高校教師としてのエッセンスが、自ずとにじみ出たように思う。

既刊

● 児玉澄子著

■ B 6判 / 224頁

若^{すがた}いのちの像 —私のカウンセリング入門—

■定価 1339円(税込) 千260円

色眼鏡をはずして、自分の眼で、自分の心の中に起こっていることを静かに見つめよう。自分に都合のよい論に乗ったり、あれこれとがなり立てる、騒音にしか過ぎない情報に振り回されたりすることなく。

■直接小社にご注文の場合は、書名、冊数および住所・氏名を明記の上、代金に送料を加えた金額をお送り下さい。

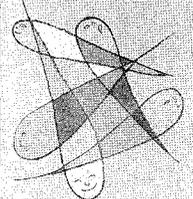
■二冊以上の場合の送料は、実費をご請求いたします。

■電話、はがきでお申し込みの際は、代金、送料を記入した振替用紙を同封いたしますので、到着次第お支払い下さい。

若い^{すがた}いのちの像

私のカウンセリング入門

児玉 澄子



ウイ書房

〒182 調布市西つつじヶ丘2-25-14 ☎ 03-326-1380(振替・東京6-59867)